

爆豪勝己のサイドキックは元CP0

規律式足

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

爆豪勝己にはサイドキックがいる。

そいつは幼馴染で忠実で天然で無駄に闇が深かった。

緑谷 来久（みどりや らいく）は未来のナンバーヒーローのサイドキックになる。

目次

第24話	109
第23話	104
第22話	101
第21話	98
第20話	94
第19話	91
第18話	86
第17話	82
閑話 三人称視点	77
第15話	71
第14話	66
第13話	60
第12話	53
第11話	46
第10話	42
第9話	38
第8話	34
第7話	28
第6話	24
緑谷出久視点	20
第4話	15
第3話	9
第2話	4
第1話	1

第39話	第38話	第37話	第36話	第35話	第34話	緑谷出久視点	爆豪勝己視点	爆豪勝己視点	第30話	第29話	第28話	第27話	第26話	第25話
187	181	177	173	168	164	159	154	148	139	133	127	123	117	113

第1話

緑谷来久の始まりは、必死な彼の叫びからだ。

「うじうじ悩んで下向くくらいなら俺のためにその力を使いやがれっ
!!」

前世の自分の行いに絶望し、生きる価値などないと俯いてばかりいた自分。

そんな自分に強引に手を引いて前を向かせたのはヒーローに憧れる双子の兄ではなく幼馴染の少年。

同年代の中でなんでもできて周囲の中心人物的な私の強い性格で、気の弱く自己主張が不得手な兄や周囲に無関心で感情の起伏乏しい自分を蹴飛ばしながらも引っ張っていた。

それが個性診断テストによつて、無個性な兄を時に暴力的に見下すようになってしまったが。

自分は個性はあると診断されたが詳細な事は不明だった、身体的な特徴としてあるが外部に異能としてでないため、条件が必須なタイプか、精神に関わるタイプの可能性を提示された。

まあ結果として自身の個性は『前世』、前世の自分の記憶を完全に思い出す個性だった。

そしてその日から生きることが地獄になった。

前世の自分である誰かは今の自分が生きる世界とはまるで別物のいわゆる中世ファンタジーのような世界に生きていた。

いや、生きてなんていなかった。

生きているといえる程、そいつには何もなかった。

ただ政府の命令に従い、任務をこなす道具。

いかなる非道もいかなる所業も何も感じることなく実行する駒。

天竜人、そう呼ばれる醜悪な子供たちの望みを叶える手足。

三十年に満たない生涯の中で、どれだけ血に塗れ、悲鳴を響かせ、

涙を流させ、絶望を生み出してきたのだろう。

その人生の最後が、英雄ガープと海賊ゴール・D・ロジャーに破れたロックス海賊団の残党で筆頭格とされるエドワード・ニューゲートによるものだったのは救いだったのだろうか？

息子を殺された怒りに震える彼に討たれたことは。

最後の瞬間であるその一刹那だけでもとうに失った愛を感じることもできたのは。

かつての自分の記憶に塗りつぶされた今の自分。

幸いなのはかつての自分に自我と言えるほどの自意識がなかったことか。

それでも記憶が、記憶にあるあまりにリアルな情報、匂い、感触、音が、今この場で自分がやったのだと錯覚するほどに伝えてきた。

そうしてただ僕は僕のまま、前世の所業と見てきた光景に打ちのめされた。

無個性であり、夢を絶たれた兄とともに。

そんなロクに食べもしないでやつれていく一方の僕にしつこいくらい構ったのが幼馴染の爆豪勝己だった。

兄はまだ立ち直ってなかったし、母は事情を話さない僕より兄の面倒を見ざるえなかったからだ。

何も話さない僕に絡み、時に暴力やら個性を奮ってまで追求した。

合間に、このままだと死んじまうぞと泣き叫んでいたような気がするけど。

そんな日々が続きいよいよ根負けした僕が訳を話したあとと彼は言っただ。捨てるなら超越せと、俺がお前を使つてやると。

多分、それで救われたんだ。

前世と在り方はそう変わらなないけど、そんな形でないと僕は生きること肯定できなかつたから。

爆豪勝己はヒーローになる。

爆豪勝己はナンバーワンヒーローになる。

爆豪勝己はオールマイトを超える。

爆豪勝己はこの世界に名を馳せる。

僕はそんな彼のサイドキックだ。

彼の栄光を僕は支えるんだ。

そんな風に生きると僕は決めた。

横暴で勝手に暴力的で口も悪いけど、

差し伸ばされた手の熱さと、僕を助けようとする彼の行動は本物
だったから。

さて体を鍛えよう、強くなる術は知っている。

まずは体を作り、六式を修め、覇気を極める。

爆豪勝己の野望が僕の導べなのだから。

強引で横暴だけど天竜人に比べたら彼は遥かにマシだしね。

第2話

多様な世界だよな。

既に十年以上も生きているのにも関わらずそんな風に思う。

前世の自分は命令をこなすだけの存在であったのに命令をこなすために蓄えられたため知識だけは豊富。

そのためか中学二年生となった今でも前世の方の世界を基準に考えてしまうときがある。

超人系の悪魔の実際の能力者が能力を発動している時のような姿が当たり前の人々が暮らす社会。

その様々な姿はかつて任務で訪れた魚人島を思わせるものだ。

この世界なら魚人や人魚達とて差別を受けないのだろうか？差別が悪いことという常識がようやく身についてきた自分は今更ながら魚人達の扱いが非道だったと知れた。向こうでは奴隷など当たり前だったのだから。

そんな思い返せば鬱になるだけの記憶をそっと閉じて聞き慣れた爆音の方を向く。

見れば幼馴染であり将来のボスである爆豪勝己が双子の兄である緑谷出久のヒーロー分析ノートを個性で爆破していた。

またやっているのか？

イジメなんて大分前にやめた筈なのにまた絡んでいるのだろうか。先程の進路云々で兄の英雄志望はネタにされていたがその勢いだろうか。

何故かノートを持つ手が震え表情が引きつっていて鳥肌も立っているが。

「行くぞ来久」

「いやノート爆破はやり過ぎでしょうボス」

器物損壊の現行犯だこれ。

割と個性の暴発でスルーされるけどこの手の話。

「精神的苦痛でこっちが訴えてえよ（ボソツ）」

「？」

「テメエも双子の弟なら、無理なことは無理だと教えてやれよ」

「いや(あれだけヒーローのおっかけやっているのに関わらず)模試で合格圏内にいるのに否定はできません」

個性あっても大半は学力で無理だし。

「チツ、いいから行くぞ」

俯く兄の姿に後ろ髪を引かれるが、一応個性ある自分が何か言っても嫌味になる。

兄弟仲は悪くないのだが個性についてでギクシヤクしてしまうのが最近の悩みだ。

ヒーローに成れるかどうかは、どうしてもそこが重要なことから。

まして自分はヒーローではなく、爆豪勝己のサイドキックになることが目的であるから余計に。

「それでなんであそこまでやったんです？」

進路のプリントを渡された時に言ったように無個性が同じ土俵に立つことが気に入らないからではないでしょう。

個性的に自分も無個性と大差ないのだから。

「身長、体重、座高、胸囲」

「？」

「好物に興味に日課に反応から口癖に咄嗟の行動と靴下はどっちから履くかまで」

最初は首を傾げながら聞いていたが、ソレが何を指しているのか分り先程の彼のように顔が引きつる。

「自分の個人情報がノートにビツチリ書いてあったらテメエはどう思うよ？」

ノートは山程あるのにピンポイントで自分の項目を引き当てたのか。

もしかしたらノートを読んでこれくらい書けるなら後は実践してみせろと発破をかけようとしたのかも知れない、ボスらしく。

しかし書いてあった内容がストーリー的なアレだったから反射的

にやったのか。

とはいえ兄のフォローをしておくべきか。

「兄の愛ですっねっ！」

「爆殺すんぞ」

笑顔とともに親指を突き立てた自分にドスの効いた声とともにマジな殺意が飛んできた。

「まあソレは冗談ですが、兄のあの分析力は大したモンでしょう、学力もあるしヒーロー事務所の事務員にはうってつけではないですか」

新人ヒーローはそこが大変だとよく聞く。

広報なども考えると兄の知識量とヒーローに対する情熱は有益だ
と思うが。

「アイツがそれを望んでねえから誘わねえ。」

それに俺に勝つ気でいるのが気に入らねえ」

そう言っただけにさらに対して鍛えてもいねえ分際だから余計にな、と続ける。

確かにヒーローを目指すのに格闘技一つ学んでないのはどうかと思うが。

「自分のせいでしょうソレは」

兄が体を鍛えていないのは自分に原因がある。

自分が爆豪勝己のサイドキックなると決めてから前世でやっていた修業を片っぱしから試した。

兄はそれを見て一緒にやろうとしたがあまりの過酷さに体を壊して挫折してしまっただけだ。

「自分の個性は記憶だけでは無く、肉体にも影響があるのかもしれない」

兄は挫折した訓練も自分には容易く熟せた。

兄が無個性だから出来なかつたかとも思ったが、六式の体得は器用なボスですら無理だった。

個性の効果なのだろう。

兄もそう思い、訓練しようとしなくなった。

無個性だから無意味だと判断して。

元より超ヒーローオタクだったけど分析に力をいれるようになったのはそのせいだと思う。

「ケツ、強くなきゃなんにもならないだろうがヒーローはよお」

不満気なボスの反応にも納得できる。

分析することで個性の対処法は導きだせても、対処できる地力が無ければ意味はないのだから。

海兵みたく銃火器の装備をこの社会は認めていないのだし。

「強さだけが全てではないと言うには暴力の有り触れた世界ですからね此処も」

身につかないとはいえ自衛できるくらいは鍛えて欲しいのだが。

かつての世界でも一般人であっても海賊が来たら銃火器構えて応戦した。

「デクには教えないのかテメエの前世」

「R18G指定ですから18未満は閲覧禁止です」

いや子供に話して良い内容ではないでしょ。ボスにだって概要だけだったし（当時4歳の語彙力の関係で）

「政府お抱えの暗殺者とかフィクションかつての」

「こつちにもいそうですね、綺麗事だけでヒーローなんて制度が成り立つとは思えませんよ」

個人の正義と善意の暴力が許容できないから法で縛っている、ヒーローを公的に認め職業にしたのはそれが許されないからだ。

無法で成り立つ社会とは、法で規制する必要がない程に個人のモラルが高い社会という意味なのだろう。

「俺は軽くぶらつくがテメエはどうする?」

「新しいクレープ屋が開店したのでそちらに行こうと思ってます」

「何気に食い道楽だよなお前、前世の影響か?」

「それはありますね。食文化に関してはこちらは素晴らしいですよ、貴族が口にするレベルの代物が容易く手に入る」

何を食べても超美味しい。

「ほどほどにしとけよ」

「三度の飯より間食が好きですって」

「子供かよ」

呆れた様子のボスと別れて駆け出す。

クレープ!!

側を離れたのは爆豪勝己への信頼もあった。

いつ何時ヴィランに襲われるか分からないこの社会で複数行動が奨励されている。

けれど共に訓練していた爆豪勝己の実力はそこらのヒーローに劣るものではない。ヴィラン如き返り討ちにできるだろうと自分は思っていたのだ。

多様な個性の厄介さと、兄の我が身を顧みない勇気も見るのはこの後のこととなる。

第3話

ヒーローとは何か。

ヒーロー溢れる世界だからこそ私はそれを考えてしまうのだろう。私にとってヒーローとは不自由な職業に見える。

あそこまで規制が多く割に合わない仕事はないのではないだろうか？

収入という点では魅力がある。

トップヒーローの年収、特にアメリカのヒーローなどはまさしくセレブだ。

その豪勢な生活は庶民の憧れだろう。

天竜人には大分劣るモノだろうが。

だが日本だとそれは当てはまらない。

収入という点では劣らない、だがなんというかこの国の国民はヒーローに理想を押し付け過ぎのような気がする。

清貧を尊ぶ気質なのか、ヒーローが羽目を外した行動などの、いわゆるヒーローらしからぬ行動に対する当たりが世界でも類を見ない程に厳しいのだ。

日本を代表するナンバーワンヒーローであるオールマイイトが多額の寄付を行う篤志家であることも理由の一つかも知れない。

ヒーロー育成機関の最大手である雄英高校を主席で卒業した新人ヒーローが、得た収入で最新スポーツカーを購入した時などテレビに取り上げられる程に大炎上したものだ。

前世の海軍としてそこまでは厳しくはないだろう、もっとも何よりも強くあることが第一である彼らに王侯貴族のような生活を望む者は極少数だったが、いやあれは地位が上がる程に見えてしまう天竜人の振る舞いに嫌悪を抱いていただけかもしれないな。

相手を生きたまま捕縛せねばならず、周囲に叩かれるような行動言動ができず、犠牲者などを出してはいけない、好きなように生活できない、なんとも不便な職業だと思う。警察という極めて優れた手本が

あってもこれは厳しい。

とはいえソレを目指すのは確定事項。

私は自らの誓いとして我がヒーローである爆豪勝己のサイドキックとなろう。

しかしクレープ生地とハバネロソースの相性は絶妙、あえてソースのみにしたが柔らかく甘い薄皮と刺激的な辛味と旨味の醸し出すハーモニーが素晴らしい、ボスの分以外も買って正解だったな。

購入したクレープに舌鼓を打ち満足していると、夕暮れの町並みに騒ぎが起きる。

BOM!!

爆発音、ボスの個性か？

この世界は便利である反面火事や爆発など起こす要因に溢れている。ささいなことで起きる火花、容易く引火するガス、利便性の追求が身近に危険を散りばめている。さらに個性、さらにヴィランがその起爆剤となれば容易く被害は拡大する。

「行くか」

野次馬は危険を伴い奨励されてない。

だが行かねばならぬと勘が告げていた。

「ボスッ!!」

「遅えぞ来久っ!!」

騒ぎの中心、そこにはヘドロ状のナニカに纏わりつかれた同級生がいた。確か隣のクラスの火炎の個性の使い手だったか？兄がいれば詳細が分かるのだが。そしてその周りに壊れた商店に手をこまねくヒーロー達、後ろの人達を庇うように立つボスの姿があった。

「ドロドロの実の能力者か？物理攻撃が効かないとは厄介な」

ロギアに近いパラミシアだが攻撃性能という欠点があるな。

「前世と混同するなアホ、んでどう対処したソレは？」

つい前世知識から引っ張りだしてしまう。そして参考にするつもりなのかその時のやり方を聞かれるが。

「海に吹き飛ばして溺死させました」

「出来るかつ!!」

いやだつて自分暗殺者で、相手海賊で、能力者で、周りが海で、その方が楽だったわけですし。

「ボス、ヒーローがいますし、個性も救出向けではありません。下がるべきかと」

瓦礫を払うぐらいなら許されるだろうがこれ以上の介入は問題になる。

「うるせえ、誰かを助けるのに資格なんて知るかつ!!できるからやって、できないからやらないなんてヒーローじゃねえつ!!ただの合理主義者だろうがつ!!」

全くこの人は。

いやだからこそか。

それでこそ爆豪勝己だ。

「手を貸せ来久、人助けだ」

「お供いたします、マイヒーロー」

そうボスと共にヘドロヴィランに纏わりつかれた人に向かおうとすると、

「うあああつ!!」

と情けない声を上げてヴィランに荷物をぶちまける兄がいた。

「兄さんつ!!」

「あの馬鹿つ!!」

ヴィランの注意を引けたのは一瞬、すぐさま炎が兄に向けて襲いかかる。

BOM!!

それを爆破で防ぐのが我がボスで、鉄塊にて破片を防ぐのが私だ。

「何してんだボケデクツ!!止まってんじゃねえつ!!」

「?!」

ボスの怒声に怯む兄だが、サイドキックとしてすかさず言葉足らずなボスをフォローする。

「一步踏み出したら止まるな、その勇気のまま駆け抜けろつ!!とボスは言ってますよ兄さん」

「言つてねえだろっ!!」

全くボスは照れ屋だ。

「その衝動のまま突き進んでください兄さん。未来のナンバー1ヒーローとそのサイドキックが露払いを引き受けます」

「うんっ!!」

背を押された兄は駆け出す、その姿は正しくヒーローに見えた。

「ケツ、余計なことを」

「親友が踏み出せたことを喜んでいますよねボス」

「チツ」

素直ではないボスを見ながら兄のフォローを二人でする、兄のヒーローとしての道を。

すると先程から群衆から感じていた視線の気配が突如強まった、まるで増大するかのように。

視線を送り誰だか確認すれば納得した。

なるほどアレが。

「ボスの踏み台ですか」

現ナンバー1 平和の象徴 オールマイト。

「んな風に言うのはお前だけだ」

しかし予想程の実力ではないな。

感覚的に億超え海賊以上の実力だが、ロックス海賊団の幹部格程ではない。

弱体化しているのか？原因は加齢に怪我か？

膨れ上がった肉体にてヘドロヴィランを吹き飛ばし、兄たちを助け出し、天候すら変えたヒーローを見ながら私はそう思った。

その後のことだが、ヘドロヴィランの残骸はヒーロー達に回収された、こういったこともヒーローの役目ならボスと共に工事現場のバイトをすべきかな？

私達の無謀な行動に説教されるかと思ったら、一人ずつデステゴロに拳骨を落とされそれですんだ、私達の行動は間違いだが誰よりもヒーローだったと。

ボスと私に至っては称賛されヒーローからサイドキックにとスカ

ウトされるが、

「テメエらの下にはつかねえよ」

と喧嘩を売るように返す、全くボスは。

「皆様方を乗り越えるべき先達として見ています、ゆえに高い壁として其処にあってくださいと、ボスは言っています」

「言っていないよっ!!」

さてボスにクレープを一つ渡して、私は兄を追う。

礼こそ言われたがまだ消沈しているかもしれない。

追いかけるとそこには、兄から走り去っていくヘドロヴィランに纏わりつかれた同級生。思い出した彼は個性こそ優秀だが学力面で雄英高校を断念せざる得なかつたんだ、だからこそ無個性なのに学力で受かれそうな兄に絡んでいたのか。

そんなことを考えていたら、兄は兄でオールマイトととんでも話を始めていた。いやオールマイトの秘密知ってしまったのですが。

「あの、お二人さん?」

「誰だいつ?!」

「来久っ?!」

振り返る二人に諭すように告げる。

「水を差して悪いですが、そういった話は天下の往来ではなく、人気のないところでしません?」

「ハッ?!」

今気づいたんですね。

「あの来久、このことは……」

「誰かに話すつもりはありません。けど知った以上は兄さんに協力しますよ。一人で抱え込むことは辛いでしょうし、それと」

秘密を守る、けどそれに身内が潰れて欲しくはないのだ。

「ヒーローでしたよ兄さん。ボスには負けませんがね」

そうやって私は去ったのだった。

「んでどうだったよデク」

心配してくれることは嬉しいがオールマイトの件は話せないな、か
とって嘘はバレるし。

「骨みたいな男性に声をかけられてました」

「助けるかヒーローを呼んでやれ」

「兄さんも嬉しそうでした」

「今後の付き合い方を悩む情報だなオイ」

「クレープを渡したので二人で食べるそうです」

「仲良くデートか？」

「むしろ密会かと」

「弟なんだ、今後は優しくしてやれよ」

嘘をつかずに真実だけで誤魔化したけどなんかやらかしたような。

第4話

あのヘドロヴィラン騒動から数日。

解決の立役者である私達は学校内でより注目されるようになり、本気で雄英高校を目指しているのだと周知された。兄を無個性だと軽んじてたクラスメート達も同じ状況では自分は何もできないだろうからと、笑い者にする人はいなくなつた。そこには助けられた隣のクラスの彼の口添えもあつたからだろう。

そんな学校環境が変化する中、兄はオールマイトの後継者となるべく早朝と放課後にオールマイト監修の体力作りの訓練に励んでいた。そんな日々の朝。

「なんか最近かつちゃんが優しくなつてる気がするんだけど」

ヘドロヴィラン騒動よりボスは兄を腫れ物を扱うように接していたりする。兄が気にするレベルで。

「ボスは元から優しいですよ」

「それは7割くらい来久の妄想だけど、どうしたんだろかつちゃん？」
「今真顔でエグい切り返ししませんでした？」

一時疎遠に成りつつあつた兄とは今やこんな会話をできるようになった。

そしてボスの反応の理由にも心当たりはある。

オールマイトの秘密を守るため要点をぼかしているのだが。ボスからしたら、兄は五十代の骨のような男性と朝晩密会している幼馴染なのだ（しかも喜々として）。いかに心臓に毛の生えた程に豪胆なボスであろうと反応に困り果てているのだろう。何せ私にも下手に反対したら状況が悪化するかも知れないと、見守るだけにしろと厳命しているのだ。

どう解けば良いのだからこの誤解。

しかしボスとてオールマイトファン、兄がオールマイトに個性を託される予定で訓練をつけられているとなると劣等感に苛まれるやも知れん（何よりも口外できないし）、兄の身体が出来てきたらヒーロー

に訓練をつけられていたと説明するべきだろう。

そして私だが、オールマイトに自らのことを明かし協力者として力を貸している。

信頼できると兄に太鼓判を押されたことと、歳不相応の私の実力を悟ったからだとか、君って私より強いよねH A H A H Aと言われて少々驚いた。私の実力を察する者に始めて会ったからだ。やはり前世とこの世界、文化はともかくとして戦闘能力では大分差があるようだ。

結果として兄の訓練はオールマイトの『目指せ合格アメリカンドリームプラン』に並行して私から課題を出す形に落ち着いたのであった。

入試までの十ヶ月さあ訓練だ。

「板です、割ってください」

「なんでっ!?!」

「調べたら雄英高校の実技は市街地にてロボとの戦闘のようなので、モノを壊す感触に慣れてください」

ネットに拡散してましたね、あんな無理ゲーだったとか。

嵐脚にて切り出した木の板の山。鉄板が前提だがまず慣れないと。徐々に厚くして身体が出来たら鉄板だ。

「手段は問いません、壊した際の反動や衝撃を知ることが重要なので。ただ道具を使うなら持ち込み可能な範囲かつ市街地にて入手できるモノにしてください」

とはいえ評価形式なら過剰な武装は減点だろう、やはり無手が前提か。

喧嘩とて一方的に殴られる側だった兄は、まず殴る感触に慣れる必要がある。殴ること自身に還る反動に衝撃で痺れる感触、鉄パイプなどの棒状の道具類でもやってもらうべきだが市街地にそうそう落ちてはいないだろう。せいぜい石や瓦礫くらいが妥当だろうな、それだけで無手より容易くなる。

またある日。

「ビルです、飛んでください」

「死ねとっ!？」

「高所の移動はヒーローに必須です、体力がまだ足りないのとおりあえず落ちる感覚だけでも慣れてください、今なら私やオールマイトが受け止めれますし」

これなら立てないほど疲労していても出来ますし。

「いやでも無茶な」

「落としますよー、オールマイト」

「無視っ!？」

ドゲシと屋上から兄を蹴り落とす。時間は有限、身体作りだけで十ヶ月は過ぎてしまいかねない。なら動けなくともできることはやるべきだ。

高所から落下する人の救助もヒーローの仕事の中では多いほうだ、なら助けられる側の感覚も知っておくべきなのだ。下にて悲鳴から受け止められて歓喜の声に変化した兄を見つつ訓練の日々は続く。

私は私で勉強に、ボスとの組手、さらに間食立ち食い食べ歩きB級グルメ巡り（資金はネットでやりとりする父の仕事の手伝い、前世で見たデザインがウけているらしい）と多忙を極めていた。

途中で兄がオーバーワーク気味になったりもしたが、持ち前の根性でやり遂げていた。

そんな中、兄に相談を持ちかけられた。

「どうしました?」

何やら思いつめた表情の兄に戸惑う、身体の完成ぐあいは予定以上、入試に間に合いかつ例年どおりの実技なら上位に食い込めるだろう。

「うん、あのさ」

何でも後継者が自分で良いのかと思うようになったらしい。この訓練の日々で強くなったからこそ、オールマイトのワンフォーオールは相応しい、それこそ私やボスに託すべきではないのかという思いが拭えなくなってしまうたこのことだ。

しかし、

「そうは思いませんか？」

私は賛同できない。

その理屈なら現ナンバー2のエンデヴアーに託すべきだ、だがオールマイトはそうしない。強いヒーローは沢山いるべきという理由かもしれないがそうではないだろう。

「でも、」

精神的、心根的理由も無論あるが何よりも、

「個性の複数所持は危険だと予想しています」

悪魔の実という実例がある、かつて天竜人の道楽で複数の実を食べさせられた者のように爆散してしまうのではないかと私は懸念するのだ。

「さらにオールマイトが無個性だったという事実があります。ヒーローに詳しい兄がオールマイトより前の世代のヒーローで、継承者と思わしきヒーローの活躍を存じてないのなら、ワンフォーオールは無個性でないと力を引き出せない個性なのではないですか？」

オールマイト以前のヒーローはそこまで強くない可能性、そして無個性ではないとあの出力を引き出せない可能性。まあオールマイト八木俊典が無個性にして飛び抜けた逸材だった可能性もまたあるが。

そして同時に別の懸念もある。

「だから僕が」

「兄さん、もはや無個性は絶滅危惧種扱いです。」

そして無個性として生まれヒーローを志す者はより少ないでしょう」

さらに力を得てその在り方が豹変しない者など最早兄ぐらいしかないのではないだろうか。

善人として力を得たら変わる、恐らく無個性が個性を得たら、ましてやオールマイトの個性など得たら今までの鬱憤を晴らすかの如く好き放題することだろう。

「オールマイトと志を同じとするヒーローは多くいます。けどオールマイトが選んだ、ワンフォーオールの継承者は貴方だけなんです」

とはいえ別の懸念、オールマイトと争ってきた巨悪についての問題

もある。解決していれば良いが、そうでないのなら兄のヒーローとしての道は苦難どころではないだろう。

「誇りなさい緑谷出久、選ばれたのは貴方だ」

全く、ボスをナンバー1ヒーローにするのは存外大変なのかもしれないな。

兄を後押しし、起こるかもしれない騒乱に備え、爆豪勝己を支える。

私のサイドキックの道もラクじゃない。

雄英高校の入試はもう目前だ。

緑谷出久視点

僕、緑谷出久には双子の弟がいる。

名は緑谷来久、天然パーマでそばかす顔で目の大きい僕とは似ても似つかない、糸目長身ストリートヘアなイケメン。身長や物腰からよく来久の方が兄扱いされるけど来久曰く、先に生まれたの兄さんですよとのこと。個性の効果か幼少時はおろか乳幼児の頃まではつきり覚えてるらしい。

そんな弟を苦手、嫌い、忌避する時期が僕にはあったのだ。そう個性診断テストの日から。

個性が僕には無くて来久にはある。その事実が不公平だと感じて、ヒーローに成れないと突きつけられた八つ当たりで弟を嫌うようになった。その行為こそ何よりもヒーローらしくないのに関わらず。また個性発現以降憔悴し、周りから心配される来久が大切にされていくように特別扱いされてるように見えたこともそれを煽ったのかもしれない。今となればそんな過去の自分を殴りたいくらいだ、来久の個性を知った以上とてもそんな風には思えない。

個性の中には本人に害にしかならないモノもある、来久の個性『前世』はその最たるもの。そう来久は前世の記憶の統合でいつ死んでもおかしくなかったのだ。

幸運なことはあった、来久の前世が自意識が無かったこと。統合された情報が記憶のみで済んだこと。まあその影響で常識や知識が前世に引つ張られてしまうことが多々あるらしいが害というほどではない。なお体質も受け継いでいることが後に判明したが、前世によってはそれこそ今の生活環境が劇毒な前世なら本当に即死していたらしい。

これは僕の傷、忘れられない過去。

ヒーローに成りたがっていたのに、僕は自分のことばかりで弟を救わなかった。かっちゃんとは違ってヒーローに成らなかつたんだ。その事実が傷として心に残っている。

だからもう間違わないと誓う。オールマイトに後継者として認められ、来久に応援されたのだから。

僕は、誰かを救える僕になる。

そんな決意をしている僕の横で談笑する二人。

「個人移動にも速度規定法案ですか、迷惑な」

「困るよねーH A H A H A、まだ草案らしいけど」

「自動車なんて、アラバスタの超カルガモやFワニより遅いから追いつ越しますよ普通」

「追突しそうで確かに危ないけど、結構いるからねスピードヒーロー」

「空中移動にも制限とは、空いててラクなのに」

「空中は渋滞無くて便利なのよね」

なんだその超人談義。出来ないから普通は。

オールマイトと来久は意外と話が合う、主にそのおかしな身体能力が理由で。お互いの出来る事が噛み合うため話が弾むそうだ、羨ましい、妬ましい。

「いよいよ明日試験日、雄英高校にて君達を待っているよ」

「O Bだからお手伝いでもされるのですか？」

「卒業生のヒーローは体育祭とか文化祭ではよくゲスト参加しているよ来久」

オールマイトの言葉に首を傾げていたので知っている情報を伝える、そこら辺はまだ詳しくないだろうし。

「(ヤベ) そんな感じだよH A H A H A」

「?」

なんか気になるけどオールマイトが試験に関わるならよりやる気がでるよね。

この十ヶ月、控えめにいつても地獄だったけど準備はできた。

ワンフォーオールを試しも来久との簡単な模擬戦(手も足も出なかった)も済ませた。

いよいよ明日、一般入試実技試験だ。

「デクか……、俺の前に立つんじゃねえ」

翌日早朝、来久と一緒に行くこうか聞いてみたら来久はかつちゃんに行く予定らしい。なら3人でとも思ってたけどついでに僕の個性について説明しておきたいらしい（あとはベーコンレタスな誤解について）、後でバレて説明するより今のタイミングの方が良いだろうと判断したんだって。

けれど雄英高校入口で会ったかつちゃんはいつもどおりのかつちゃんがだった。

かつちゃんの後ろに従者みたく控える来久は微妙に疲れた表情だ。

「ボスは他者に気を取られずに前だけ見据えて進んでいけ、と言っています」

「言ってるよ（やん）っ?!」

「それでは兄さんもそちらの方も良き受験を」

そう言っただかつちゃん達は去っていった。相変わらずな二人だ。

あと来久の言ったそちらの方？

見れば僕の横には女子がいた、来久のいつものにツツコミをいれたのだろう。

「兄弟で雄英なんてすごいねえ、お互い頑張ろう」

流石雄英高校、受験生すらコミュ力高し。

女子と数ヶ月ぶりに喋っちゃったよ（なお前回は中学校にて「来久君に手紙渡して」だったそうな）

めったにない出来事に僕は思わず「おっおっおっお」と言ってしまった。

講堂にてボイスヒーロープレゼント・マイクによる試験説明がされた。つい癖でブツブツ言う僕に幼馴染と双子は他人のふりしてスルー。さらに途中プリントについて尋ねる受験生にこちらまで注意され注目されるというトラブルまで起きてしまった。ただでさえヘドロヴィランの件があるのに悪目立ちばかりだな僕は。

そして試験本番。

さっき注意してきた眼鏡の人に何かしでかすのかとガン見されて凄く居心地が悪いです。さっき話した女子に頑張ろうというのはやめておこう。

「ハイスタートー！」

けれどプレゼント・マイクの言葉には身体が勝手に反応して走り出していた。

唐突だけど、来久の基本的な訓練方針は「やったことのあることしかできない」だ。

人間は初めてに直面したら動けなくなる。

どうなるか分からないから恐怖するのだ。

だから来久は僕の初めてを潰すことに専念した。

知っていれば動ける、なら全て知っておけば良い。

板を割った、板を割れる。

ビルから飛んだ、ビルから飛べる。

瓦礫を躲した、瓦礫を躲せる。

重いものを運んだ、重いものを運べる。

熊と戦った、熊と戦える。

岩を砕いた、岩を砕ける。

鯨から逃げた、鯨から逃げれる。

あらゆることをこの十ヶ月経験させられた、そう身体作りの疲労で動けなくなっても。

うん、やつぱり来久の頭オカシイ。途中でオールマイトが咎めても首を傾げてたし。

ゆえにプレゼント・マイクの唐突な開始も僕はもう慣れていて、だからこそ動けた。

ワンフォーオールによる全身強化で加速し、僕は発見した仮想敵に殴りかかった。

第6話

雄英高校からハイテクな結果通知が届き、次席合格が無事伝えられた。自分が次席なら主席は主たる爆豪勝己で間違いないだろう（推薦組の実力によるが）。隣室からの叫びから兄も合格してようどホツとする。個性無しの体でわずか十ヶ月で海軍上等兵（当時基準）クラスに鍛えるのは苦勞したがその成果はあつたようだ。試験の時に無理して腕を壊したと聞いたが、そんなところが兄らしいと思う。きつとそれは誰かのためなのだから。

しかし合格通知にて告げられたのは結果のみでなく私個人についての話もあつた。曰く一部教師陣が明らかに手を抜いていた私を好ましく思っていないらしい。さらにそれだけではなく、手慣れているかのような戦いぶりと態度に危険人物ではないかと懸念までされてしまったとか。

しかしそんな誤解をとこうとオールマイトがつい私の前世と能力をその場で暴露してしまったそうだ（後に根津校長、リカバリーガール、グラントリノから説教されたとか）。

オールマイトはそのことで私に必死に謝罪しているが別に良いというのが本音だ。危険人物であることは誤解ではないのだから。何せ前世に引つ張られる私は本気をだせない、ゆえに手を抜いて戦わざるえないのだ。それを真剣ではなく不真面目だと言われたらまさにその通りだろう。

まあオールマイトの取りなしで合格は変わりないことだから、次に出会った時にオールマイトが気にしていたら大丈夫だと伝えよう。そして六式に覇気が雄英高校にて広まろうとアレらはあくまであれば便利の域をでない。科学の発展してこの世界なら替わる存在はいくらでもあるだろう（というかオールマイト自身が月歩を知らずとも飛べるし）、とにかく合格したことをボスと母と兄に伝えるとしよう、喜ぶか当然と受け取るか反応が楽しみだな。………伝える前に母対策としてバスタオルを持っていくべきだな、あと脱水症状対策も。

雄英高校初日。それ即ちボスの覇道の始まりを告げる記念すべき
第一歩。

今日この日こそ伝説の幕開けなのだ。

兄に一言告げて一足先にボスとともに雄英高校に行く。ヘドロ
ヴィランの一件は一年過ぎた今でも話題に上がり、そのため注目され
やすい、その視線を嫌うボスは自然と早めな行動になるのだ。だがボ
ス校門にて一度足を止めるとこちらへと振り返り、告げる。

「来久」

「はい」

「テメエは俺のサイドキックだ」

「そのとおりです」

「こっからがヒーローの始まりだ、だからテメエはいつものように俺
の後ろについてこい。」

俺の道を見せてやる」

「はいっ!!」

これが爆豪勝己の決意表明なのだ。

あの日私を救った責任を果たすつもりなんだろう。

本当にあいつも変わららず律儀な人だ。

私はやりたいからしてるだけなのに。

彼がそんな人だからこそこれからも支えようと思うのだ。

その後到着した教室にて誰よりも早く教室に来ていた人物、実技試
験にて兄を注意していた生真面目そうな性格の飯田天哉君と私は意
気投合することになる。

「何あれ」

「そうかそんなことが、ヘドロヴィランのニュースは僕も見たのだが
爆豪君は君が主と言うだけはある人物なのだね」

「まさにそのとおり、ヒーローに任せるべきと進言した私を跳ね除け
助けようとするボスの姿勢こそヒーローのあるべき形なのです」

「ぬう、しかしルール違反を認めたくないとも僕は思ってしまう。いかに一面では正しくともいかにヒーローらしくとも。僕はどうすれば良いのだ」

「悩むことです。間違っているから正そうとする行動も葛藤の末なら違っています。考えることにこそ意味もありまた価値もあるのです」
「そうか、そのとおりだ。定められた模範解答ではない、自ら導き出した答えこそ大切なんだっ!!」

「まさにっ!!」

(喧しさが二乗だ)

いやまさかここまで話が合うとは、飯田君もまた追いかける背中があるから実に話が弾む。む、アレは？

「おはよう御座います兄さんっ!!」

「ほう、彼がっ!!」

「ヒイ、こっち見たあっ!! そして来たあっ?!」

何を怯えているんだろうか？

「緑谷兄君」

「双子だから名前でイイデス」

「君はあの実技試験の構造に気付いていたのだな。」

俺は気付けなかった…!!

君を見誤っていたよ!!悔しいが君のほうが上手だったようだ!

「(OP敵のことかな? 気付いてなかったよ)」

そういえば兄も破壊したんでしたっけ？

ああいった巨大存在対策のために慣れる必要がありますね。巨大化するヴィランは何気に多いですし。前世ならカームベルトがあるのですが、やはり鯨とか象ですかね、あの巨大ロボットを学校で借りれたら一番ですが。兄が女子生徒との会話をするという驚天動地の出来事を見ながら、オールマイトに訓練内容の提案をすることを決めました。

「お友達(っ)っこしたいなら他所へ行け。」

「(っ)は、ヒーロー科だぞ」

「(なんか!! いるうう!!) (っ) (っ)」

「成程、いかなる状況でも休息を取れるよう日頃から実践しているのですね」

「確かに、緊急時には満足なベッドなどないと兄も言っていたっ!!」

「まさに常在戦場の心得っ!!」

「就業時間内に寝袋入って寝てていいわけねえだろ、納得すんな生真面目ボケ共」

雄英高校は自由な校風が売り、その事を私達はこのあと実感するこ
ととなる。

第7話

なるほど一見分かりにくいが体術に特化したヒーローですか。

相澤消太と言う担任教師。無精髭の目立つくたびれた外見なれどその実力は高い。私を除いた生徒全てを相手取っても勝てる実力があるだろう。まあボスなら食い下がるだろうが。

指示に従い体操服に着替えてグラウンドに出れば、個性把握テストを行うそうだ。行事より指導を優先するとは見た目によらず熱心な先生なのだろう。

やることは中学でもやっていた体力テスト8種目、個性禁止で行われていたソレに自分の個性を用いてやれとのことだ。

ソレ、私には関係ないですね。

中学時代も六式と覇気を使ってないのに世界記録を連発してたのですが。

当時のことを思い出したのかボスと兄も微妙な顔してこっち見えますけど。

説明後に手本としてソフトボール投げをやるよう指示されたボス。なるほど爆破とボール投げは使い方として分かりやすい例ですね。

死ねえ!!という掛け声と共に飛んでゆくボール。

「過去の在り方よ死んで新しく生まれ変われ、とボスは言っています」

「言っていないよね?」

「単なる掛け声だよ、かっちゃん口悪いし」

派手な音と記録に盛り上がる生徒達。誰かが呟いた面白そうという言葉はそれだけ個性を自由に使えないことを示しているのだろう(そしてそのルールをきちんと守っていたことを)。私にはいまいち理解できない感覚なのだが、どうやらその言葉が相澤先生のナニカに響いてしまったようだ。

「トータル成績最下位の者には見込み無しと判断し除籍処分としよう」

ずいぶんと厳しいやそれだけ真摯なのだろうな、この先生は。

ヒーローになる、その行為について。生徒達の一生を左右するものと彼は理解しているのだろう。

いや記録だすだけなら余裕なんですが。

てつきり実技試験の件から私個人にルールでも設けられると推察していたが、そのようなことは一切無くテストは始まった。

初日でも除籍なんて理不尽な話だ。

だが自然災害、大事故、身勝手な敵、厄災もまたそれ以上に理不尽だ（天竜人よりはマシだが）そしてそれを乗り越えるのがヒーローであり、ここはそれらの育成機関、だからこそ雄英は苦難を与え続けると言う。ちなみに兄よ、苦難のくだりでジト目でこつちを見るのなんぞでしょうか？貴方にしたのは軽く乗り越えられる程度の苦難でしように。

まあ苦難ではあるがボスと兄は心配ないだろう。ボスはもともと実力高く、ワンフォーオールを低出力で全身に巡らした兄の身体能力はかなりのもの。悪い記録にはならないだろう。だが、

「あの実技試験を突破し、学力も最高峰な生徒達をなぜ落とすのか？」

「どうしたんだい来久君？」

「相澤先生の見たいものが気になってね」

実力十分なら、あとはその場に合わせる使い方の発想力か？

いやもつと根本的なヒーローとしての思想かも知れないな。だとすれば私が一番ヤバイのだから。

五十メートル走を零秒近くでクリアしながらも思考を続けてしまう。

「いや今一瞬だった？」

「ワープなのか？」

剣を使うとこうなりますよね、視界に入る距離なら一瞬で移動できますし。

素の身体能力でも十分でしょうが、やれることはやるとしましうか。

握力は素の力で上回り、立ち幅跳びは月歩、反復横跳びも素の力で技を使うと外れそうですから。このままだと最下位は峰田実君（ベリベリの実の能力者でしょうか？）ですね。そのなんか個性応用

関係無く、足の短さが記録にモロに影響でてますよ。せつかく反復横跳びで私の次の記録なのに。それでも個性の補正の得られない透明なだけの女生徒（スケスケの実の能力者のようですね）より下なので仕方ないでしょうが。

「あの身体能力増強がデクの個性か？」

種目がボール投げになった辺りでボスからそう問われました。ワンプフォーオールについては秘密にしてくれとオールマイトに頼まれているので、そうだと誤魔化します、あまりボスに嘘はつきたくないのですが。

「出力自体はまだ上がりますが、肉体が自壊しかねないのでアレくらいに抑えています」

「本当、幼馴染がオッサンとベーコンレタスな密会ではなく個性修業してて一安心だよ」

まだ疑ってたんですね、いやそういう風に聞こえてもおかしくなかった言い方でしたが。

「ヒーローの個人特訓など話題になってしまうので黙ってました、すいません」

「いいさ、発動に条件つきな個性なんてザラだ。発現に時間のかかる個性くらいあるだろうよ」

悪魔の実なら感覚で扱えるようになるそうですが、中に宿っているらしい悪魔の力ですかね。

ボスも兄の個性についても受け入れてくれたようでホッとしますね、それよりもベーコンレタスの方が重要だった気もしますが。

「暴走なり自壊するなら見込み無し扱いだろうが、使えるようになってばかりの筈がその様子もねえ。ならアイツは大丈夫だろうよ」

「他の方も問題あるようには見えませんが」

とはいえ普通科との入れ替え制もあると聞く、除籍についてはありうることだろう。

「お前も鍛えてはいるしな」

「ナンバー1ヒーローのサイドキックが弱いわけにはいきませんか。ようやく前世の7割くらいにはなりましたよ」

戦いこそしてはいないが六式と覇気の修練は気狂い扱いされる程に積んでいる、それで成長できているのは体質を受け継いでいるからだろう。最近では身体を中心に縦に一本傷、エドワード・ニューゲートの大薙刀での止めの一撃の痕が浮き出ているんですね。本当に個性は謎だ、『前世』ではなく『転生』が正しいのかもしれないですね。さて種目が終わるほどに絶望かつ必死になる同級生に声もかけることができず、ただこなす。自分はトップだから声をかけても嫌味になっってしまうすし。

途中兄が異様に身体が柔らかいことに驚かれたので私が説明する。「身体の柔らかさは運動において最重要です、だから兄さんにはそれを重点的にしました」

硬いと激しい動きで負傷しやすいため、柔軟であればある程良い。紙絵を見せたらドン引かれましたが。

「そして兄はヒーローに触れたらぐにやぐにやになるほどのヒーロー好き、なので柔軟体操でヒーローに補助してもらえばたった十ヶ月であの通り」

オールマイトとの密着柔軟、鼻血出しながらやってみましたね兄さん。

「なあよお？」

すると密着に反応した一人の漢。名を峰田実が鼻息荒く声をかけてきた。

「それは女だよな、女ヒーローだよなあ？」

ああ女性にやられたら普通は喜ぶのですよね。というか貴方は現在最下位ですが大丈夫ですか？

「五十代の大ベテラン男性ヒーローです」

「ド変態かつ!!」

いや貴方もかなりのもの。

聞かれたら答えたのですが何故かクラスメイト達に兄が引かれますね、本人もなんでだろ反応ですし。

そんなくんだりもありつつ全種目終了。

中には身体能力に反映されないタイプもいるのにかかりの結果、や

はり基礎スベックも高いな皆さん。

精神的な問題も特に見受けられないが、本当に除籍するのだろうか？

「ちなみに除籍は嘘な、君らの最大限を引き出す合理的虚偽」

相澤先生の言葉に叫ぶ生徒達、というか飯田君は眼鏡割れてますよ。

峰田君も崩れ落ちてますが、大丈夫でしょうか？

「ただな、緑谷弟。お前はトップだったからどうこうはしないが少しは本気でやれ」

「どれくらいで壊れるか分からないものでして」

前世とは人間そのものの強度が違う、試してみるわけにはいかないためどうしてもな。覇気を使わない理由もソレですし。

見聞色の覇気を前世より磨くべきかも知れない、未来は多少見れるが、極まれば物質の声すら聴こえるようになるという情報もあったし（もつともポーネグリフの存在ゆえ体得してたら始末されただろうが）

「サポート科に話を通してやるからそこで試せ。俺はお前の在り方を否定はしないが、教育者として勿体ないとは思っている」

私自身がヒーローとして在れ、ですか。

抵抗ありますね、海軍を知る身としては。

「以上解散だ」

初日から濃かったですね。

ただ結果はだせましたし、兄の成長も確認できました。良い始まりなのでしよう。

終了後は兄と別れ、ボスと帰路につく。

一緒でも良かったが、飯田君や麗日さんと良き友人関係になれそうで良かった。

中学時代などボスが目を光らせていてもイジメにあって遠巻きにされてましたからね。

「相澤先生の言葉には一理ある」

ボス？

「テメエの道があるならそうしていいんだぜ？」

挑発するように笑っていますが、どう答えるか分かっているでしょうに。

「貴方の後ろを支えるのが私の道ですよ」

これは依存かも知れない、けれど引かれた手を私は手放したくないのだから。

未来のナンバーヒーローのサイドキック、それが進む道なのだ。

第8話

サポート科か、いつ行くべきだろうか？

担任である相澤先生の助言に従って自身の本気、それによる破壊範囲、威力を把握する。

だが、前世として大規模に戦うという経験はあまりなかったようだ。もとよりCPOは世界政府の駒であり、天竜人の最終警備を兼ねた戦力、暗殺はCP9の仕事であることもあつて本当に闇に葬るための始末以外で力を振るう機会は無かつたのだろう。

恐らく周囲の被害を考えずに戦つたのは生涯でエドワード・ニューゲートとの一件のみ。確か彼のグラグラの実の能力とお互いの覇気のぶつかりあいにより、一つの島がお互いの足場しか残らないほどに消し飛んだはずだ（記憶を第三者視点で見ると限りだが）。

アレが全力なら前世に届いていない今ならどれくらいだろうか？多用する嵐脚などは特に把握しておきたくはあるが、実力ある剣士が覇気を纏つて刀を振るえば天を割り山を両断する、それに劣らぬ嵐脚がどこまで被害をもたらすか想像するのも怖い話だ。

そして覇気について、見聞色の覇気はあらゆる面で有用なのだから極めるべきで、問題は武装色の覇気だ。前世として最大の利点はロギア系能力者に攻撃できる点、無論攻撃の威力は上がるのだが、覇気を用いた戦闘が真価を発揮するのは同じ覇気使いとの戦闘。防御力の向上も攻撃に当たらないことが前提の私にはあまり意味がないのだ。

考え過ぎか。

単に覇気を用いた身体能力を測るだけで良い。

何せヴィランとの遭遇なんぞ、今までの人生で去年のヘドロヴィランの一件のみ。

訓練こそ積んでいるが、いかに最高峰のヒーロー育成機関である雄英高校として学生の身でヴィランとの戦闘なんて職場体験にインターンからだろう。

焦る必要はない。

サイドキックを志す身としてヴィランとの戦闘は避けられぬ未来なれど、前世のように行き急ぐ必要はないのだから。

大物ヴィランと呼べる実力者はおらず、大手ヴィラン組織は壊滅し、ヒーローの飽和する社会。

平和な今を楽しめる時代なのだ。

しかしプレゼント・マイク先生の授業かなり普通ですね。ヒーローと教員の二足わらじは凄いのですが、期待はずれみたいな印象を抱いているようです。

そして雄英高校のメインとも言える学食っ!!

「お前だけだ」

全メニューを制覇するまで席を立つことなどできはしないっ!!

「入学二日目で何をやらかそうとしてんだよ」

高校は学食で決めるものだが、やはり雄英高校にして正解だったと断言できる。

「いやお前俺についてきただけだろ」

集中するのだ目の前の一杯に、食材に、調理に、味に、構成される全てに。

「おかわりですっ!!」

「聞けや」

「良い食べっぷりだねっ!!」

ランチラッシュ先生にも食べっぷりを称賛されますます箸が止まらない。

「ほどほどにしとけよ、午後はヒーロー基礎学。場合によっちゃ戦闘訓練もありうる」

「生命帰還がありますので問題無いです」

ボスは心配してくれるが大丈夫。六式を極めることは人体を極めるに等しい。

「それか、覇気よりも個性と相性が良さそうな技術だよな」

「肉体操作の極みですからね、頭から毛先まで己の肉体に感覚を通して操ることができます」

「六式には必須な技能だっけか？」

「いやどつちが先かは微妙ですね、六式を修めたから出来るのか、生命帰還が出来るから六式が使えるのか」

いつの間にか両方できてましたし。

「まあいい、有用なら覚えるだけだ」

「それでこそボスです、おかわりーっ!!」

「ほどほどにしろと言ったよな？」

「まだ腹六分目なので」

「じゃあ食いながら答えろ、戦闘訓練だと仮定して注目してるヤツは誰だ」

昨日の体力テストで個性を把握でき大体実力もわかりましたしね。

「口田君と葉隠さんですね」

だとすればこの二人だ。

「理由は？」

「個性が戦闘、拘束向きではないにも関わらずあの実技試験を突破し、体力テストでも相澤先生に認められたからです」

生き物ボイスに透明、ヒソヒソの実にスケスケの実際の能力者みたいですね。どちらも有用だがゾン系のような身体能力増強は見込めない、素であれだけでできるなら十分脅威だ。

「納得の理由だな、戦闘面ではどうだ？」

「兄さんと飯田君ですね。戦闘は機動力が物を言います、近接戦闘になった場合はこの二人が活躍しますね。遠距離なら轟君もですが、ボスの爆破なら対処できるでしょう。なんでもできる八百万さんは戦術向きですが、戦闘向きじゃないですし」

とはいえ他の生徒も劣っているわけではない。

武闘家としての技量の高い尾白君、フィジカル面に秀でた砂藤君と障子君、拘束系な峰田君と瀬呂君に麗日さん、索敵能力が高く攻撃力の高い耳郎さんなど。

評価すべき点はA組生徒全員にあると言える。

「まあ個性が戦闘に特化し、私との組手で高速戦闘に慣れているボスに勝てる人はいないでしょうが」

ボスは肉体面として同世代トップだ、筋力を付けることが体温向上に繋がりが火力向上に作用すると知った日から鍛えてますからね。見た目は細いが絞られた筋力です。

「タイマンならな。だがルールを破るのがヴィランの存在意義。あらゆる状況を想定しないとな」

よーいどんで始まる犯罪なんてないですからね。

「思考を止めないことが生存に繋がりますからね、前世の私には無縁な理屈でしたか（というか死因）」

こうしてボスとの昼休みは過ぎていった。流石に全メニュー制覇は時間的理由で無理でしたが、満足するまで食べれました。いつの間にか人集りまでできる騒ぎになっていました。

第9話

「そろそろ行くか、人集りもなくなつたしな」

メニュー制覇率三割か、いかに昼休みという時間制限があるとはいへこのメニューの豊富さ、これが最高峰学府の実力か。

「いや学校じゃなくランチラツシユの実力な、まあ留学生向けになのかかなりマイナーなメニューもあるから品数は多いな」

クスクスやらケバブとかもありましたしね。

ソースも豊富だから飽きませんでした。

まだ時間がありますが余裕ある行動は大事ですね。

「二日目にしてまた目立つのかいA組いっ!!」

っと移動しようと腰を浮かしかけたら唐突に強く声をかけられました。誰でしょうか？

「すまん、ウチのアホが騒がせた。俺は一年A組の爆豪勝己、昼休みに悪かったな」

「いえボスが謝ることではありませんよ。同じく一年A組の緑谷来久です、お食事中にご不快にさせてもうしわけありませんでした」

金髪の整った容姿の少年とその後ろにいた同じクラスの生徒達に主従揃って頭を下げると、いやそこまでするほどではと気まずそうな顔をされた。

「い、いや真剣に謝られることじゃないさ。食堂は共同の場だし、騒ぎは周りの人がやったことだしね。それと僕は一年B組の物間寧人だよ」

同級生でしたか。注意をしてきたのだから先輩かと思いましたよ。しかし他に要件でもあるのでしょうか。

「落ち着け物間寧人相手は入学試験主席次席でありながら来賓にランキングトップテンのプロヒーローやら政府の偉い人が来てテレビ中継すらされる栄えある雄英高校入学式をブツチした自分に自信のある傲岸不遜な二人組だぞ、実技試験の時だって周囲に差をつけ倒して余裕すら感じさせていたじゃないかそれがこんなに謙虚で申し訳な

さそうな殊勝な態度を取るわけがない。そうこれは余裕なんだ実力差から見下していて自分達が絶対上位だからこんな態度なんだ」

兄さんみたいになってますよ物間君？

そしてチラホラ聞き流してはまずい情報がありましたよね。ボスなんか遠い目になってますよ。

「フ、フンその手に乗らないからねえ。いかに下手にでようとも君らの本心は丸わかりさ。その他者を見下す強者の心をねえっ!!」

気を取り直したようですね物間君、ヒーロー向きなメンタルの強さです。

しかし昨日の入学式ブッチで体力テスト、同級生の他のクラスだけで無く下手したら全国規模で反感を買っているのではないのでしょうか？

「生徒代表挨拶で主席次席、さらに入学辞退した推薦主席からの次に暫定B組クラス代表なんて肩書で盤上に立った拳藤の気持ちがかかるかいっ!!」

「本当にすいませんでした」

合理的かも知れないけど迷惑かけすぎですね。

事前通達はしてないのでしょいか、してないでしょうね私達知りませんでしたし。

「しかもグラウンドで何度も轟音上げてさあつ!!」

参加したみんなの意識そっちにいつて式に集中できなかつたよっ!!」

「本当にすいませんでした」

うん、ボスの爆破だけじゃなく兄さんの一撃さらに八百万さん大砲を創造してましたしね、いくら敷地が広くても煩いですよね。

「ま、物間は言いすぎてアレだけど。実技試験で一緒だった連中はあんな達意識してたみたいでさ、それが入学式ブッチで不満だったみたい。ちなみに私は推薦組の取陰切奈」

雰囲気ギャルっぽい？感じの方がそう説明してくれませんが。

「私達も朝突然言われての最下位除籍の体力テストだったんですよ」
振り回されたのは私達も同じだ。

私とボスは最下位にならない自信があったからまだマシでしたが、まだ個性に慣れてない兄さんや増強タイプでない皆さんはプレッシャーやストレスも半端なかったでしょうね。

というかせっかくのボスの顔を売る絶好の機会を逃してましたよ。

「除籍つ?!とんでもない先生に当たったね」

自身の理念と信念をもつ立派な方だと思いますが、とんでもないのは事実ですね。

「なんてヒーローなんだ?うちの担任はブラドキングだったけど、あと俺は回原旋」

兄さんなら分かるのでしようが、私はそれほどヒーローを知らないのですよ。グルメ番組にでるヒーローなら分かるのですが。というか、

「相澤先生のヒーロー名ってなんででしょう?」

「そっぴいや名乗ってないな、あの担任」

体術に秀でているのは分かりましたが、個性すら使用してませんでしたよね(注、実際は来久テスト時に使用してたが気付いてない)

「相澤消太ならレイザーヘッドだよ」

文句を言おうと頑張っていた物間君がこちらを見てそう教えてくれました。

「見ただけで人の個性を抹消する個性を持つアングラ系ヒーローだよ」

個性を消して体術で仕留めるスタイルですか、なるほど体術の練度の高さも納得です。

「物間よく知ってたな」

「僕と同じ、相手の個性ありきな個性だからね」

個性の中でも希少な部類ですよね。

「なるほど自分がアングラ系だからメディアを気にしてなかったのか。」

フハハハっ!!残念だったね、せっかくの雄英高校の主席にして新入生代表という世間にアピールする機会を逃してしまうなんて、さらに反感まで買ってしまうなんてねっ!!思わず同情してしまうくらいだ

よっ!!」

水を得た魚のようですね。

「次のメディア露出の機会、雄英高校体育祭でせいぜい汚名返上することだねっ!!」

コレってA組で上位独占するくらいしなないとマズくないですか？

「だがまあ、せっかく同級生になったんだ。これから交流しよう。ぶっちゃけ君達性格悪くないし、緑谷君の使用してたあの体術気になるし(ボソツ)」

「そんなわけでこれからよろしくね、A組も良い子ばかりなんでしょ？」

「轟君が尖り気味で峰田君がドスケベで上鳴君がナンパ気質で兄さんがヒーローオタクなくらいしか問題ないですよ」

「そっちも濃いのがいるのな」

「んじゃ、いい加減時間まずいから解散だな」

そのボスの言葉で予想外の他クラスとの交流は終わりました。反感はあるようですが今回で大分緩和されたみたいです。

楽しそうな子達なのでこれからも交流しながら競い合えたら良いのですが。

第10話

「そういえば兄さん、デク呼びで良いのですか？」

学食が最高でB組と友好関係を築いたあと、先生が来るまでの時間で朝から気になっていた麗日さんのデク君呼びについて尋ねた。ボスが呼びだしたそのあだ名をてつきり嫌っていたのだと思っていたのだが。

「麗日さんがね、頑張れって感じでなんか好きだって言ってくれたんだ」

やはり幼馴染（男）より女の子ですよね。

ボスにしても（一時期かなり嫌っていたが）呼びやすいから使っているだけですし。

「そういえば学食はどうだったの？」

ヒーローグッズ購入のため金欠な兄は今日は学食を利用していない。

「メニューを三割制覇してきました」

「かつちゃんには後で謝っとくね」

あまり迷惑かけるなよと注意される、解せん。

「あとA組は学年規模で嫌われているみたいですよ」

「ちよつとその話詳しく」

「わーたーしーがー!!」

「ほら先生来ましたよ」

「オールマイトオー!!」

「二そっち優先かよ緑谷兄っ!!」

私達の話に聞き耳立ててた皆さんが、話よりも現れたオールマイトに反応して叫んだ兄に一斉にツッコミを入れました。

ヒーロー基礎学、ヒーローの素地をつくる為様々な訓練を行う課目で今日は戦闘訓練を行うそうです。

そしてそれに伴って入学前に提出した個性届と要望に沿ってあつ

らえられた戦闘服が支給される。試作品だったり企業との提携もあるのでしょうが太っ腹ですよね雄英高校。まあ雄英高校卒業生はヒーローデビュー後もそのコスチュームを使用するから利益はでそうですが。

「格好から入るってのも大切なことだぜ少年少女!! 自覚するのだ!! 今日から自分はヒーローなんだと!!」

オールマイトの言葉に猛りながら始まる戦闘訓練、これこれがヒーローを志す皆の夢の第一歩なんですね。

移動した先で着替えて並ぶ生徒達。

個性と好みに合わせた格好は独特だが多様で見ていると飽きない。個人的には前世の海軍のように統一されているのも格好良いと思いますが。

一部生徒（兄と峰田氏）が女性陣の格好に反応してますね。葉隠さんなんか手袋とブーツだけですし。

ちなみに兄さんは母さんの手作りのコスチュームで、私は背広に狐面だけのシンプルなものです。背広は父さんのお下がりを防刃や防弾仕様に仕立て直してもらい、顔を覆う狐面は防塵防毒と機能がついています。

ヒーローよりSPとか戦闘員みたいとか言われてますね。前世もこんな感じだったからしっくりきて動きやすいのですよ。ぶっちゃけ六式と覇気で装備の強度はなんとかなりますし。

授業内容についてはオールマイトがカンペを見ながら生徒達の質問に聖徳太子しつつも説明した。

というか皆が熱心なものも分かりますが先生の説明終わってから質問しましょうよ。

内容は対人戦闘訓練。

敵組とヒーロー組に分かれての屋内戦。

ヒーロー組は制限時間内に敵を捕まえるか核兵器の回収が勝利条件で。

敵組は制限時間まで核兵器を守るかヒーローを捕らえること。

班分けと対戦相手はくじで決めて、人数の関係上3人組もある。といった感じだ。

なおそれぞれ開始前に作戦会議の時間と敵組は希望で準備時間を与えられる。

やり方に個性次第では個人戦闘による制圧戦から、状況を活かした頭脳戦、トラップを多用した攻城戦もできますね。

私が組むことになったのは八百万さんと峰田君、対戦相手は耳郎さんと上鳴君ですか。

さてどうしますか。二人ともサポート役として有能だからなんでもできますね。

そして最初の戦いはヒーロー組が兄さんと麗日さん、敵組がボスと飯田君の組み合わせです。

「なあよお」

「なんです？」

訓練を地下モニタールームで見ていると、峰田君から声をかけられます。

「片方は双子の兄で、片方は幼馴染なんだろう。親しくて詳しいならどっち勝つと思うんだ？」

勝敗予想ですか、飯田君と麗日さんの個性と実力は昨日知りましたからそれを加味して。

「敵組、ボスと飯田君ですね」

今回は麗日さんが運が無い感じですね。

「おう、そらどうしてだ？」

切島君も気になったようで尋ねてきます。どちらも身内だから臆目はないと判断したようですね。

「単純に戦闘力差、戦闘力の合計が敵組が上です。」

ボスも飯田君も対人戦闘で兄さんと麗日さんより強いからです」

ボスはこの中で実力が頭抜けていて、兄さんと飯田君は出力は兄さんが上でも個性の熟練度と体捌きは飯田君が上、暴発を警戒してぎこ

ちない動きの兄さんより動きやすい場所の飯田君は強いでしょう。麗日さんは触れたら勝てる反則的な個性ですが今回は相性が最悪です。爆破にエンジンは無重力にしても機動できる個性ですし、そもそも彼女では二人に触れることが先ずできない。

「作戦次第ではまだ希望がありますが、それも敵組の油断がないと無理でしょうね」

ボスが油断なんてするとは思えません。

第11話

屋内での対人戦闘訓練。

その最初の戦いはボスと飯田君の勝利です。

ビルに警戒しながら侵入した兄さん達、だがそこには拠点を警備役として巡回していたボスがいた。二人と遭遇したボスは先ず麗日さんを落とす、ワンフオーオールにて全身強化した兄さんと激闘を繰り広げた。だが幼少時より私と組手をしていたボスは高速機動戦に慣れているが、兄さんは強化された身体能力を未だに持て余していた。迫る制限時間に焦り強化率を上げすぎてしまい、動きのバランスが崩れたところを討ち取られた。やはり経験の差、個性を用いた戦闘ができることと個性を使えるでは大きな差があったのだ(むしろ食い下がれた事実が異常だが)。

終了後の講評、ボスによる単独戦闘で評価は良くないかと思われたがそうではない。ボスと飯田君は話し合いの段階でヴィランが交代で見回りしていると設定していた、だからボスが遭遇したから戦ったのであって飯田君もやる予定だったのだ、役割を果たしきったためボスチームは二人とも良い評価だ。

そして兄さんチームだが、これも問題はない。訓練の設定で格上との戦闘は想定できたことだし、落とされた麗日さんに被害がいかないように戦った兄さんの立ち回りも悪くなかったからだ。

雄英高校主席合格者、その実力をボスは皆に示すことができたのだった。

さて私達の番になったのだが、私達は敵組で核兵器の防衛だ。ボスに倅い見聞色の覇気でヒーロー組二人を特定し狩りにいっても良いが私の実力を知るオールマイトは良い顔をしないだろう。

だが八百万さんと峰田君では耳郎さんと上鳴君の戦闘に長けた個性を持つ二人相手では分が悪い。仮に拘束に成功してもあの二人のヤケクソな個性発動で道連れにされかねない。音波に電撃は適当にぶち撒けても人を気絶させるには充分だ。

となると、

「二人とも作戦があるのですが」

やるべきはロールプレイ、その知識をくれた兄さんに感謝ですね。

「で、どうするよ耳郎？」

「ウチが索敵、アンタが攻撃。相手は一年次席と推薦組に峰田だしね」
「峰田がオマケ感あるな」

「オマケじゃないよ、峰田は拘束向け個性なんだから油断しないでよね」

「ま、いくら強くとも電撃は防げないっしょ。余裕だつて」

「爆豪と緑谷兄の同情の眼差しが無ければそう思えたんだけどね。狭いビル内ならウチらの個性が有利な筈なのに」

「耳郎は実技試験一緒じゃねえの？」

「OP 敵を撃退したとは聞いたけど緑谷弟はよく分からないの。個性も不明だし」

「爆豪の手下じゃね？」

「それだけの大したことないヤツなら助かるけど、体力テストトップとかなんなんだろう？」

この時上鳴と耳郎は警戒しつつも敵チームの戦力である緑谷来久を舐めていた。まだ二日目とはいえ爆豪に常に付き従う来久を強者とは事前情報があっても思うことができず。またどうしても自分らに有利な状況だったからだ。

「お待ちしておりました」

だからこそ緑谷来久はそこを突く。

「本日調査のために来られたヒーローの方達ですね、どうぞこちらへ」
そのヒーローらしからぬ背広姿を活かし、使用人あるいは社員を装う。

その自然過ぎる、本物の社員としか思えない仕草により有無を言わずに二人をノセる。

自分らの有利な状況へと。

「お茶のぐい用意ができております」

「あ、はい」

その歳不相応な動きに耳郎はノセられるが、

「とりあえず一人だし電撃いっとくか？」

上鳴はノセられなかった。

「百お嬢様が着替えられてお待ちです」

「早く案内してくれ」

作戦会議時の峰田の助言であるこの一言までは。

ヒーロー役二人を連れていった先は、調度品も整えられた一室。八百万の個性にて創造されたそれらにより応接室として使用できる水準だ。

他の試験にはなかった調度品に驚いている二人にソファを勧める。

「お嬢様とお坊ちやまはまもなくおいでになります。申し訳ありません何分準備に手間取ってまして」

「準備？」

首を傾げる耳郎に来久は告げる。

「都市内に咲く美しき破壊の華、それらをより彩る準備にですよ。そう、無力に打ちひしがれる若きヒーローという添え物を見せるためのね」

トンつと完全に油断していた上鳴の首に手刀を振るい意識を奪う。油断させずともできただろうが、この状況下ならできてもおかしくない。

「嵌めたね」

「はい、拠点を破損させたくないものでして。ああご安心ください、お二人の命は核爆弾が起動するまで保証いたしますので」

「ウチらの負けだけだから、言うけどさ」

「成り切り過ぎだよ緑谷弟」

「褒め言葉として受け取っておきます」

「いや講評なんだけどね、あのさ来久少年」

「気まずそうにオールマイイトがちらちらこちらを見る、言うべきことを悩んでいるようですね。」

「普通に敵の手口なんだけど、礼儀正しく招いて罠に嵌めるの」

「一番活かせる形がコレでしたので」

「うん、八百万少女が用意と核兵器の守り、峰田少年は取り逃がしを避けるために出口に配置、来久少年が先導と捕獲、役割はきっちりしてたね。ただね、ちよつとやり過ぎかな？最初の授業でやるレベルじゃないね」

「あまりにもヴィランだったか、それでこの気まずそうな反応なのか、しかし。」

「この作戦は兄さんに借りた漫画をそのまま再現したんですよ」

「状況もまんま同じでしたし。」

「あーっ!!見たことある光景だと思ったら『鉄面ヒーロー アイアンマスク』の第三巻のエピソード『助けろっ!!囚われのヒーロー達』のプロローグシーンそのまんまだよっ!!」

「二「お前が元凶かい、ヒーローオタク」」

「あまりにも状況が一緒だったので敵サイドでやってみました。途中で上鳴君が釣れないで攻撃してくる可能性があったので峰田君の助言は本当に助かりました。」

「上鳴がカワイイ娘に反応しない筈がないってオイラ分かってたぜ(ドヤ顔)」

「まさに助平は助平を知るのですね。」

「あ、漫画だったんだ。まあフィクションどおりにいくとは限らないからあまり参考にはしないようにね。今回は訓練で成り切ると想定したからノツてしまったのだろうしね」

「むしろ緑谷弟の社員感というか部下感が凄かったけど、同い年なのにバイトでもしてたの?」

「いやあ何かを演じることは得意でして、誰かを演じてる方がラクですし」

「あああうん、来久少年は個性が特殊だからねあまり追求しないよう

にね」

「誤魔化し下手かオールマイト」

前世に多少触れてしまいましたがコレもまずいのでしょうか、オールマイト先生が慌ててボスが突っ込んでますし。変装や成り代わりはCPOの仕事でもよくありましたからね。

「耳郎少女と上鳴少年も気を落とすことはない、今回は君らが索敵と制圧ができる実力者だから取られた作戦だ。ただわかりやすい強さは警戒されてこんな搦め手を用いられる。ヒーローになるに当たって頭に入れておいてくれ」

「二はいっ!!」

こうして全員分の訓練は終わり、初めてのヒーロー基礎学は終了した。

クラスメートの実力の高さにその性格も大分理解できました。海軍の新兵達のように理想と目標がしっかりとあるようです。

将来、ボスの事務所を設立するにあたってスカウトするべき人員をピックアップしておくべきですね。

「なあ緑谷弟」

「来久で良いですよ」

コスチュームを更衣室で着替え教室に戻ると、放課後に残って皆でヒーロー基礎学の反省会をするそうです。それは有意義ですし、皆と親しくなる良い機会なのですが。教室を見渡すと既にボスは行ってしまいましたか。もとよりその予定でしたからね。

「すいません、今日は予定ありまして。また今度誘ってください」

「そっか、ならまた今度誘うわ」

「ただ兄さんの分析力は凄まじいので参考になるかと、皆さんを丸裸にする勢いで解析してくれますよ」

「その話詳しく」

「セクハラだよ」

「変態かよ」

「冤罪だよっ!!丸裸の意味違うからっ!!」

楽しそうだから名残惜しいですがボスを待たせるわけにはいかないです。確か職員室ですよ。

「どうした遅かったな」

「すいませんボス、ヒーロー基礎学の反省会に誘われてしまいました」
職員室前にて合流する、ボスは予定通り訓練室使用許可申請のプリントを持っていた。

「そつちも良いが、優先はこつちだ。埋まる前に借りとかねえとな」

放課後の訓練室の使用。生徒手帳に記載されていた情報を私達はすぐさま活用する気であった。施設に限りある以上は使用できる者にも限りはある。早く動くにこしたことはないのだ。

「トレーニングルームも通ってたジムより設備が良いし何よりリカバリーガールがいる。退会して土日もこつちだな」

「ですね、土日もプロヒーローの指導を受けれることは有意義です」

そう時間は有限。ボスの野望、私の夢のためにはできる最善の手順で動く必要がある。

「まずは確認からだ、行くぞ」

「承知しました」

「ハーハッハハ、秘密特訓、バレてしまえばただの特訓だよねえっ!!」
訓練室についたらそこにはB組の生徒達と腕を組んだポーズの物間君がいました。

「いや秘密じゃねえし」

「許可申請いるから隠せませんよ」

「だが、そんな抜け駆けは許さない。ブラドキング先生がA組の主席コンビがもう動いていると教えてくれたからモロバレなのさっ!!」

「聞けや」

「いや情報流すの良いんですかブラドキング先生」

私達の言葉はそれでも物間君には届かない。

「ヒーロー基礎学をやった上でさらに訓練しようとするその精神、学ばせてもらうよっ!!」

「ああやる気ある良い漢達だ」

「いやどんなスタミナよ」

「焦り過ぎじゃないかしら」

うーんB組の反応が感心半分、呆れとどん引きも半分くらいですね。まあ確かに先走りはしてませんが。

「余裕なんてねえんだよ」

ボス？

「雄英卒業したらプロヒーローに成り、トップに登りつめる。そのために時間を無駄にはできねえ」

ええそうですね、見据えるのはヒーローになったその先です。

「先ずは実力をつける、そして体育祭で実績を作り、職場体験で伝手を結ぶ。そして夏の仮免許試験でヒーロー資格を取得する」

そうそれが入学前に決めた私達の予定。

仮免許さえあれば学生の立場でも経験できることが一気に増える。

それがトップヒーローになる第一歩だ。

「一年で仮免なんて前代未聞だよ」

震えながら物間君は言う、だけど。

「だからこそやる、そして学校に許される実績も作り上げる」

平和の象徴を超えるのは生半可では無理なのだ。

「野望のために最大火力で爆ぜる。俺達はそのつもりで此処にいるんだよ」

ボスの覇気を込められたような宣言にB組の生徒達はただ圧倒され呑まれた。そして私はボスの言葉に打ち震えていた。

そうこれこそが私のヒーロー、私の主、爆豪勝己なのだ。

第12話

「ま、せっかくB組全員と顔合わせたんだ名乗っておくか。俺の名は爆豪勝己、オールマイトを超えるナンバーヒーローになる男だ」

「流石ボス、名乗りからして格が違います」

「後ろの能力だけは高いポンコツが緑谷来久、俺のサイドキックだ」

「いやあ」

（（照れてるけど褒めてないよね））

ボスの紹介に照れていると何やら言いたげな様子のB組の皆さん。

けれどボスの言葉は真実だ。

前世もそうだったが私は指示待ち人間、感知能力が高く異常を察知できても、自分はなんとかなるからそれに対して反応できない。強いからこそその反射能力の鈍化、それが私の数ある欠点の一つだ。

危機感とは小動物が如き弱者だからこそ研ぎ澄まされるものなのだ。

「それでB組の皆さんも訓練ですか？ 私達は施設の確認後に軽く組手などの予定ですが」

個性使用を許されたスポーツジムや国営の武道館や体育館はある（有事の際の避難所も兼ねて）、だが破損したら弁償だし使用にあたってはお金もかかるためそう頻繁には借りられなかった。廃ビルや廃工場などの人気がない場所での訓練もしたのだが、いかんせんボスの個性は目立つから最高火力の訓練などできなかつた。地味とすら言われる身体能力増強タイプがヒーローとして活躍しているのも、訓練のしやすさという点がアドバンテージになっているからかも知れない。

ぶつつけ本番に等しい個性をフルに使用した実技試験やら授業であそこまで動けるボスはやはり天才なのだろうと思う。私との組手では火力を抑えた殴り合いだったのにな。

「僕達の目的？ 僕達の目的、それはねえ、……いや特にないけど」

とにかく私達が訓練場を借りたから来たらしい、中心人物のその言葉に誘われたからとか流れでついてきたらしい人達はコントみたくズッコケていた。

「誰もが君達みたくヴィジョンがあると思うんじゃないっ!! 遊びもゲームも趣味も恋人作りも必死に我慢して勉強に費やした灰色の中学生生活っ!! それで受かった夢の雄英高校で舞い上がらない方がおかしいだろうっ!!」

うちのクラスはそんな気分相澤先生インパクトで消し飛びましたけどね、たしかに合理的で効果的でした。あと趣味のくだりで吹出君と凡戸君と黒色君が顔を反らして、恋人のくだりで円場君と回原君と泡瀬君が崩れ落ちて、灰色のくだりで取陰さんと小森さんが胸を抑えていますよ、仲間の被害甚大じゃないですか物間君。

「いや泣くなよ」

泣いて叫んでますねえ。

「というか個性使用だって手探り段階でなんでそこまでやることを理解しているのさっ!!」

私は前世の経験ですが、ボスは才能だからたちが悪いですよ。

「ま、まあなら見てるとかしたらどうだ？俺達も軽く流す予定だしな」
本来市街地の機動戦闘なんて実戦じゃないと出来ないのに、ここの施設なら経験できますしね。

ボスの物間君達の反応に引きながらの言葉に彼らは頷いた。今ままであまり見る機会もないでしょうし。

「ところで君らの個性は何なんだい？それだけでも知らないと見ても分からかないしねえ？」

あ、これが本命で目的ですか。物間君が明らかに目の色と表情変わりました。さっきのやり取りも本心でありながらブラフとは、交渉役に向いてそうですね。

「俺は爆破、汗腺からでる起爆剤を操れる」

「私は前世、自分の前世を明確に覚えています」

だからといって知られて困るわけではないですが。

「前世？」

分かりやすいボスの個性はともかく、私の個性は予想外みたいです
ね。傍から見たら衝撃波や超身体能力だと思えますよね。

「なので皆さんより精神的には三十年くらい年上なんですよ」

個性の利点による牽制は戦術の基本。

私の言葉に皆さん顔が引き攣ってますね。

（（それ享年三十歳ってこと？））

「ボケ」

「ア痛っ。痛いですボス」

押し黙るB組に上手くいったと思ったボスに頭を叩かれました。

「お前の前世情報はそんなに流すな、どこを聞いても顔が引き攣る内
容なんだよ」

「今のも駄目なんですか？」

天竜人のくだりじゃないのに。

「お前がその判断ができねえから黙れってんだ。デクみたいな強心臓
はそういうねえよ」

兄さんに最近話した内容もボスの許可得てですしね、オールマイト
や教師陣は大人でヒーローだから平気でしようし。

「それとコイツの個性は死んだ瞬間もその時の痛みも明確に思い出
す、物間の個性が個性に干渉するタイプなら気をつける。コイツにし
ても個性発現時に精神的ショックで廃人に成りかけたからな」

個性の停止や封印ならともかく、模倣や使用に奪取なら精神的影響
で最悪死にますからね。

「そ、そうなのかい気をつけるよ」

怯えた様子の物間君に追加で伝えよう、うっかりで発動したら命に
関わるのだし。

「死ぬという体験は死ぬほど痛かったですよ、大薙刀を体に刺されて
震動波で爆裂四散されたのもものすごく」

痛みよりも記憶の方が辛かったですけど。

「アウチッ」

「だ、か、ら、黙れと言ったよなポンコツ」
痛いですボス。

マシンな情報だと思いましたがこれも駄目なんですか。

「き、君らに教えてもらつてばかりじゃ駄目だよね。僕の個性はコピー、触れた者の個性を5分間使用できるのさ、モノに依るけどね」「死ぬトコだったな（でしたね）」

5分間もあれば記憶のフラッシュバックでショック死しますね。

「だが頼もしい個性だ」

「チーム組めば単純に戦力が二倍になりますね」

似た個性は数あれど同一個性は血縁者でも発現しない、最適な連携も出来て、誰の代わりも務められる凄いい個性ですね。

「ヒーローになれないってよく言われたけどね」

過去を思い出し自嘲気味に笑う物間君。

このヒーローらしいとかがよくわからない基準なんですよ、前世の海軍もコワモテばかりでしたが彼らは正しく正義の味方でしたし、エンデヴァーとか威圧的でヒーローっぽくないですよ？

力は力なんだから使い方だと思いますけど、むしろ物間君のコピーはヒーロー活動以外だと使いみち無さそうですし。

「とにかく始めんぞ来久」

時間も押してますからね。

「軽く流す組手で、市街地での機動戦ですね」

「使用時間終了までやるぞ」

「承知しました、マイヒーロー」

なるべく壊さず迅速に。

ボスが市街地での戦闘に馴れるために。

「何あれ」

こうして開始した組手。

B組の誰かが思わず溢した言葉が彼らの本音。

驚く彼らが見たのはあまりにも大きな実力差。

爆破の個性にて爆音と軌跡を残しながら襲いかかるボスに、足場なき空中にて地面と同じようにステップを刻み踊るように回避する私。避けられぬ攻撃は鉄塊にて受け止め防ぐ。

ボスの個性である爆破は強力だ。爆ぜる時の衝撃は人の意識を奪うには充分だし、発生する火炎は容易く人体を焼く。通常の生身なら身体を焼かれた痛みにもまず耐えられないし、皮膚という守りのない重要な知覚器官である眼球は熱気を前に開けてはいられない。

本来人に向けることすら躊躇うような威力なのだが、ボスは天性のカンで殺さない火力を悟っている。

ゆえに爆豪勝己は強く、最難関な雄英高校を主席で合格するには足る実力者なのだ。

だがそれを捌く私も等しく人外。

というか前世でも何故か意識を失うような衝撃でも気合で耐えられたりできたんですよね。

市街地を模した訓練施設で私達は猛攻と回避を繰り返し、ボスは戦いを学ぶ。最善な火力、機動に必要な加減、最適な位置取り。昨今のヒーローは迅速さこそ求められていると聞かすが、まさにボスはそれに適合したヒーローなのだろう。

爆破纏う両手、遠心力を重ねた両足、ボスの攻撃を反らし捌き受け止めながら組手を続けた。

「足にも爆ぜるような機構を組み込むべきではないでしょうか？」

爆破による機動のためか両手は塞がりがちなため、最近足技主体に成りつつあるボスのスタイル。大きく弧を描き振るわれる両足は鉄塊を揺らす程に強力だ。そこに威力を増すような工夫をすれば機動と攻撃が両立できる。脚などただの飾り？ならば脚で攻撃すれば良い。

「考えておくが、温存する手札だな。当面は両手も両足も十分な威力がある」

たしかに切り札や隠し札に成り得るか。

私のような機動と防御を両立して存在などそうはいないのだし。そうでなければあまりにも過剰な攻撃力だ。

「仮免取得には救助項目もあるだろう、市街地の機動は最優先だがそっちの勉強も怠れねえな」

「自分達での対処より救急隊への引き渡し、取り次ぎ手順を知るべき
かもしれません。オールマイトも現場に駆けつけますが、治療より救
助を優先してますし」

現場でのヒーローの役割、実際どうしているかは現場で学ばないと
分からないですね。

「体育祭で結果をだし、実戦に携われる事務所で職場体験を行う」

「となれば事件解決数最多のエンデヴァーが目標になりますが、轟君
がいる以上は厳しいでしょうね」

「相澤先生の言うように放課後マックなんてしてる余裕ない」

「なんですとっ?!」

「絶望顔するなポンコツ、夕飯前だ我慢しろ」

「マックはオヤツなのです」

私の嘆願を軽く流すボス。まさかこのあとにマックに寄らぬとは。

「フッフ、フハハハッ!!」

なんです、このやけっぱちみたいな叫び声。

「これで勝ったと思わないでよねっ!!」

僕達だつてまだまだこれからなんだっ!!

今は君達が、実力知識情熱信念実績容姿に理想が僕達を上回ってい
るだけなんだからねっ!!」

いやそこまでは、私が上なのせいぜい戦闘能力くらいですつて。

「これで勝ったと思うなよーっ!!」

と叫びながら物間君は走り去っていききました。

組手を見て実力差を感じたのですかね。

「ま。あんなんだけどそう悪いヤツじゃないから。私達もまだ知り
合つて二日目だけど」

「反骨心とやる気があるヤツは嫌いじゃねえよ」

と、すかさずフォローを入れてくる拳藤さんにボスはそう返しま
す。

私も彼の反応が面白いと思いますね。

そう軽く話した後B組のメンバーと別れました。皆さんもA組と
同じくらい良い人ばかりなのでクラスメイトを連れて交流したいな

と思いました。

第13話

放課後マツクのない絶望を超えた翌日。

早朝一番に学校に来てボスと私は夏の仮免試験のために勉強を始めました。

その設備と機密の関係から無人になるということの無い雄英高校。さらに最新の警備システムにより学生証さえあれば問題無く登校することができません。

家でも勉強をしてはいるが学校の方が気合が入るような気分になりますよね。

そして徐々に登校してくるクラスメートからマスコミが校門前に張り付いていたと聞かされ、早めに登校したおかげで私達は遭遇せずにすんだようです。未だにヘドロヴィランの件で騒がれることがあるので、煩わしいことが嫌なボスが今後もこの時間帯に登校するぞと告げ、私もそれに頷きました。

朝のホームルーム、相澤先生から戦闘訓練の成績を見せてもらったと言われ評価をされます。どうやら戦闘訓練などは先生方で見られるようになってきているみたいですね、評価は良かったようです。皆初日にしてはよくやれたそうですね（私も特に言われませんでした）

そんな話の後でわざとらしくゴオツと気合を込めて言われたやるべきこと、それは学級委員長を決めることでした。今までから無駄に警戒してたみんなも学校つぽいことにホッとしてました。

しかし、

「どうしますボス?」

「興味ねえ」

一部（私、ボス、轟君）を除いて皆がやるやると手を挙げる中、私はボスに尋ねます。ボスは右手に広げた『最新版救急救命指南』を読みながら素っ気なく返してきました。普通なら雑務扱いな学級委員長も集団を導く素地を鍛えられる役、けれど鍛える必要があるということは出来ないから。充分に熟せる自信があるならわざわざやる必

要はないと判断したのでしよう。

しかし女性と話すときョドる兄さんまでやりたがるとは意外でした。集団を導く能力が足りないからでしょうか？次の課題は牧場で羊飼いでなくてももらうことにしましょう、言葉の通じない動物を導けるなら人間相手でも出来るようになる筈です。

そんな私の思考を察知したのかブルリと兄さんが震えて、飯田君が投票を提案しました。いやそれ入学してからの印象オンリーで決定されませんか？まあ雄英高校ヒーロー科に入れる実力者だから誰だろうと問題はないでしょうが。

露骨に面倒そうなボスが辞退を皆に告げ、私もそれに追従。その結果私とボスが飯田君に投票したのもあって飯田君が学級委員長に決定しました。

「旨し」

「しかし良かったのか君たちは？」

昼飯、それは学校生活の幸せの6割を担う素晴らしき時間。昔からボスのお供をしていたその時間に今回は飯田君、兄さん、麗日さんも参加しています。

「学級委員長か？中学の時やってたから良いわ」

ボスは中学校在学時の3年間生徒会長にも就任されてましたしね。

「それは俺もだが。君たちが辞退しなければ投票していたぞ」

飯田君の言葉に嫌そうな顔をするボス。クラス内でもそんな空気だったからわざわざ辞退したんですよね。

「ところで兄さん。羊と魚と鳥、どれが良いですか？」

導くなら羊以外にも魚や鳥もありですよ、虫は難易度高いから次回です。

「嫌な予感しかないよっ!!今度は僕に何をさせる気なのっ!!」

オールマイトの後継者である兄さんには必要なことですから。

さらに麗日さんの発言から飯田君の実家のことなどを話している
と、

「おや、君たちもかい？というか来久君は何を食べているのさ？」

そこにはB組の物間君がいました、彼もお昼は食堂ですか。
ちなみに私が今日食べているのは、カツおひつ、天ぷらおひつ、牛
おひつです。

井だど何十杯も食べて食堂に迷惑でしょうからおひつに具をのせ
てもらいました、たつぷりの具が贅沢で味も染み込んで旨し。

「彼は？」

飯田君達の質問に、B組を短期間でまとめ上げた傑物ですと答えま
す。求心力というよりは扇動力ですが、凄い手腕ですよ。

「あ、物間君。兄さんの個性は身体能力の一時的な強化ですが出力が
半端ないので、下手にコピーしたら体が耐えきれずに爆散しますよ」
「双子揃って爆弾かなにかなのかいっ?!」

念の為注意したらそう叫ばれました。

彼からしたらそうですよね、双子揃って個性発動が命に関わりま
すし。

中にはコピーできない個性もあるらしいですが、下手にコピーした
ら危ない個性もありますよね。

「それが彼の個性なのか？」

「限度はあるらしいが頼れる良い個性だよな」

「副作用とかはどうなるんやろ？」

「なんとという応用力のある個性チーム活動でのコンビネーションはも
ちろん替えの効かない個性の代理もこなせるし時間制限も触れ続け
れば関係ないなら制限ですらないし遠距離放出系なら安全地帯から
の制圧だつてできるそれにワイルド・ワイルド・プッシーキャッツの
ピクシーボブやセメントス先生の個性が使えるなら崖崩れに山崩れ
に堤防の決壊などの災害時に大活躍できるしそれだけではなく」

「え、何コレ怖」

「見慣れてないと怖いですよね」

「見慣れていても怖いからな」

「見慣れることも怖いよね」

「つまり出久君は怖いのか？」

「「大体そんな感じ」」

「みんな酷くないっ!!」

とコントのようなやり取りをしていると、突然校内に警報が響き渡る。セキュリティ3の突破により屋外への避難が指示されるが、

「何してんだアイツラ」

「雄英高校生ともあろう者達が無様だねえ」

ボスと物間君は席についたまま呆れたように押し合いへし合いの生徒達を眺めていた。

「避難誘導に先導役が必須なわけだ」

「彼ら迅速な反応はしても避難経路すら頭がないじゃないか」

勢いに吞まれて立ち上がった飯田君達もおしくらまんじゅうに混ぜられてしまいましたね。

「僕らはどうする?」

「指示には従うべきだが、とりあえずアイツラを落ち着かせるか。」

命令だ来久、やれ」

「イエス、マイヒーロー」

久しぶりの命令に嬉しくなりますが、命令は速やかに遂行する。混乱する集団を冷静にするには、それ以上の衝撃をぶつけること。

ソレの発動に予備動作らしきものはない。

ただ感情を昂ぶらせ圧を放つ。

前世ですら使い手の少ない霸王色の覇気、それを気絶させない程度、冷水をぶっかける程度の感覚で。

シンツと場が静まり、避難しようとしていた集団はその場で足を止めていた。そこへボスが、

「緊急時の避難の仕方は習ったろ、先ずは落ち着け、そして周囲を見ろ、それから避難だ。」

安心して行動しろ、仮にヴィランがここに来たとしても俺達が潰してやる」

堂々と座りつつも警戒を怠らず戦意を滾らすボスの姿に誰もが圧倒され、その勢いそのまま言葉に従い避難を再開しました。

しかし、

「妙だな」

「君もそう思うかい？」

ええ、窓から侵入者がマスコミだと判明しましたがそれにしても。

「警報が鳴ったのは雄英バリアーが破壊されたからだろう」

「壁を個性で越えたりした程度じゃセキュリティ3判定にはならないからねえ」

「しかし破壊音など聞こえませんでしたよ」

雄英バリアーの破壊自体は容易だ。一年のヒーロー科でも個性を使えば、よほど向いてないタイプじゃなければ可能だろう。けれど音も立てずに破壊するとなればそれが可能な者は限られる。

「俺やデクなら相応の破壊音がするな」

爆破と超パワーですからね。

「B組でも破壊はできてても無音となると、骨抜くらいかな？触れて物質を操れる個性、ピクシーボブやセメントスタタイプの個性だからね」
「つまり侵入者の本命はそのタイプの個性だった可能性 が高いというわけですか」

「マスコミにそんな個性持ちがいなければな」

「居たとしたら器物損壊と無断侵入で実刑だね」

いかにオールマイトのニュース欲しさとはいえそこまでするものでしょうか？

ただマスコミの中にその個性持ちがないのなら。

「別の何か、まあヴィランだな。がマスコミに騒ぎを起こさせるために雄英バリアーを破壊した」

「基本目立ちたがりなヴィランが名乗りあげてないなら目的は陽動」

「避難行動のため生徒は集団行動するため目的は生徒ではなく」

「人気のない場所で何かする、ってトコか？」

「けど警報が鳴れば重要施設は閉鎖されるよ」

「設備も総点検される筈です」

「人でも物でも仕掛けでもねえなら目的は嚴重に管理されてない情報ってトコか。今推察できんのは精々コレくらいだな」

「だね、下手な憶測で騒ぎを起こすべきじゃないし」

「騒動目的なら数日後にネットに動画が上げられる場合もありますか

らね」

人気の無くなりだした食堂で私達は会話をやめて、その列に加わり
ました。

近いうちに何かは起こる、ソレを確信しながら。

第14話

何かある。

そんな予感を抱えてから数日後。

本日のヒーロー基礎学はレスキュー訓練。

それぞれコスチュームを着るか選択し、距離の離れた施設にて行う実習です。

徒歩ではなくバスの移動が必要とは流石雄英高校というべきですね。

着任したての学級委員長である飯田君はどこからだしたのか笛を吹いて先導しますが、バスのタイプで見事に滑りましたね。

座席についてすぐに指南書を開くボスを見ているとクラスメート達が雑談をはじめてました。

蛙吹さんが兄さんの個性がオールマイイトに似ていると発言し、事実が事実ゆえにキョドる兄さん。切島君が硬化の個性は対人には強いが地味だと言えば、私の鉄塊を知っているため顔を引き攣らせながらフォローをしています。ヒーローは人気商売だから派手であり目立つことも重要だという話題になったところで、

「爆豪ちゃんはワイルドで人気でそうね」

と蛙吹さんが言いました。

「人気より実績で上に行きえてえがな。それに人気なら蛙吹のほうだろ、カエルはカワイイ両生類の代表だしな」

「ケロ、梅雨ちゃんと呼んで。あとありがとう」

うむ。

異性の言葉に謙遜しかつさり気なく褒める、女性の扱いすら心得るとは流石ボス。ならば、

「兄さん、ボスを見習って女性に甘い言葉を言ってください。相手は麗日さんで」

「突然なんでっ!!」

いつもの課題です。

「ヒーローは異性との接し方が重要です。オールマイトも街ゆけば女性からキスマークをもらう程異性の扱いに長けてますし」

「いやソレ外国でのことっ!!いつもそうじゃないからっ!!」

「オイラもナンバーヒーローになりてえっ!!キスマークが欲しいっ!!」

峰田君もまた叫びました。まあ男の夢ですからね。

「そして麗日さんは兄さんが人生で初めて親しくなった異性、彼女ならやらかしても大丈夫です」

（(酷い情報を暴露したぞ弟)(

（(やらかすの確定か兄)(

「いや、いくらヒーローに必要なからといっても」

まごまごしていても容赦はしません。

「そして判定は砂藤君です」

「なぜ俺っ?!」

「彼の個性はシュガードープ、甘さでパワーアップする個性ゆえ、甘い言葉への反応も一目瞭然」

「そんな個性じゃねえよっ!!」

個性は思い込めば進化するみたいだからやれると思いますけどね、悪魔の実もそうでしたし。

「さあレッツ、スウィートトーク (巻き舌)」

「「無視っ?!」」

時間は有限、思いついた課題は打ち込まねばならないのです。

「えっと、麗日さんはその、」

（(いや、やるんかい兄っ!!)(

今までの課題も全て突然はじめてやらせきりましたからね。

「麗日さんは、麗らかで可愛らしいですっ!!」

(ダメだな) (ダメか) (ダメだよ) (ダメですわ) (ダメダメだ) (を用いた緊急時の救助活動は未検証での応用は危険であり状況を悪化さ)(爆豪ってバスで本読んで酔わないのかな?)

「いやあ、照れるわあ」

言われた麗日さんの反応は悪くないですね。

褒められ慣れてないのでしょわか？

では判定の砂藤君は。

「う、うおーっ。ち、力が漲るぜえー」

セリフは棒読むですが、腕を上げてアピールしていますね。

(（気遣いの漢だぜ砂藤力道）)

彼の肉体を見ても個性が発動してるようには見えませんが、

「まあ良しとしましょう。次回はキョドらないようにしましょうね」

「良かった、終わった。え、次回？」

私の言葉に安堵した後には焦りだす兄さん。

やりますよ次回も（無慈悲）オールマイトの後継ならキスマークを付けながら平然と笑えるようにならないといけませんから。

と、そんなやり取りをしていたらいよいよ目的地に到着しました。

ついた先はあらゆる事故や災害を想定し体験できる演習場。どこかテーマパークみたいな作りなのはなぜなのでしょう。

そして説明してくれたのはスペースヒーロー『13号』災害救助でめざましい活躍をしている紳士的ヒーローにしてこの施設を作った人です。

どうやらオールマイトも参加予定らしかったですが、またやらかしてしまつて来れないみたいですね、それで良いのか新人教師と思つてしまいますね。近隣のヒーロー達も現場にいてもオールマイトが解決したら収入にならないのですが大丈夫ですかね？

13号先生が語りだしたのは自身の個性と危険性について、聞くほどにブラックホールとは恐ろしい個性ですね。むしろその力で人々を救う使い方のほうが個性を応用しているかのように感じてしまいます。

超人社会とは個性使用を資格制にし厳しく規制する社会。原則公の場で使わないことで成り立っている社会。まあ母の個性みたいに使いみちの無い力が大半だから使う必要がないですよ、今までの機械の方が大抵便利なわけです。

体力テストにて、自身の力の可能性。

対人戦闘にて、人に向ける危うさ。

今回のレスキュー訓練では、救うための個性の活用を学ぶ、というのが目的とのこと。

なるほど、これが力を人助けのために使うヒーローの在り方ですか。とても眩しくて尊いものですね。

けれど、

私達の想定通りにソレは起こってしまいました。

そんな予想は外れれば良い。

できれば取り越し苦労であれば良いと思っていた事が。

だがソレは起こってしまったのです。

敵の襲撃は。

なるほど、奪われたのはカリキュラムでしたか。

それならば確かに警戒はされにくいし、マスコミの対処で職員室は空きますね、

そして目的は、オールマイトとは。

ですが、

それでも先日の騒動は起こすべきではありませんでしたね敵共。

貴方達は時間を与えてしまった。

ヒーロー科において屈指のキレ者二人に思考させる時間を、最悪に備えて準備する時間を。

奇襲とは最初の一手で畳み掛けてこそ効果を発揮する戦法です。

突然の出来事で状況の理解と情報の整理に相手の思考が奪われているからこそ優位に立てるのです。

だが来る分かって以上、そう想定されている以上、そんな優位はもはや無い。

「命令だ、来久」

マスコミ騒動後、襲撃があると想定し、襲撃があると仮定して、どうすれば良いか、どうされたら最悪か、どうすれば最善なのか二人で議論していたのです。

ボスと物間君は自らの手札を確認し、打てる手段を模索し、打つ覚

悟を決めていたのです。

「敵共を叩き潰せ」

誰も傷つけさせない、誰も死なせない。

そんな最良の一手を。

「イエス、マイヒーロー」

たとえそれが、血が滲む程に拳を握りしめてしまうほどに葛藤する決断であっても。

自らも戦場に飛び込みたいという思いを噛み砕いて飲み干してでも。

我が主、爆豪勝己は宣戦布告するかのように告げるのです。

「あんな連中に誰も傷つけさせな」

これが後に世界に名を轟かすヒーロー。

『最前線の王』と二つ名で呼ばれる爆豪勝己の始まりの一戦である。

第15話

「嘘だろ？」

その言葉はどちらから溢れたものだったか。

黒いモヤから現れたオドロオドロしい格好のヴィラン達は、瞬時に近づいた私の手によってギャグのように非現実的に殴り飛ばされ宙を舞っていた。

慣れつつある英雄高校の日常、その少し大掛かりな実技授業。命を救うやり方を学ぶ時間に突然現れた途方も無い悪意に塗れた非日常。向けられる敵意、悪意、害意、欲望に心が吞まれそうになる中で割り込むように静かに響き渡る声。

その覚悟の込められた命令を心から歓喜し受け入れた私は動きだす。誰も傷つけさせないために。

六式の月歩と剃を併用した移動、指銃の速度で放たれるヘビー級ブローの獣敵、それらを同時に振るうだけで容易くヴィラン共を叩き潰すことができた。

(弱いな)

見た目の恐ろしさのワリには大したことが無い、というのが本音だ。

個性は容易く人を傷つけ命を奪える暴力。しかしそれは個性を扱わずとも同じこと。そんなものをわざわざ使わなくとも、少し大きな石で殴れば人は死ぬのだ。

比較すればこの世界に比べれば遥かに劣る質の銃とカトラスなどの刀剣類で武装した海賊達の方がまだ強いだろう。どうにもヴィラン共には後に引けない破れかぶれ感がないのだ。

当たり前か。海軍に捕まれば死刑確定の海賊と、警察に引き渡されても懲役ですむヴィランでは必死さに違いが出るだろう。

だからこそ攻撃に重さも鋭さも無く、チンピラらしいお遊びの暴力だ。

イラつくね。

あのマスコミ騒動からボスと物間君がどれだけ必死に対策を話し合っていたか。

どうすればよいか頭を悩ませていたのか。

どんな思いで私に命令を下したのか。

ああ、全く。

「許せないですね、ヴィラン共」

前世ではありえなかった感情を乗せた拳はお遊び気分のヴィラン共を吹き飛ばす。

結果としてニヤついた顔を浮かべたヴィラン共が驚愕し腰が引けだすまでさほど時間はかからなかった。

「なんだ、お前？」

首領格の手だらけ白髪男に私はこう返す。

「未来のナンバーヒーローの忠実なサイドキックですよ」

「爆豪、なんのつもりだ？」

「イレイザーヘッドはあの黒いモヤだけに集中しててください。この状況で厄介なのはアレだ」

「学生に過ぎないお前らが対処することではない、すぐに緑谷弟を下げさせろ」

「ダメだ、ワープ個性は封じておかないとクラスメートが散らされるし。あの手男とアンタは相性が悪過ぎる」

「なぜそんなことが分かる？」

「ヒーローもヴィランも個性合わせたデザインの格好をする、だからリーダー格の白髪手男の個性が手に関連するのは予想できる。なら無音で雄英バリアーを破壊したのはあの手男で、触れることで破壊する個性なら捕縛布と体術のイレイザーヘッドは相性が最悪だ」

「マスコミ騒動からそこまで考えていたのか」

「B組の物間も一緒に考えてくれたからな。激レアなワープ個性ありきのありえない予測が当たるとは思いたくなかったよ」

「外部の連絡はできない、なら俺がワープ個性を封じることにも緑谷弟が戦うのも納得できる。13号は戦闘に長けてないしな」

「加えて向こうの切り札らしき、脳みそむき出し野郎がヤバイ。多分アレは俺より強い」

「大した目利きだ」

「戦闘能力だけは桁の違うポンコツと向き合っていると嫌でもそうなるんだよ」

「後で説教の覚悟はしておけ、だが一つ確認する。緑谷弟は勝てるんだな?」

「ハッ、舐めんなよ。俺のサイドキックは最強だ」

やる気が尋常じゃないくらい上がりますよボス。

これくらい距離なら聞こえますから。

ニヤリと笑う姿まで想像できますね。

相澤先生も納得してくれて何よりです、オールマイトによる前世暴露が効いてそうですね。

あのモヤ男、ワープ個性対策はイレイザーヘッドにしかできない。いかに私であつても個性の発動はどうかできませんからね。13号にしてもあの殺傷能力マシマシな個性を救助に使っているだけでも驚きですから、対人戦闘までできるとは思えません。後方にてクラスメートの守りをしてもらうべきです。さつき見聞色の覇気のザツと探りましたが施設内にヴィラン集団がいます。クラスメートは各所に散らして叩くつもりだったんでしょう。

通信が無理だから誰かを応援を呼ばせるために走らすべきですが、肝心のオールマイトが活動限界でしょうから当てにはできませんね。

ワープ対策にイレイザーヘッド。

生徒の守りに13号。

指揮にボス。

戦闘の私。

話し合った結果の最善手。

襲撃だけならこれで詰みですが、

「やれ脳無」

ボス達も予想できなかったヴィランの目的と、そのための切り札。「ふざけたチートキャラがいるみたいだがこれで仕切り直した」

手男の言葉を受けて動き出す脳みそむき出し。

「オールマイト対策されたショック吸収と再生個性持ちのハイパワーの人間サンドバッグ。ガキが勝てる代物じゃねえよ」

中々のパワーとスピードに殴られる私、鉄塊にて防ぎましたが口の中切りましたね。

「来久君っ!!」

口から垂れる血を親指で拭きます。

全く問題ですね。

「授業開始が遅れるじゃないですか」

「出来るわけねえだろ」

大した事がないと態度で示してみたら案の定キレたみたいです。けどね、

「オールマイト対策された複数個性の人間サンドバッグですか、確かにそのパワーにその個性なら大概のヒーローには勝てるでしょう」

活動限界のある弱ったオールマイト確かなら厳しいでしょうね。

「オールマイトより強い私には何か意味ありますソレ?」

「ハアツ?」

武装色の覇気による右手の硬化、六式の剃にて脳無とかいう奴の目の前に移動してからの、

「獣厳大威倒」

右拳一閃。

武装色の覇気にて硬度と威力を高めた最高速度のヘビー級ブロー。

爆散させないよう吹き飛ばしましたが、えらい打ち上がりましたね。しかし今妙な感触がしたような? ショック吸収される筈なのにそうでもなかったですね。もしや武装色の覇気はロギア系の通じたように個性に効くのかも? 後で検証しますか。

「テメエツ!!」

「あんまり動かないでくれます?」

激昂する手男に冷めた気分で告げる。

「斬らないように打つの面倒なんです」

嵐脚峰打ち（風に峰なんてねえよ）。

本来鎌風にて相手を切り倒す嵐脚に切れ味つけないのは加減が大変です。前世と違って殺してはいけななのかなりの枷です。

「クソがッ!!」

とはいえ三日月状の風の塊が体を通り過ぎたら崩れ落ちるくらい痛いですよ。

「死柄木吊っ!?!」

両方まとめてぶち抜いたからモヤ男さんももう動けませんよ。あとは拘束して施設内のヴィランを片付けて警察に引き渡しておしまいです。

「来久っ!!」

油断はしていなかった。だがクラスメートから突然放たれたレーザーにボスの叫びで気づくことができとっさにその場から飛び退く、私を狙って? いや射線にはヴィランもいたが。

すると倒れ伏したヴィランの口からゴポリと泥のようなモノが溢れ手男とモヤ男を包み込む。

「今回は失敗だった。まさかふざけたチートなガキ共がいるとな。だが今度は殺すぞ、平和の象徴オールマイトっ!!」

負け惜しみなのかその場にいないオールマイトに届けとばかりに叫ぶ。

「そういうの補助輪とってから言ってください。」

保護者同伴の悪事とか恥ずかしくないんですか?」

ボスの手甲による爆炎と私も嵐脚を泥の塊に追撃として打ちました。が当たることなくリーダー格達は逃げていきました。

命令達成ですね。

気になることはいくつかありますが、皆無事だから良しでしょう。

相澤先生達が職員室に連絡をとっているみたいですし、待ちぼうけヴィラン共を片付けながら待つとしましょうか。

雄英高校襲撃事件。

一生徒の対策により被害無く解決したその事件は、世間に少なくな
い影響を与えることになる。

とはいえその場に居た者達は違う。

同じ場所に居たにも関わらず何も出来なかった。

同じ情報を得たのに対策など考えもしなかった。

爆豪勝己は対応策を練り指揮をとり、

緑谷来久はヴィランを倒し尽くした。

生徒達は同じ学び舎の同級生との差を思い知らされてしまった。

命令しただけの爆豪に不満を持ちかけた者もいたが、共闘できない
自身の実力に誰よりも憤っていたのは他ならぬ爆豪自身だと血の滲
む拳から伝わってきた。

生徒達は何も言えずあらゆる感情に打ちのめされて帰路についた
のであった。

閑話 三人称視点

そこはとあるバー。

裏路地にひっそりと佇むその場所は、オールマイトに破れたオールフォーワンの所有物件にしてヴィラン連合と名乗る予定だった者達の拠点。

泥のようなナニカからゴロリと転がり出た白髪手男こと死柄木弔はモニターの先の闇の帝王にして自身に全てを与えてくれた人物に對し、息も絶え絶えに言葉を吐き出す。

「話が違うぞ先生」

『ああすまなかつたね。まさかあそこまでやれる生徒がいるとは思わなかつた』

『ワシと先生の共作 脳無までやられるとはもう』

『いや、ただ吹き飛ばされたことは負けとはいわないだろうドクター』
「こつちの作戦は読まれていた、こつちの戦力は一人のガキに潰された、オールマイトに会うことすら出来なかつたぜ、アンタの言つたことは全てデタラメじゃないのか？」

『疑う気持ちは分かるけど、それは誤解だよ』

『うむ、そもそもワープ個性がいる前提の対策なんて普通は考えんわい』

『まあ運が悪かつた、いるんだよああいった才能に溢れたまさに時代の寵児としか言えない存在はね』

『じゃが所詮は子供、今頃はまぐれ勝ちに浮かれとるじやろうよ』
「どうするんだこれから？」

モニターの向こうの二人の明らかに取るに足らない然とした態度に実際に相對した白髪手男こと死柄木弔は不満と疑問を思う。オールマイトより強いと気負いなく当たり前のように言つたアレは果たして舐めてよい存在なのかと。だが同時に、あの不可思議な体術を使い、未来のナンバーヒーローの忠実なサイドキックと名乗るガキは自身の嫌うヒーローの反応がまるで無かつたなとも思う。むしろ同

類意識、手を差し伸べた相手が違うだけの自分自身ですらないかも。目が似ていたのだ、毎朝顔を洗う時に鏡に映る自分自身と（基本糸目だが戦闘中は開いていた）

『我々は自由に動けない！ だから君のようなシンボルが必要なんだ。死柄木 弔!! 次こそ君という恐怖を世に知らしめろ!』

いささか不満気な死柄木弔をモヤ男こと特別性脳無である黒霧がベッドルームを運んだ後も、何処とも知れぬ地下深くにて闇の帝王オールフォーワンと盟友たるドクターこと殻木球大は語り合う。

「予定外の結果に終わったね」

「うむ、じゃがテスト上脳無の性能に間違いはない筈なんじゃがのう」
「なに所詮は試作品、失敗はあるさ」

「時代の寵児か、またしても現れるとは」

「気にする必要はないさ、いつだって現れるソレをねじ伏せて私は君臨してきた、始末しそこねたのはオールマイトだけだよ」

「ま、良い個性の提供者でもあるから有り難い存在じゃわい。今回はどんなレア個性かのう♪」

雄英高校襲撃が一学生の手によって失敗に終わってもこの反応。世代を跨ぐ程に裏社会に君臨してきた巨悪にとつていかに才能と実力ある金の卵と言ってもたかが学生など自分の平らげる目玉焼きの材料に過ぎない。そうかつて目をつけられてしまった若き日の相澤消太と白雲隴のように。

「それよりも彼だよ、青山優雅君。今回は良い仕事をしてくれた。打ち捨てた百円ライターに過ぎなかったのにね」

「そう言ってやるな、入学しろの一言で最難関校に受かってくれたがんなばり屋な子じゃろう。入試に落ちて脳無の素材になってくれとる子達も良い子達じゃがな」

「死柄木弔が捕まったら自分のことがバレるとでも思ったのだろうね、良い掩護だったよ。きちんとお礼の言葉を伝えたからまた期待できるね」

「何もしないでお礼を言っただけでえらく怯えていたのう。裏切る心配はなさそうじゃわい」

「裏切って困ることもさせないけどね、あくまでお遊びのついでのおまけだからね」

「クハハハハ」

闇の底にて巨悪らは笑う。

ただ楽しいげに笑う。

オールマイト殺害、社会の混乱のどちらも、所詮は本命のための余興に過ぎない。

死柄木弔の成長による器の完成、それこそが彼らの目的なのだから。

ヒーローのように守る存在などないやりたい放題のヴィラン達はさて次はどうしようかと愉しげに笑い合うのであった。

所かわって雄英高校会議室、ここでは先日の襲撃事件の会議が行われていた。

「死柄木という名前、触れたモノを粉々にする個性。あくまで学生の予想に過ぎないにしても、20代く30代の個性登録を洗ってみましたが該当なしです」

警察官である塚内直正がこの数日で調べ上げた調査内容を読み上げる。リーダー格である死柄木弔と黒霧と呼ばれたヴィランは公的機関に情報が無かったという結果に終わった。

だが本来推察される筈の死柄木弔達の人物像などはあまりにも迅速に緑谷来久がヴィラン達を撃退してしまっただめ行われることは無かった、ただその場にいたヒーローであるレイザーヘッドと13号により幼児的万能感の抜けきらないいわゆる子ども大人であるように見えたと言われた。

だが検挙されたヴィラン72名はそんな存在に賛同してことを起こした、それこそがヒーロー飽和社会により生まれた新たな問題なのだろう。

「ま、今回は生徒のお手柄だな」

「うむ、ウチの物間にも話を聞いたが随分と対策を練っていたようだ」

「何事も無く無駄に終わってもそういう話し合いは有益ですからね」

「ナゼ相談シテクレナカッタトモ思ウガナ」

一段落したところで話は別に、襲撃したヴィランを撃退した生徒達の件に移る。

特にマスコミ騒動からヴィラン襲撃を予想し対策を練っていた爆豪と物間は評価されていた。

「つつても相談されても答えられなかつたら？」

「本人達も考えた中で一番ありえない予想だったみたいですし」

「そうね、ヴィランにワープ個性があつたら雄英高校に襲撃できますっ!!」って相談されてもねえ」

「「そらそうだろ、としか言えん」」

ワープ個性は希少、公的に登録されている者は世界で20人に満たず、その全員が国に囲われているか監視されている立場だ。

だからこそ仮にワープ個性がヴィラン側に存在したとしても、二人が考えていた対策はA組は緑谷来久による撃退、B組は足止めに逃亡を主眼に置かれていたのだ。

「あとはヴィランを撃退した緑谷弟についてだが、何なのコイツ？」

「得た情報からしても厄介なヴィランに圧勝してますよね彼」

「個性である前世、さらに前世についても一通り聞いたんだがなあ」

「ファンタジー的な大航海時代で世界を支配する組織の秘密工作員と
いうか暗殺者ってお前」

「アンガイ我々モソンナ前世ダツタリシテナ」

「確かめたくもないわよ」

「まあなんだ、六式に生命帰還に覇気は使えたら便利なんだろうけどよ」

「六式と生命帰還はおかしな身体能力で、覇気は要するに気合いだろ？」

「右足が沈む前に左足を踏み出すことを続ければ水上を走れるを実現
してますよね」

「いや、やってみたらできたよ私にも」

「オールマイトが出来る基準で」

「前世でどうやって体得したんだ？」

「出来なきや処分されるからみたいですよ」

「闇深いな本当」

緑谷来久については前世が前世だけにその強さを納得してしまう教師陣。ビルよりでかい巨人族なる種族が無法者として暴れまわり、それら以上の実力者があらゆる組織に存在する強さのブチ抜けた世界。その中で最上位の実力者だったのならああも強くて当たり前だろう。

「オールマイトより強いとか言ってたしなアイツ」

「H A H A H A、私から見てもそうだからね」

「ただ其れはオールマイトが今の自分と戦う場合ではだそうですよ」

「「？」」

「オールマイトみたいなヒーローが自分のような一般人には全力では戦えない。本気で戦うならヴィランになり悪逆無道を為す必要があるがその予定はない、だから勝てる」

「仮にヴィランになって戦ったとすれば、スペックでは勝っても戦いの末にその信念で限界を超えて逆転される可能性があるそうです」

「胸に抱いた一本の槍は、百の武器に勝るらしいですからね」

「なるほど」

強さを判定する経験が緑谷来久にはある。

だが信念と心が強さを超えることがあると緑谷来久は知っているのだ。

「さて最後に、とある疑念の出来た青山優雅君についてだけ」

根津校長による最後の議題とその対応によって会議は終了した。今回の襲撃事件、規模に反して被害はでなかったとはいえそれは頑張った生徒達がいたからだ。ヒーローとして教師として自らを恥じた者達は、これから予定されている行事に全力を尽くすことになる。

雄英高校に通う者達が新たなヒーローとして飛び立てるように、彼らの未来がより良くなるように。

第17話

雄英高校の臨時休校があけて翌日。

ややどんよりした雰囲気のカラスメート達の様子に首を傾げたり、ヴィラン襲撃事件があったにも関わらずに雄英高校体育祭を開催すると相澤先生が告げたり、昼休みに麗日さんがうららかではない表情になったり、麗日さんのヒーロー志望の理由に飯田君がブラーボーしたり、兄さんがオールマイトと二人きりでお昼ご飯を食べに何故か仮眠室に向かったりしたりしてうるうちに時間は過ぎて放課後になりました。

教室から出ようとする何故か廊下がいつもより人通りが多く、何人かはチラチラとこちらを伺っているようです。

「やはり学食で食べ過ぎましたかね？」

おいしいからと食べまくると周囲から注目されてしまいますよね。

「そつちじゃねえよ、大方ヴィラン襲撃事件の方だろ」

ボスが私の疑問に答えてくれました。

それで様子を見に来た生徒達で人通りが多いのですね、まあ一応ニュースにはなりましたし、雄英高校という知名度と逮捕されたヴィランの数で話題になりましたから。流れている情報としては施設に損壊は無く怪我人もいなかったため表向きは教師陣がなんとかしたことになってます。そのためA組にしても運が無かったと同情されている感じですね、なにせ希少なワープ個性を用いての襲撃なんてまず防げませんから。ちなみにB組の方はボスと一緒に対策を練っていた物間君が教師陣から話を聞かれたため詳しい内容まで知れ渡っています。

「教師陣がなんとかした（扱い）とはいえヴィラン襲撃を経験したんだ、気になるんだろ」

「敵情視察というわけですね」

競争形式なら顔を知るだけで有益ですし、個性の発動条件かもしれない。

「ヒーロー科は職場体験にインターン、他科はヒーロー科への転属のチャンスだからな。入試の形式だと相性悪い個性もあつたからな」

「葉隠さんも個性が戦闘向けではないにも関わらず強いですからね」

彼女、自身が透明なだけの個性だからかきちんと肉体を鍛えていて、格闘技の授業で峰田君、上鳴君、常闇君、瀬呂君に勝つてました。個性無しの肉弾戦ならクラスでも上位の実力でしようね。

「あと運もあるしな」

確かに班分け次第で結果は左右されますか。

「なんにしても体育祭優勝は絶対目標だ、あと二週間遊んでる時間はねえぞ」

「はい、全霊を尽くします」

「あーヴィランてそんな感じなんだね」

穏やかな夕日の照らす放課後、訓練のために借りた演習場にて死屍累々とばかりに倒れ伏すB組男子達を眺めながら現在小休止中。

入学してから頻繁に利用しているのですが、ためになるからとB組のメンバーも参加しています。

訓練とはいってもあくまで自己練習、私とボスが彼らを教えたり導いたりすることはなく、せいぜい組手の相手を務めたりする程度です。

今の話相手はB組の姉御こと拳藤一佳さん、訓練の合間に反省点や気付いたことの議論などをしていますが、今日は先日のヴィランについてでした。リーダー格の手男とモヤ男に切り札であった脳みそむき出しについては危険性が高いため話さないよう気をつけて、遭遇したヴィランの話をしました。

「そういえば今日は物間はどうしたんだ？最近是指銃と刺の体得に熱中してたよな」

図書室から借りてきた『最新建築一覧』を閉じてボスが気になっていたことを拳藤さんに聞きました。頭のキレる物間君とはよく話されますからね。

B組の皆さん、指銃をやるうとして突き指量産してリカバリーガールに説教されてましたね（鉄哲除く）

物間君は相手に触れなきやいけない個性だから機動力を上げられる刺にも興味津々でした。

「物間はセメントス先生の手伝いだよ」

「セメントス先生？授業の用意ですか？」

現代文の受け持ちだったような。

「いや施設の改装するみたい。ワープ個性で侵入されたからその出現ポイントを埋めたり、盛り上げたり、オブジェ置いたりするみたい」なるほど転移先が塞がれたらもう飛ばません。個性が発動しないか最悪壁の中に埋め込まれてしまいます。色々パターンはあるようですが、ワープ系個性は飛んだ先の把握が必須なんですよね。

「物間の個性の連続使用もその都度触れば良いから近場に入れば人手が増えて助かるんだって」

施設の破損粉砕がデフォな雄英高校だと修復担当のセメントス先生は過労死候補とか言われているくらいですから、大雑把でもやってもらえると助かるのでしょね。物間君にしても個性の鍛錬になりませうし。

「そうか」

「爆豪にしてもなんで建築の本を読んでのさ」

確か昼休みの麗日さんの話を聞いたら借りてきましたよね、将来の事務所でも考えるのでしょね。

「ヒーローは防衛するにしても、救助するにしても、侵入するにしても建物の構造やらを知っているに越したことはないなと気づけてな。セメントス先生にも学びに行くつもりだが基礎知識くらいは身に付けねえと」

瓦礫にしても支点力点が適当だと危ないですね、なるほど麗日さんが建築会社と聞いたからですか。

彼女の実家で仕事がないなら、そういった建築関係の講義とかをヒーロー達やヒーロー育成高校に売り込むのも有りですね。ヒーローは市街地戦闘が多いため壊した建物の弁償や補償もあるので、建

築のプロから聞いておくべきことは多そうです。

「本当に熱心だね、そんなトコも差を感じるよ」

「時間は有限なんだよ、目標は遙か先で影すら見えねえしな」

やれること全てを打ち込んでも届かないかもしれない頂き、それでも近づくにはやれることをやるしかないのでしょうか。そうですね。

「うし、呼吸も落ち着いた。もう一戦だ来久」

立ち上がり戦意を滾らすボス。

残りの使用時間的に後一回はやれそうですね。

「ところでなんで同じクラスの子は誘わないの？仲悪いわけじゃないよね？」

「お前らだって誘ってねえだろ。」

「こういうのは自分から動くべきなんだよ」

皆でやることに意義はあります。けど痛みの伴う強さに関しては本人の意欲がないと辛いだけですからね。

まあ、入口でチラチラと伺っている人達がいるので明日から人員が増えそうです。

「いくぞ来久」

「オーケー、ボス」

「二せめて一矢報いたらあつ!!」

ボスの爆炎と復活したB組メンバーの様々な個性をいなしながら、今日こそは帰りマツクに寄ろうと心に決めました（空腹）

雄英高校体育祭までの期間はこのように過ぎて行きました。

ナンバー1ヒーローを目指すボス。

オールマイトに託された兄。

未だにクラスに溶け込めない轟君。

ヒーロー科を目指す生徒達。

そして疑惑ある青山君。

そんな数多の思いを散りばめながら。

第18話

なんやかんや参加者も増えて忙しくなり放課後マツクもできず(泣)に時間は過ぎて迎えた体育祭当日。

ヒーロー科のみ学校から用意されているヒーローコスチュームは他科と公平を期すために着用不可で残念がったり、全国テレビ中継の前に緊張したりと皆控室にて体育祭開始までの時間を思い思いに過ごしています。

しかしなんで一部のクラスメートがジト目で私を見ているのでしょうか？彼らに何かしましたっけ？

「爆豪と緑谷弟の強さが気になって」

「放課後に施設借りて組手しているの知って」

「B組も参加しているから混ぜてもらったけど」

「二組手で一方的にボコられ続けて二週間終わったよね」

見たたのは自主練に参加された方々でした。

「え、何そんなことしてたの？」

A組全員ではなく自分から申し出た人だけなんですよね、上鳴君なんかは不参加どころか知らなかったみたいですね。兄さんもオールマイトとの訓練を優先してましたし。

「二週間の放課後だけで何か出来るわけねえだろ。六式に覇気もそう簡単には身につかねえし、実戦経験とB組との個性の議論出来ただけ上等だ」

集中していたボスがそこでフォローしてくれます。まあ六式という形は個性で再現なりアレンジするだけでも有用ですから無駄ではないと思います、何より。

「負けるという経験は貴重ですよ。負けても死なずに済むなんて実戦ではありえませんか」

だから前世の私はエドワード・ニューゲートにしか負けたこと無いんですよね。

「いや、だからや」

「なんでこう」

「無駄に言葉が闇深いんだコイツ」

「実感あり過ぎてドン引きだっつの」

「ケロ、爽やかな笑顔で言うことではないわ」

過去は過去ですからねえ。

「えー、なんで誘ってくれなかったんだよ」

「オイラも他クラスの女の子と知り合いたかった」

「んな、楽しいもんじゃ無かったっつの」

「襲撃事件の時より心へし折れかけたよ」

「圧倒的なんだよな、実力差」

「傷どころか汚れ一つ付けられなかったわ」

今の私は見聞色の覇気を優先して鍛えてます、だから相手では常時使用しているため実際よりも差があるように見えてしまうのでしようね。

訓練でやっていることは基本私との相手です。人間はやったことしかできない、だからこそボスは自分の全力が通じない状況を経験しようとしています。あらゆる状況、あらゆる体勢、あらゆる場所、それらを経験することで実戦で出来ることを増やそうとしているのです。実際問題として、自慢の必殺技で有名なヒーローがソレが通じない状況で何もできなくなるという事例はよくあることみたいですし。だからボスは実戦でそうならないためにあらゆる敗北を日々経験しているのです。

そろそろ武装色の覇気も使わないとボスの相手はしんどいのですが。

「緑谷一号」

「一号っ?!」

誰ですか天然な轟君にそんな面白呼び方教えたの？名前では呼ぶのは照れくさいからとかなんとかで、緑谷兄や緑谷弟で呼ばれることは多いですが、一号呼びは初めてですね。

「客観的に見ても実力は俺の方が上だと思う」

「へ!?! うっうん」

ワンフォーオール発動して押し切れればなんとかいけそうですが、まだ制御に難ありですから長期戦だと勝ち目無いですね。

「おまえオールマイトに目えかけられてるよな、別にそこ詮索するつもりはねえが、おまえには勝つぞ」

轟君もオールマイトガチファンなんでしようか？ヒーローを志す者で憧れない人はそうはいませんが。というか学校内ですら関係知られてるのですか、ワンフォーオールの存在を知る者が調べたら一発で個性の継承がバレますね、もう少し隠蔽に力を入れて欲しいです。

「おお推薦組が宣戦布告」

「なぜ来久さんの方ではないのでしょうか？」

「むしろ爆豪でしょ普通は」

「実力ではなくオールマイトとの間柄が轟君には重要なんですかね？」

「急にケンカ腰でどうした!?直前にやめろって」

「仲良しごっこじゃねえんだ、何だって良いだろ」

しかし兄さん、貴方はオールマイトに認められた者、言われっぱなしで良いのですか？

「そりゃ君の方が上だよ、実力なんて上の人はいくらでもいる、来久には勝てる気しないし。」

でも、皆本気でトップ狙ってるんだ。僕だって遅れを取るわけにはいかないんだ。

僕も本気で獲りに行く！」

「おお」

そうですね、それで良い。

気概で負けては勝てはしませんから。

「命令だ、来久」

ボス？

「お前も全力でやれ、俺相手でもな」

「イエス、マイヒーロー」

あまり乗り気はしませんが、貴方が乗り越える壁が高くあることを

望むならば応えましょう。

それが私の在り方ですから。

薄暗い廊下を越え、皆胸を張り一步踏み出す。

老若男女誰もが注目するこの舞台で誰が頂きに立つのでしょうか。

『雄英体育祭!!』ヒーローの卵達が我こそはとシノギを削る年に一度の大バトル!!

出荷したての一年坊主共をわざわざ見に来てくれた観客諸君もちろん損はさせねえぜ、コイツラも雄英自慢の卵共!!ヒーロー科!!一年A組B組だあつ!!』

司会担当のプレゼント・マイク先生により、ヒーロー科両クラスの期待の高さを叫ばれながらの入場(事件にはあえて触れてませんね)です。

他科も紹介されますが、転入を狙っているそうですから油断できませんね。やる気の無い人もちらほら見受けられますが、彼らも日本屈指のトップエリートです。

「選手宣誓!!」

ヒーローの格好に今更ツツコミませんが恥ずかしくないのでしょいか、あの格好。

前世の半裸や上着を羽織っただけの海賊達より、コスチュームを着たヒーローの方がなんで卑猥に感じるのでしょうか。

「18禁なのに高校にいてもいいものか」

天下の往来の方がむしろダメでは？

「いい」

「静かにしなさい!!選手代表!!」

「1-A 爆豪勝己!!」

「爆豪強いしな」

「来久だと絶対やらかすから良かった」

「どういう意味ですか緑谷一号もとい兄さん。」

「宣誓、我ら雄英高校一年一同先達であるヒーロー達に恥じぬよう正々堂々、力の限り戦い抜くことを誓います」

良い宣誓だと思いますよけど、ボスを知る誰もが物足りなそうです

ね。らしくないように感じたのかも知れませんが、けど大丈夫です。

「そしてそれを踏まえて、」
だって、

「この場にいる全ての強敵達を超えて、俺が天辺に立つ」

彼は爆豪勝己だから。

「俺はナンバーヒーローに成る男だあっ!!」

私は彼の後ろをついて行く。

第19話

ボスの宣誓に誰もが震えていた。

雄英体育祭はヒーロー科が主役（文化祭は他科が主役だが）、ヒーロー科のみの戦闘を含めた実技試験を突破したこと、数ヶ月とはいえプロヒーローから個性を使用した戦闘訓練を受けた事実は明確な差となつて表れてしまう。雄英高校の訓練施設自体は使用可能だ、自練で己を高めることは奨励されている。

だがそれでも差はある、ヒーロー科への転科が年間で一名いるかどうかである事実からして明白だ。

自身が成長している間、ヒーロー科生もまた成長するのだから。ゆえに体育祭自体にやる気の無い生徒も多い、ヒーロー科の引き立て役だと腐る者もいる。

けれど認めたのだ、ヒーロー科のトップが、自分らもまた彼にとつての強敵なのだ。

やってやろう、そんな風に彼らは今思っているのでしょうね。

そしてナンバーヒーローになる、というボスの宣言。

ボスはまた自らを追い込んだのだろう。既に失笑する者としている大言壮語、だがそれでも彼はする。

夢は、目標は、野望は、口に出し叫ぶことから始まるのだから。

ヒーローになることがゴールだと思っている者も、憧れの人を目指す者も、ヒーローになつてから為したいことのある者も、オールマイトのように成りたい兄も、ボスの宣言に魂が揺さぶられた。

ついでに「青いわあ」とミッドナイトが涎垂らして悶ていた、全国中継ですよコレ。

気を取り直して第一種目、涎を拭ったミッドナイトがカメラ映えする目線で発表したものは障害物競走。仕掛けの施されたスタジアム外周を一年全生徒で個性使用を含めたなんでもありレースだ。

全員が移動する中、B組のメンバーとも合流。

放課後自主練で知り合ったメンバーが声をかけるのだが、

「物間君はどうしたんですか？ いませんけど」

一名欠員。

B組の先導役にしてリーダー格の物間寧人がそこには居ません。病欠か家の事情でしょうか。

「あー、あいつはちよつとな」

気まずそうにB組の実力者である推薦組の骨拔柔造君が職員の待機してるテントを指差します。そこに彼は居ました、悟りきった表情で。

「何しでかしたんですか彼」

「先生方の手伝いの結果、個性でリカバリーガールの個性までコピーできることが判明してな。ヴィランに狙われることを考慮して自衛できる力が付くまでテレビとかに出すのは危険なんだと」

なるほど保護と言うわけですか。

ヴィラン襲撃の嫌な影響ですね。

希少なリカバリーガールの個性に相澤先生の抹消も使えるなら物間君の価値は計り知れません。

「ということは、今後保健室で物間君のチュー顔が見れるのですかね」
アレってリカバリーガールだから平気ですけど、別の誰かだと反応に困ります。

「?!?!」

「おい来久」

「はい?」

「種目開始前にB組を壊滅させるな」

ボスの言葉に寸前まで話していた骨拔君を見たら、B組メンバー+自主練参加メンバーが笑いながら震えて蹲っていました。

物間君のチュー顔を想像したらツボに入ったようです。いやまあ日頃からイケメンなのに顔芸な人ですからね物間君。

「B組のブレイン不在で大丈夫ですかね」

「団体戦の時に居たら脅威なんだがアイツ」

難敵不在に残念そうなボス、指揮官として間違いない有能ですからね。

「しかし保護のためとはいえ、不参加とは可哀想な話ですね」

ヒーローらしからぬ、と自嘲する個性であるからこそ人の目にとまる活躍をしてほしいものですが。

「ある程度雄英高校でなんとかはしてくるだろうがな、あるいは雄英高校で物間を囲い込みたいのかもしれないねえぞ」

リカバリーガールが二人いる状態でも雄英高校としては大助かりでしょうし、人手が増えるにこしたことはないですからね。根津校長のような知能の高い指揮官としては是非手元に置いておきたいでしょう。

良かったですね、雄英高校という就職先の当てができましたね。まあ個性についての造詣が深い上、教えることが上手でしたから教師向きですし。

さらに物間君の個性は万全のサポートがあればより活きる。そして雄英高校より優れた設備と人材のある組織なんてそうはない。オールマイトも所属している今、日本どこるか世界で最強なヒーロー事務所は間違いなく雄英高校ですからね。

「本人が納得しているなら仕方ねえ、来年に期待するでしょう」

彼の向上心なら一年あればどれほど高みにいけるか楽しみですね。

「ん、んんんん」

「ユイガ、ユイガ笑イスギテ呼吸ガツ!!」

「(チーン)」

「吹出ええー!!」

「しかしB組の皆さんはどうしましょうか」

「まだ時間あるし大丈夫だろ」

笑いすぎて動けなくなつた彼らも、第一種目開始までなんとか持ち直したようです。

いよいよ開始です。

全力でやる、それがボスの命令なので頑張るとしましょうか。

第20話

『物間君チュー顔インパクト』にてB組と一部生徒達が爆笑悶絶壊滅しかけるというトラブルがあったものの無事一年雄英体育祭第一種目である障害物競争は開始しました。

主催者側の意図を感じる狭いゲートに押し合いへし合いする生徒達が先へ先へと進むうちとする中、一步抜き出て駆ける轟君。彼は個性にて地面を氷結し足止めと加速を同時に行いました。

しかし僅かな期間であれど付き合いは付き合い、彼の氷結は体が触れた箇所あるいは地面から起こるものであると理解しているクラスメート達はジャンプすることでそれを回避しました。知っていること、それは明確な強みなのです。

だからこそイケメン退場がためウラのウラをかけた峰田君が必殺技にて轟君をモギモギ団子にしようと構えるが仮想敵による無慈悲な一撃にて失敗。

一步前に出たからこそ彼らは第一関門に突入してしまっただけです。そう入試にて猛威を奮い受験生を追いやり私とボスと兄さんに破壊されたOP敵の群れ、ロボ・インフェルノに。

初見の生徒達もチラホラいる巨大ロボですが、流石は推薦組にしてビル一つを容易く氷結させる轟君、巻き上げた冷氣にてあっさりと撃退しさらに進路妨害まで行いました。

巨大ロボによる威圧と質量による妨害、さらに小回りの効く小型ロボによる襲撃で多くの生徒達が足止めをされることになりませんでした。

「何が巨大ロボだ」

「何が小型ロボだ」

「デカイだあ?」

「硬いだあ?」

「重いだあ?」

「こちとら毎日毎日、速くて硬くて空飛んで一撃重い遠距離攻撃か

ますアンチクシヨウにボコられてんだこらあああっ!!」

闘志全開な一部生徒達が真つ向からロボ相手に打つかりだしましたから。

「ビヤツハーツ!! 攻撃が当たるぜえっ!!」

「ビヤツハーツ!! 装甲が柔いぜえっ!!」

「デカイ塊振り回すことは攻撃じゃねえっ!!」

「避け放題だあっ!!」

「空も飛ばねえ重量あるコイツラなんてただの的だあっ!!」

組手でボコり過ぎましたかね？

重機やら戦車くらいの脅威であるロボに臆さないのは良いですが、暴れぶりが前世の海賊みたいになってますよヒーロー候補生達。

あえて倒す選択をせずに飛び跳ねて越える生徒達もチラホラいますね、兄さんも躲しながら壊れた装甲で撃退してますし、やはり出来るといふ経験は行動の迷いを打ち消しますね。

しかし、そろそろ真面目にやらないと怒られますか、既に轟君を越えて一番になった私をボスが睨んでましたし。いや荊は短距離移動で長距離走向けではないのですが。

「嵐脚」

とりあえず高い障害物を越えるのは手間です、平らにして進むとしましょう。

巨大ロボを水平に切り倒し、あとは月歩で走り抜けます。見ればこの種目は空を翔けることが攻略法みたいですね。

ザ・フォールの断崖絶壁綱渡りも、怒りのアフガンによる地雷原も、空中機動にて解決です。

それは浅はかな考えでした。

そう私は考えもしなかったのです。所持しているだけで持て囃される空中機動の可能な個性、それと同じ様なことのできる月歩を体得している私を、私の詳細な情報の知る教師達が放置しておく筈がないことを。

雄英高校は生徒に苦難を与え続ける場所であることと私が戦闘能力以外はポンコツであることを、私は自覚していなかったのです。

「それで二十位か、このポンコツ」

「あの身体能力でなんで一位じゃないのこの弟」

呆れ果てた二人の言葉。

熾烈なトップ争いを制したボスとワンフォーオールを駆使し惜しくも二位になった兄さん(二位だけに)、あの運動量で息一つ切らさない二人は腕を組みながらグラウンドに膝をつく私を見ます。

あの後ロボ・インフェルノを越えて月歩にて先頭集団を追い抜き一位にまで躍り出た私。ですがその直後相澤先生の冷たい声とともに大量の武装ドローン軍団が襲いかかってきたのです。猛毒蜂の群れのような脅威を前に私は二丁指銃乱れ撥にて迎撃。飛ぶ指銃撥を両手で乱射する技をしながら月歩を使い、空を足場にしたガンアクションを行いました。

そして迎撃と回避行動に夢中になってしまい気付けばこの順位でした。いや親切な障子君が、ドローンは空中機動を繰り返す者に襲いかかると相澤先生が言ったと伝えてくれなければ、私は第一種目でリタイアだったかも知れません。

「障子には感謝だな」

「人の話はよく聞こうよ」

「仰るとおりです」

普通に走ったら襲われませんでしたし。

「ウチの事務所には状況を俯瞰して見れる指揮官が必須だな」

「その上でテレパシー系個性だとなお良いね」

人によって距離や出力に差はあるとは言え希少というほどの個性では無いですからね。

テレパシー系個性でヒーローを目指す人が希少ではありませんが。

機械の下位互換な個性は多いですが、スマホや通信機で良いじゃないと言われる個性ですからね。ちなみに豆知識ですが気持ちやダイレクトに伝えることができるためか結婚しやすい個性の一つに数えられていますね。

「まあいい、勝ち残りはした。正直第一種目でリタイアするかもと思ってたしな」

「ウチの弟ながらこの信頼の無さ」

ボスが信頼してるのって私の戦闘能力だけなんで。

「次の種目、無様な姿を晒すなよ」

「フラグかな？」

さつきから厳しいですね兄さん。

そして第一種目が終わり予選通過者42名。物間君を除いたヒーロー科全員に加えて普通科とサポート科が1名ずつ突破したようです。

順位の発表もされましたが、疲労具合や汚れ方に差があるため何やら戦略やら思惑がありそうですね。次に備えて体力温存も突破できる確信があるなら良いやり方ですからね。

いよいよ本戦というミッドナイト先生の言葉とおり、これからがアピールする本番ですね。

第二種目は騎馬戦。

相澤先生とのやり取りから情報から考察する癖のついてる皆がミッドナイト先生の説明より先に予想し語りそれに怒る一幕はあったものの、上位のポイントを狙う下剋上サバイバルは開始しました。

が、

気がついたら終わってました。

4位緑谷二号チーム、心操人使、青山優雅、尾白猿夫、最終種目進出です。

無様な姿を晒してしまいましたね。

第21話

さて無様な姿を晒したショック、フラグ回収を即行った衝撃に一瞬放心してしまいました。どれだけ意識を飛ばせば気が済むのだと思ひ直しとりあえずどうしてこうなったか心操君に尋ねました。洗脳した奴になんで聞けんだコイツという顔をされましたが、同じチームの二人も洗脳されていた可能性が高いため本人に聞くのが一番でしょう。

そんなあつけらかなとした私の態度に奇妙なモノを見るようでいて、更にかすかに嬉しそうに笑いながら答えてくれました。

障害物競走から動ける生徒と判断し、騎手役として開始と同時に洗脳。命令内容は、目立たないように決勝進出のために最善を尽くせ。続いて同じく動きの良かった尾白君と余ってた青山君を騎馬役として洗脳、この時点で第二種目開始。

心操君としては一位の1000万ポイント争いに参加するつもりは端から無く(元より決勝狙いのため)、そちらに集中する生徒達を後半ぎりぎりに洗脳しハチマキをかすめとる戦略だったようです。

なるほど理にかなってます。一人勝ち上がった普通科生徒で、知り合いのいない協力しがたい状況から決勝進出を目指すなら最善手でしょう。

ですが心操君にとって予想外のこともありましたが、ある程度の動きを期待した私が一切の行動をしなかったことです。

そのため私を起こさせて洗脳を掛け直そうとして、尾白君達が目覚めてしまったのです。

最初は洗脳された事実には憤慨した二人ですが、心操君の切羽詰まった様子とその個性故の悩みを、自身も強個性とは言い難くヒーローには成れない個性だと言われたことのある尾白君は理解を示し協力することに決めたそうです。尾白君良い人過ぎですね、青山君は珍しく何やら複雑そうな表情していたみたいですが。

しかし協力体勢をとってもA組B組は強敵だらけ、逃げに徹しようと

ハチマキは取られたそうです。

ですが、プレゼント・マイク先生のカウンントに三人が諦め空気になった所で私が一瞬姿を消したかのように動き現れた時にはその手には中央にて1000万ポイント争いに集中していたボスチーム、兄さんチーム、轟君チーム以外の全てのハチマキが握られていたそうです（今ココ）

なるほどバスケで言うブザービーター狙いだっただんですね私は。月歩に刺と生命帰還に見聞色の覇気の併用ならこのグラウンド内程度の範囲ならハチマキはいつでも回収できましたから。

そんな訳で合間に尾白君の補足も込みの説明で状況の把握も出来ました。

洗脳という強力な個性、それを命の危険無く体感できた良い経験をつめました。

「お前も許すんだな」

心操君は笑っていました、勝ち誇るような嫌味な笑みではなく、ほっとしたような嬉しそうな顔で。

「まあこんな複雑な戦い、指示なく勝ち抜ける気しませんでしたから」
貴方のおかげで決勝に出れますと私は告げます。力尽くで押し通ることは多分出来ましたが、こんな些か変わった協力の仕方もありでしょう。どうか洗脳で適切な指示を出された方が多分良いを動きてきてましたし。

「そっか、なんかありがとな」

そう言つて昼休憩に向かうため別れた心操君はどこかスッキリした表情でした。

（いやまあ命令しだいで皆殺しやら虐殺してた可能性あるから、こんな形で使われて助かったんですよね）

前世にて世界政府の洗脳教育だけで世界最高峰の実力者に成れてしまった私は洗脳耐性が無いのだろう。

あちらではそんな能力者とは遭遇しなかった（あるいは上が避けて命令してた）ですし。

「今後の課題ですね。まあ相手の行動前に鎮圧するほうが最善で簡単

ですが」

「色々思うところあったけど、心操も必死なだけで悪い奴じゃないし決勝に行けたから良かったよ」

「そうだね☆」

それだけではないですよ。君等の心操君の言葉に応えたことが彼の心を救ったんでしょう、ヒーローしてましたね二人共。

そんな良い感じに別れた所で、さあボスに頭を下げますか。無様を晒してしまいましたしね。

なおこの後、ボスと一緒に轟君と兄さんの会話、シリアスでヘヴィな彼の事情を聞いてしまうことになりました。

どうでしょう？

第22話

「個性婚に虐待同然のスパルタ教育ね、なるほど轟焦凍君が推薦組の中でも抜きん出た実力者なのもそんな背景あれば納得だね」

選出された個性に鍛える環境、優れた個体を作る上では必須な手順ですよ。

似たような環境を知るがゆえに私も納得してしまいましたが、個性が絡むと微妙なんですよね。

「かのナンバー2ヒーローエンデヴァーがそんな事をしているなんてヒーローライセンスも危うくなるスキャンダルだけど個性婚自体を規制する法律はないし、むしろ奨励されてるんだよね。イメージ悪いだけで」

なんですよね。

ぶっちゃけ似た個性の人は趣味嗜好も似てるからカップルになりやすいってデータもありますし。

強い個性を意図的に生み出すことが嫌悪される要因なんですかね？

エンデヴァーの行為がアウトならお金持ち老人の後妻に納まる若い女性とかはどうなんだって話ですし。

「スパルタ教育にしてもね、エンデヴァーの息子で後継者候補なら強くないと危ないでしょ。有名ヒーローの家族狙うとか外国だと当たり前だし」

日本だとそこまでのヴィランがあまりいないみたいですね。家族を見せしめなんて個人じゃ厳しいですし、組織的なヴィラン集団が存在できない治安なのが今の日本ですから。

「だから、可哀想だとか、複雑な家庭だとか、児童相談所に行けよとか、しか思えないよ普通に」

なんですよねえ。

「個性を半端に使ってることには勝手にすればって思うよ正直、っていうか手加減は君で慣れてるから」

だって六式は暗殺術で覇気は消耗しますし。

「むしろエンデヴァーに反発するならヴィランになるのが普通でしょ」

エリート教育にキレて家を飛び出すアウトローみたいですね。

「それしないのは轟君自身が気づかない願望があるんじゃない？家族が和解する未来とか」

あるいは成りたい自分があることを無意識に気付いているから、とかですかね。

だから彼はヴィランにならない。

「何はともあれヨソのご家庭の話だよ。」

ヒーローも警察も民事不介入が原則だよ」

出来ることに制限あるのがこの社会のヒーローですからね、だからヴィジランテになるヒーローもいるわけですから。

「何よりさ」

？

「君は僕に答えを求める時点で論外なんだよ」

それは、

「爆豪君は両親が恋愛結婚した結果生まれた強個性だから知らないという形で戦うと決めた。君のお兄さんは轟君の思いに負けない思いがあると伝えた。けど君は？」

轟君の境遇に対して思うこと。

轟君にどうしてあげたいと思ったのか。

「勝つ以外できないのだから勝てば？」

彼を救うことが出来るのは君でも僕でもお兄さんでもないよ」

兄さんでも救えない。

彼を救えるのはきつと、

「とうかさ」

そう言葉を区切ると物間寧人君は額に青筋を浮かべながら言います。

「なんで僕に相談してるのかなあっ!？」

レクリエーション種目で怪我人続出したからリカバリーガールの

手伝いでヘトヘトなんだけどおっ!!

知りたくもないスキャンダルを知って胃が痛くなるんだけどおっ!!

!!
ついでにチュー顔でクラスの皆が爆笑したんだけどおっ!! (笑ったヤツはリカバリーガールに後でシバかれた)

いやだつて頭良いですし。

体育祭無関係ですし。

ウチのクラスの女子がチアガールですから。

「最後関係ないよねっ!!」

君は爆豪君に従っておけば良いんだよっ!!」

まー正直愚痴を言いたかっただけみたいな感じですからね。こんな事情とか境遇とかでのやる気を感じるのがしんどいのですよ。

レクリエーション種目は出禁ですし。

「アメリカとかなら一定戦闘能力あればヒーローに成れるから君ならそっち向きだよ」

だから一部地域だとヒーローは賞金稼ぎって呼ばれますしね。

「まあいいさ、来年はB組がトップを飾る。」

覚悟するんだね」

今年は大滅でしたからね。

そうして相談にのってくれた物間君は去ってゆき、レクリエーション時間は過ぎました。

轟君に何かをしてあげたい。

この思いに嘘はありません。

けどそれが何か分からず、何も言葉がでないなら、何もすべきではないのでしよう。

なんとももどかしい気分です。

さて、最終種目。

例年一対一の競うトーナメント形式。

今年はどうなるのでしようね。

第23話

眼福なクラスメイト達のチアガール姿を堪能し、屋台をほぼ全て制覇し、いよいよ最終種目です。

最終種目はガチンコ勝負。

ドレスローザのコロシアムのようにリングでの一対一の戦いです。

場外、行動不能、敗北宣言、をさせれば勝利。

怪我に関してはリカバリーガールと物間君がいるから大丈夫ですね。

初戦の組み合わせは、オールマイトの後継者である我が双子の兄緑谷出久、そしてヒーロー科であるB組を下した普通科の星である心操人使。

肉体的には圧倒的に兄さんが上、ですが心操君の個性である洗脳は事前情報無ければ対処不可能な初見殺しの強個性。場外という勝利条件があるため心操君が有利ですね。

兄さんは前種目の騎馬戦にてボストのハチマキ争奪に集中していたため心操君の個性を知らない事実も心操君に有利な点です。

とはいえ戦うには充分でも狭い舞台、兄さんが短期決戦狙いで攻撃してきたら心操君のフィジカルでは勝ち目がありません。

洗脳にかかるかどうか、会話に乗るかどうか、それが勝敗を決めます。

「お前の弟って何なの？」

「そんなの誰よりも僕が思っているよっ!!」

オイ兄。

「決まりだな」

「まあ、仕方ないね☆」

フォローのしようが無いぞ兄。

オールマイトも通路口から焦っていますよ。

騎馬戦で組んで親しくなった尾白君も青山君も心操君の勝利を確信しましたね。

多人数での乱戦ではなくタイマンバトルでは外部からの刺激は望めない。

距離をおいている心操君にできたとしても苦し紛れは届かない。

心操君の勝利です。

「ん？」

気配が増えた？いや意識が増えたような？まるで悪魔の実の能力者のような人の中に何かいる気配。襲撃事件もあって緩くではあるが発動させてる見聞色の覇気に兄さんの中から反応がした。

流石に距離がありますか。触れればまた別ですが恐らく原因はワンプォーオール、それが兄さんの内部から刺激を与え正気に戻したのか。

心操君、貴方は勝っていました。

これは勝てる戦いでした。

けど勝てる戦いでも死ぬのが実戦。

予想外なんてどこにでも転がっているのです。

貴方はそれを経験できて、自身の課題にも気づけている。ならばあとは上がるだけです。貴方を応援する声はこんなにもあるのだから。

惜しかったと呟く尾白君、残念だね☆と煌めく青山君、祝福する普通科の皆さんに、評価するヒーロー達、なんか勝った兄さんより認められてますね。

続いての轟君と瀬呂君のバトル。

拘束器具要らずの瀬呂君はヴィランの捕縛第一の現代のヒーローにもっとも適した者の一人。

テープを用いた捕縛術に空中機動など練度が高く多彩であり優秀。この舞台でも有利に立ち回れる一人とも言える。

ですが今回、相手が悪過ぎで不運過ぎた。

精神的に荒れている様子の容赦無き氷結。

審判であるミッドナイト先生も巻き込んだソレは観客の眼前まで届いていた。

危ういですね。

観客として訪れているエンデヴァーとの会合、それがこうも彼を乱

している。

自覚もあるようですが、不味い傾向ですね。

っていうか次私の番でした。

急がないと。

対戦相手は上鳴君。

ボスにも全力でやれと言われてますし、これ以上の醜態は晒せません。

「なあ緑谷二号」

その呼び方定着してませんか？

向き合い上鳴君には余裕の笑み。

普段のだらしない三枚目顔や面白いウェイ顔とは違う自信のある勝者の顔。

「お前が強いのは知っている、けどな一号からお前の力があくまで体術だと聞いた。近寄らないと戦えないんだろ？」

兄さんも一号で定着してますね。

「ならこの場所で俺の勝ち揺るがねえ。

この勝負、一瞬で終わるぜ」

前世でも電撃ってあまり無かったので耐性付きませんでしたしね。噂のゴロゴロの実の能力者とは遭遇せずに死にましたし。

『試合開始っ!!』

「飛ぶ指銃 撥（威力控えめ）」

「ウェイ？」

『瞬殺!!』

いや嵐脚も撥も使ってみましたよね私。

ガンマンの早撃ちの如く構えて撥を上鳴君の額に放てば、反応できずに命中しそのまま吹き飛び意識を失いました。

いや、えっと。

これはちよっと私に有利過ぎでしたね。

『なんつーかコレってズルくね?』

ホラ、プレゼントマイク先生もそう言ってます。

『見えない拳銃を所持してるようなもんだしな、だが第一種目でも使っていた。ならやりようあっただろ』

見えない拳銃とこの舞台上で戦うとか、これ一本で下手したら勝てますよ私。

『アレは禁止にした方が良くね?』

『意味ないだろ。アイツは似た技を足に腕に下手したら頭突きでもできるからな』

『でもよー』

『緑谷二号は強い、手足拘束しても多分大概のヤツには勝てるよ』

いくらなんでもそれは、いや生命帰還で髪を操ればいけますね割と。

『緑谷二号をどう超えるか、それが今回の体育祭のキモなんだよ』

扱いがひどくないですか？

選手じゃなくてギミックですよね。

それからの戦いですが、

機動戦に長けた飯田君は、その生真面目な性格をサポート科の発目さんに利用されてサポートアイテムアピールをし尽くして勝利。

遠距離攻撃が出来る青山君とフィジカル女子トップな芦戸さんの戦いは、直線なレーザーの軌道を見切られ接近され個性制御のベルトを酸にて壊されて青山君の敗北。

常闇君と八百万さんの戦いは、八百万さんが創造したモノで黒影を凌げず常闇君の勝利。八百万さんは創造に集中がいるため複雑な道具を創れなかったことが敗因ですね。

尾白君と切島君の戦いは、硬化の切島君に対して体捌きにてあしらい場外に強靱な尻尾で投げることにて尾白君の勝利。武術を修めた者には殴るだけでは当たることはない、格闘技の経験の差が出ましたね。

そしてボスと麗日さんの戦い。

ボスは個性を使わずに体術のみにて勝利。

爆破は自身の視界を遮る上、気絶程度の威力は根性で耐えきられる

可能性がある。

彼女の無重力は掌で触れることで発動する。ならば伸ばしてくる掌を腕を弾くことにて逸らし、側頭部を強打することで意識を奪う。

この舞台だと一部を除いて体術の実力が結果にでますね。個性を扱うのがヒーローではない、個性も用いて戦うのがヒーローなのですから。

まあ、あの受験勉強しながら体術極めるとか。学者とアスリートを同時にしろうとするくらいの無茶なんですけどね。私の場合は個性のおかげでなんとかなっただけですし。

兄さんがオールマイトの期待と心操君に麗日さんの結果と轟君の件で思い詰めている、ここからどうするかが兄さんのヒーローとしての在り方に関わるのですね。

私はどうしますか。

正直悩んだり思ったりすることがありましたが、最終種目が始まった時点でもうどうしようもない。

ボスが全力でやれと命じた、ならばやるだけだ。

そうすればどんな形であれ、何かはあるのだから。

第24話

「これが心に届くってヤツなんですかね」

第二回戦最初の組。

緑谷出久対轟焦凍。

兄さんは襲いかかる氷の壁を、ワンフオールを制御できる以上の出力を発動し手足を使い潰すようにすることで碎いている。

もつとスマートに戦えるだろうに。

月歩の完全体得はまだだが、空中を一步二歩踏み込むくらいのこと
は出来るようになってる筈です。

接近しワンフオールで強化した肉体で殴れば場外に飛ばすな
ど造作もないだろうに。

だがあえて正面からぶつかっている。轟君に無理をさせてその弱
点を浮き彫りにさせるために。個性を完全に使えばこうはならない
と示すために。

まあ兄さんのことだから意図的ではない行動なんでしょうが。

分析したり計算したりするくせに、行動は本能的な衝動ばかりだ。

だからこそあんな無茶をして。

だからこそその思いは、彼に届いた。

「全く、ボスには負けますがすっかりヒーローじゃないですか」

轟君が炎を使い、兄さんが全力で拳を振るう。

その衝撃は会場を揺るがし空に響いた。

見聞色の覇気にて兄さんの敗北は分かっ
てしまおうが、そんなことは
些事だ。

負けた事実
に涙を流しても、轟君に手を差し伸べたことに後悔はな
いだろうから。

だから緑谷出久はそれでいい。

さて、次は飯田君との戦いですか。

彼もまた実力者。それでもまあ負ける気はしませんかね。

飯田君との戦い。

それは速度の戦い。

いやそれ以上に速度以前、速度を出す前のモーションの戦い。個性である脚部のエンジンによる超加速。

ボスの空中機動に似た動きは接近戦にて敵なしであるが、エンジンによる超加速であるがゆえにその予兆は読みやすい。というかどんな原理なんですかね？アレで加速するならローラースケートみたいな車輪があればわかりますが、エンジンで脚力アップしているのでしょうか？なんかブロロと音もしますし煙も出ますし、廃棄ガスでしようが動力はオレンジジュースだとか言ってますんでした彼？

まあだからエンジンを観察することでどう動くか予測できて、彼より早い速度で背後を取れば勝ちです。

人差し指を拳銃のように飯田君の後頭部に押し当てる。それで勝敗が決したと彼なら理解できるでしょう。

「俺の負けです」

先程の激戦に比べたら静かな決着。

ヒーロー方には評価されないでしょうが別に構いませんしね。

「やはり強いな君は」

無念そうな飯田君の表情に思うところがあります。

自分はこの場にいるべきでないかと疎外感に胸が痛くなり、彼らのために負けてやるべきでないかと誘惑にかられます。

ですが、ボスに命じられたのです。

全力でやれと。

続いての芦戸さんと常闇君の戦い。

雄英高校一年女子トップに君臨した事実を芦戸さんはもつとアピールしても良い気がします。彼女の性格上気付いてなさそうです。

どうにも常闇君と戦う人は勘違いしがちですが、黒影は個性ですが武器に過ぎません。黒影も意思はあっても彼の損傷は常闇君には還らず、何をされても痛みがあるように見受けられません。

常闇君のパートナーであり2対1の戦いと認識して、まずは攻撃してくる黒影から対処することが間違いで、壊れない武器の破壊に集中

するのではなく、鳥のような容姿のため細身な本体を狙うべきなのです。

結果は芦戸さんの敗北。

彼女の体捌きと個性ならなら勝ち目はあつたのに惜しいですね。黒影を溶かしきれぬ強酸を生み出すやり方もあつたでしょう。凍傷までいかないように冷気を制御している轟君もそうですが、その殺傷力が高いゆえにスペックを出しきれない個性は多くありますね。

2回戦最終組。

尾白猿夫対爆豪勝己。

異形系個性でありながら当たりでありハズレとされる尾白君。

それは障子君のように異形系個性に属しながらも、いわゆる発動系個性のように人型（いや前世に比べたら大差ない気がしますが）である点が当たり。そして異形系個性でありながら尻尾が生えているだけだから個性としてはその能力が微妙というハズレ。

尻尾だけなら希少な例として個性発現以前の時代にもあつた事例らしいですね。

ゆえに彼は差別されるような境遇にはいないが、ヒーローを目指すには個性が微妙だという扱いだっただけです。上の世代には例えば腕が4本なだけで立派な個性扱いでしたが、吹出君のようなぶつ壊れ個性が同世代にいるためその評価は良くて地味ぐらいです。

そのため彼は自らを高めるため格闘技に傾倒し、修練の果てにその拳と尾は雄英高校のロボットを砕けるまでに至ったのです。

純粋な格闘技の技量なら、尾白君と庄田君は一年のツートップでしょうね（私は除く）

そんな彼の相手が我がボスである爆豪勝己。

彼は武術が不要なレベルな才能の塊、稽古と修練で体に動きを刻みこんでようやくできることを初見でできてしまうのだ。

そんな彼が私との模擬戦の日々で六式をベースとした独自のスタイルを身に着けているのだから最早手に負えないだろう。

麗日さんとの戦いでは無重力を警戒して触れられることを避けたが尾白君にはその必要はない。

爆破の火力に獣巖に匹敵する拳打、尾白君に強靱な尾に捕らわれることのみを警戒し、打ち倒すことを目標として戦う。

尻尾を用いた飛び跳ねるような武闘と爆破を用いた三次元の攻防は会場を沸かせ、さながらコロッセオのように熱狂に包まれた。

勝者はボス。

爆破により三半規管が揺らされて動きが鈍った尾白君が打ち負かされた形だ。

地味だとか影が薄いとか普通と言われた尾白君の意外な活躍に同級生達が驚いたのが印象的でした。

こうして2回戦は終了。

雄英高校ベスト4は決定された。

次の相手は轟君。

兄さんのように何かできるわけではありませんが、全力で戦いましょう。

第25話

『準決！サクサク行くぜ。』

『緑谷来久対轟焦凍!!』』

「お前は一号と違って何も言わねえのか？」

「君がそう思う時点で私の言葉は不要ですよ」

轟君は既にきっかけを得ている。

ならばこれ以上は無粋。

私はただ全力で戦うのみ。

『START!!』』

私の速度を知る彼が取るべき手段は一つ。

冷気にて動ける場所を奪うこと。

ゆえに私が打つ手は、

『おおーっと轟のつけから瀬呂にぶつけた特大氷壁っ!!これは決まったか?!』

「嵐脚」

『だが何とっ!!両断されてるっ?!』

『預言者モーセがごとく氷壁が真っ二つだあっ!!』

『モーセは海だろ』

「?!」

「冷気も熱気も所詮は空気。風の刃で斬るのは容易いですよ」

ワンフォーオールのパワーで散らせるなら私に対処できぬ訳がない。

「動揺してて良いのですか？道ができましたよ」

嵐脚にて二つに別けられた氷壁を塞ごうとしてももう遅い。

「刺、そして指銃」

直線に駆け抜けてすれ違い様に指銃で急所をついて気絶させればお終いです。

飯田君とは違い個性のゼロ距離発動が攻撃になる轟君に降伏を促すのは無駄ですからね。

ですが指がついた感触に違和感がありました、人体の感触ではなくこれは氷？

「一号の言ったとおりだな」

驚く私に追撃の冷気。

剃で距離をとり轟君を見る。

そこには私が突いた部位を氷の鎧で覆った姿がありました。

「お前は強い、だから相手が傷つかないように戦う。最低限の威力で急所を突いて気絶を狙うってな」

兄さんの入れ知恵で私の攻撃が読まれてましたか。轟君は同世代の中では強個性であるにも関わらずに身体能力が高い。だからやりすぎないように仕留めるにはこの戦法が最適だったんですが。

「確かに不快だな、手加減されるってのは」

自分のやったことを人にやられると不快ですよね、轟君と私はやる理由が違いますけど。

「全力でやるよう命令されてんだろ」

仕方ないですね。

相手を傷つけ過ぎないように全力で戦ってましたが、ここからは勝つために全力で戦いましょう。

とはいえ、

「ミッドナイト、リカバリーガールに連絡を」

「え？」

「多分即死はしませんが、（こっちで）人に撃つのは初めてですので念の為に」

嵐脚も加減しては氷の鎧を破壊しきれない、普通に打ったら真つ二つ。

指銃もさつき以上は人体貫通してしまうし、獣敵は轟の個性に捕らえられる可能性がある。

武装色の覇気は論外。

というか実戦では脳無にしか使用したことないし、ボスとの相手もお披露目程度。

となればあとは一つだけ。

全く加減して勝てる相手じゃないと殺しかねないとか、もしかして私って致命的にヒーローに向いてないのではないのでしょうか？

「ねえ轟君」

「何だ？」

氷の鎧のために炎は出せず、ですか。けどそれも手段としてはアリですね。

炎の個性を活かすための冷気の個性ですが、ヒーローとしては逆の場合の方があらゆる方面で適している。

「死なないで、下さいね」

返事は右の炎。

放射された熱気が私に向かう。

「剃刀」

その炎を私は斬り裂きながら宙を翔ける。

月歩、剃、嵐脚、の三種の組み合わせである移動技は、触れたら焼ける炎を物ともしない。

個性の炎はメラメラの実による体の延長である炎よりも自由に動かせない、ならば月歩による回避を警戒しての範囲攻撃も充分に対応できる。

「クッ」

兄さんの入れ知恵による氷の鎧ですか、とつさにはる技量は見事ですがこの技の前に鎧も肉体強度も関係ない。

全力の一つです、どうぞお受け取りを。

「六式奥義 六王銃」

「ガハッ」

衝撃は肉体内にて爆ぜる。

六式の人体操作の極みたる内部破壊。

生身一つで行える、外傷の残らぬ必殺技。

まさしく闇の正義を司る、世界政府直轄の暗殺者に相応しい技ですね。

こつちの世界では生物以外に使い道はなく、また人に撃つわけにはいかないから今まで使用したことがないのですが。

「中々効くでしょう?」

口から血を吹き出し白目を剥きながら倒れ伏す轟君を見ながら私はこの試合の終わりを悟りました。

思わぬ苦戦、でしたね。

やはり兄さんが入れ知恵すると厄介ですね。

途端に加減ができなくなる。

『轟意識不明で行動不能! 緑谷来久までも無傷にて勝利! 決勝に進出だ!』

いや強いのか、雄英高校に通うクラスメート達が加減できない程に。

覇気を使って戦う日もそう遠くはないですね。

続いてボスと常闇君との戦い。

無敵に近い個性とプレゼントマイクにすら言われる黒影も既にもボスには分析されている。

大きく展開する前には必ず体に戻すようにしているその動作、爆炎にて涙を流す黒影の表情、黒影は光が弱点であることは私にも分かる(というかモウイヤとか言ったら普通に分かりますよ)

黒影の形状も脅威を下げてしまふ、いかに大きさを変えてもあくまで腕が二本なら尻尾のある尾白君の多彩な攻撃を破ったボスには通じない。

せめて常闇君も同時に攻撃できるようにすべきでしたね。黒影の制御のためか彼は身体能力に難がある。

個性の相性と体術の練度でボスの勝利です。

さて、ここまで辿り着きましたねボス。

『よって決勝は緑谷対爆豪に決定だあ!!』

大言壮語とすら言われた選手宣誓。

実現できるまであと一つ。

サイドキックである私が貴方の最後の壁となりましょう。

第26話

「君が今からやることは彼の一生を背負うことになるんだよ。その覚悟が君にあるかい？」

個性診断テスト後に個性が判明し、個性のせいで精神的に死にかけている幼馴染。

助けようとしたのは俺がスゲー奴だからだ。なんでも出来てカツコイイ個性を持っているスゲー奴だからだ。ヒーローな俺なら助けられると思ったのからだ。

けど何と言っても来久は反応せず食事も取らずに日々衰弱し、本当に死んでしまうかと思った。

いよいよ未だに認可されていない精神干渉個性による記憶の忘却治療が行われると言う話が出た時に、俺はアイツのボスになることを思いついた。必死に問い詰めた前世、命令されるままに生きた戦闘人形の一生。ならアイツのボスになって命令すれば生きると思ったんだ、前世の記憶に吞まれている今ならと。

そのことをデクのことでも手一杯だった緑谷家ご両親ではなく、うちの両親に相談した。お袋は賛成した、それで助けられるならやつてみろと。親父は反対した、それは俺がやるべきでない。お袋に頭の上がらない優しいけど俺にも強くでれない情けない男、それが親父の印象だった。けどこの時は、後にも先にもこの時だけは、一步も引かず強く言ったんだ。

後戻りはできない、もうヒーローになるしかない、来久の期待を裏切れない、そんな辛い人生になってしまふのだと。普段ならそんな事くらいと跳ね除けた、構うもんかと無視した、けどこの時の来久の命を切り捨てることになってでも息子を案じる父親の目を逸らすことは出来なかった。

その後考えて、考えて、考えて、お袋に弱音吐いて、親父に話を聞いて、やつれる緑谷家ご両親を見て、来久の死にそうな顔をなんとかしたくて、俺は決断した。

背負ってみせる。

アイツのヒーローに俺はなると。

そのためならどんなことでもする、途中で投げ出さないと。

こうして俺は、アイツの緑谷来久のボスでヒーローになったんだ。とんでもない前世と戦闘能力を持つアイツの上に立つトップヒーローになると決めたんだ。

それが、爆豪勝己のオリジン。

『さあいよいよラスト!!』

雄英1年の頂点がここで決まる!!

決勝戦 緑谷 対 爆豪!!!

今!! スタート!!』

「荊からの指銃」

全力でやれ、ボスの命令は絶対だ。

なら間合いを詰めて仕留める。

六式使い必殺の流れをボスは爆破で飛ぶことで回避する。荊がある以上間合いは自在、視界の範囲は手の届く位置といえる。

だが幼少時からの組手で数え切れないくらいくらってきた流れのためか、最早反射的にボスは回避できる。

「刃引き嵐脚」

切れ味を無くした三日月状の風の塊、峰打ちよりこっちがあつてるとかと改名してみたが、殺し厳禁なヒーローにはうってつけ。普通の嵐脚も瓦礫や遠距離攻撃の対応手段としては便利ですが。

切れ味なくとも風の塊、直撃は不味いとすかさずに回避。やはりボスは同世代の中で経験が圧倒的だ、荊からの指銃に追撃嵐脚なんて普通は対処できる筈がない。

けれど、全力でやる私にその回避がどこまで続きますか?そして回避だけでは勝てませんよ?

CP9の六式使いでも動力500はある、銃を持った海兵500人分の実力が貴方にありますか?

『圧倒的イー!!今までトップで攻め続けてきたあの爆豪が防戦一方!!』

瞬時に近付き必殺の一撃、距離を置けば風の刃に空気の弾丸、容赦無き緑谷二号の連撃に為す術もないのか!!』

『回避できていることが凄いがな、慣れでは説明がつかないぞアレ』
確かに、相澤先生の言う通りだ。

ここまでやればいつもなら一撃くらい当たるのだが未だに被弾は零、爆破も最低限で体術で対応できている。これは何かタネが？

見聞色の覇気で探れば空中に違和感、水滴上に宙にある極小の球体を発見、これは？

「気づいたかよ。まだ自分の周りしか出せないがな」

雨粒より小さなサイズの爆破剤の球体、それを周囲に散布している。
る。

「どんなに速くとも空気を裂かずには進めない、どんなに速くても来る場所が分かれば回避できる」

確かに私はそう言った。

そうどんなに速くてもその場にある空気は押しつけねばならない。

時速二百キロで移動してきても、1キロ先から察知していれば余裕で躲せる。

だからこそ極小の爆破剤を撒いて私の動きを察知していたのか？

「なんでもありません個性」

汗腺から分泌される爆破剤の爆破だけじゃなく、爆破剤の空中操作まで可能なんて、前世にて知られ始めていたシャーロット・リンリンの長男次男並の能力の拡大解釈じゃないですか。

「てめえに学んだ生命帰還を体得しようとしてるうちにな」

個性と生命帰還の相性は可能性の塊ですね。

「ですがそれでは爆破攻撃ができない」

ボスの反応速度以上の速さには何もできない。

選手宣誓は叶えて欲しいと思う、ですが命令は全力でやること。生命帰還で脚に力をいれてトップスピードの荊から指銃を撃ち込む。

「終わりです」

ボスに勝ち目はなし。

集中して回避が精一杯で反撃に転じれず、攻撃にしても爆破の火力

とボスの体術では私の鉄塊の防御は超えられない。

勝敗は戦う前に決まっていたのです。

轟君のように防がせない、貫通せずとも衝撃で落とす。
ガキンツ

と指銃が交差した腕に受け止められた。

そもそも防御に転じれる反応も異常だが、この感触と肌の色は、

「武装色の覇気?」

存在は何度も教えていた。

存在しない悪魔の実とは違い、六式や生命帰還と共にこの世界でも
体得できる可能性のある能力だとは思っていた。

けれどこの状況で今、使えるようになったのか。

「疑われない事、それが強さなんだろう?」

覇気とは要するに気迫だ、気合だ。

殺気や威圧などの本人の発する意思だ。

ゆえに心揺らげば成り立たず、心乱れば発動しない。そんな不安
定で不確かな力をボスは身に着けてられたのか。オールマイトにプ
ロヒーロー、私や轟君のような自分より強い存在を見ても。

「疑わねえよ、自分の強さを」

ボスは言う、自身の思いを。

「疑えるはずないんだよ」

その思いは強く、

「お前が俺をヒーローって言うから」

何よりもまつすぐで。

「俺はお前を従える最強のナンバー1ヒーローになる男だあつ!!」

貴方は最高だ。

「そうですねマイヒーロー」

自然と浮かぶ笑みとともに私も全身に覇気を纏わせる。こうなれ
ばもう六式だけでは相手にならないだろうから。

「一段階戦いのステージを上げて、全力で戦いましょう」

そこからの舞台はぶつかり合う衝撃のみが響き渡った。ボスは武
装色の覇気を纏うことで拳打と爆破を同時に放てるようになりその

威力は絶大、身体能力も大幅に上昇。反応に関しても覚醒しだした見聞色の覇気の作用で私の攻撃を先読みできるようになった。実力としては海軍中將に劣るくらいだろう、だが前世の肉体ほどに鍛え抜かれていない今の私とは充分に渡り合えるほどだ。とはいえ覇気は消耗する、覇気の使い方に一日の長がある私が長期戦へと持ち込めばそれだけで勝つことができるだろう。だがそれは合理的判断であつて全力で戦うことではない。命令に従い全力で戦うなら、こちらもまた打ち合う。武装色の覇気と鉄塊拳法の併用なら爆破でのダメージも最小限だ。

ぶつかり合う覇気を纏う拳同士、威力の増した爆破による機動と六式の高速移動、まさに雄英高校体育祭の最後に相応しい激戦が繰り広げられた。

だが、それが、

私でも気付かない内に呼び起こしてはならないものを起こしてしまっていた。

(強いな、倒さなきゃ、覇気使い、強者、殺す、確実に)

この世界では初めて、前世でもあまり無かった覇気を用いた戦闘。それが私の前世の記憶、戦う時の思考パターンを引き摺りだしてしまっていたのだ。

「榴弾砲着弾っ!!」

よりによって相手が一番の隙をさらす、必殺技を放つタイミングで。

「絶死銃」

全ての覇気を指先に集中する殺す為だけの技。

いかなる防御も肉体も穿ち貫きその生命を内部から破壊し尽す一撃。

多くの命を奪ってきたソレを私は無意識化で放とうとし、一部のヒーローがその危険に気づき止めようとした所で。

あの日手をのぼしてくれた少年の顔が私の脳裏によぎり、心臓の位置に指先が触れる寸前ギリギリで止まることができた。

間近で驚くボスの顔を見ながら、私は爆炎に吞まれて吹き飛んだ。

かつてないほどに自らの未熟さを恥じ入り、大切な人の命を奪わなかったことに安堵して。

『緑谷君場外!! よって爆豪君の勝ち!!』

激突した観客席の壁に大きく凹みと罅を作りながら、私はボスの勝利を見届けた。

『以上で全ての競技が終了!!』

今年度雄英高校体育祭1年優勝は、

A組爆豪勝己!!!』

勝利したにも関わらずにどこか呆然と立ち尽くすその姿を。

第27話

「それではこれより!!表彰式に移ります!」

どうでも良いですけどミッドナイトの美貌と格好が大半の生徒より目立って視線を集めている件について。

「メダル授与よ!!今年メダルを授与するのはもちろんこの人!!」

相澤先生ですかね?担任ですし。

「私がメダルを持つて来「我らがヒーローオールマイトオ!!」」

段取り下手ですねえ。

「常闇少年おめでとう!強いな君は!

ただ相性差を覆すには個性に頼りつきりじゃダメだ、もつと自力を鍛えれば取れる択が増すだろう」

今の身体能力では厳しいですが、六式を体得できたら黒影と同時に指銃とか強そうですね。

「轟少年おめでとう」

「緑谷少年達との戦いで君に何か得る物があつたかな?」

「一号戦でキツカケと助言を貰いました、二号戦では強さの差つてのを叩き込まれました。

だからあなたが一号を気にかけるのも少しわかつた気がします」

良い言葉ですが一号二号呼びで脱力しますよ、誰だ言い出した人。

「俺もあなたのようなヒーローになりたかつた、ただ俺だけが吹っ切れてそれで終わりじゃない駄目だと思つた。精算しなきゃならないモノがまだある」

家族関係ですか、今生での良縁には感謝ですね。

「顔が以前と全然違う、深くは聞くまいよ。今の君ならきつと精算できさる」

どうでも良いですが、表彰者へのオールマイトのハグに兄さんがヤバイ顔して羨ましがっていて周囲がドン引きしてるのですが。私は遠慮したいなあ。

「緑谷来久少年、圧倒的だつたね!!」

「戦闘能力だけではありませんから」

「なーに、私も似たようなモンさ。書類仕事とかで駄目だからね!!」

「それは個人事業主としてどうなんですか?」

「この体育祭は君に何を与えたかな?」

「至らなさを知りました、思い知らされました」

「これからだっ! そう思って頑張るのさ!」

「ハイ」

オールマイトからのハグを躲して頷く。

体育祭では終始余裕(脱落はしかけた)でしたが。轟君には何もできず、最後には暴走しかけた。情けないにも程がありますね。私はあまりにも足りない。

「さて爆豪少年!!」

伏線回収見事だったな、君は一位になった」

「嬉しいとは思う、だが驕りはしねえ。此処はあくまで通過点で達成できて当たり前前の課題に過ぎないんだよっ!!」

「その向上心ごと君であり、だから君は強いんだねっ!! その不変の絶対評価を持ち続けるんだ、それが君をナンバー1ヒーローにするだろうっ!!」

ボスにトップの証たる金メダルがかけられる。将来の予定にて達成することが前提の証。ですがそこに辿り着くまでのボスの苦勞を思い出し目頭が熱くなります。かつてテレビで見た憧れに貴方はまた一つ辿り着いたのでですね。

「さあ今回は彼らだった!!」

しかし皆さん! この場の誰にもここに立つ可能性はあった!! ご覧いただいた通りだ!

競い! 高め合い! さらに先へと登っていくその姿!! 次代のヒーローは確実にその芽を伸ばしている!! てな感じで最後に一言!!

「皆さん! 唱和下さい!! セーの

おつかれさまでした!!!」

いや段取り下手かこの人。

オールナイト以外会場中プルス・ウルトラじゃないですか。教室に戻って二日間の休校とプロヒーローからの指名について説明を受ける。

さてどうなるやら、私の戦い方はプロヒーローにどんな風に映ったのやら。

流星に職場体験でボスと一緒にの場所に参加は無理でしょうし。

そして私はボスと共に帰路についていた。

いつもそうだが今日は話したいことがある。

「おめでとうございますボス、目標を一つ達成できましたね」

「ああトップヒーローとの顔繋ぎに良い機会になりそうだ」

ボスなら何処のヒーロー事務所が良いでしょうか、かなりエンデヴァーのような大手が経験を積みそうですが。

「言いたいことあんだろ？」

ボスの問いかけに息が詰まります。

そうです、そのつもりでしたが、思考に逃げようと思いましたね。

「私は貴方のサイドキックには相応しくないのでしょうか」

爆豪勝己に生きる目的を与えられた。

爆豪勝己に救われて生きれるようになった。

けれどそんな私は前世を散々活用しているくせに、前世を全く乗り越えられていなかった。

私は強くない。

私はただ過去の貯金を切り崩して生きてきただけだったのだ。

決勝で記憶に呑まれそうになって、それをようやく実感したのです。

このままでは私は彼に何も返せない。

貰ったものの何もかも。

「ようやくだ」

ボス？

「ようやく俺はお前の本気に手がかかったんだ」

それはそうかもしれませんが。

あの時の呆然とした顔はもしや。

「お前が本気出す場所に辿り着いた。ならソレを超えた時こそ俺は真の最強のトップヒーローになれる」

辿り着いた事実を頭で処理していたんですね。

「相応しい、相応しくない？勘違いするな、選んだのは俺だ。お前は黙って俺についてくりや良いんだよ」

それだけじゃない筈なのに、手加減されたと思ったり、死の恐怖だって感じた筈なのに。それでも貴方はそう言ってくれるのですね。

「イエス、マイヒーロー」

改めて誓おう、私はこの人のサイドキックになる。いずれ頂点に立つこのヒーローの。

「しかしあの状態の私を下したのはエドワード・ニューゲートだけですよ」

「そいつはどんなヤツなんだよ」

「世界最強最悪の海賊団から独立した、地震を操る世界を滅ぼせる最強の男です」

「そんなのが山程いる世界ってなんだよ」

「いえ山程はいませんよ。彼と同格な実力者は世界全体からしても十人いるかどうかです」

「充分山程いるじゃねーか」

「今頃どうしてるのでしょうか。きっと彼は命尽きるその時まで最強であり父親なんでしょうね」

「超えるハードルが高すぎるわ、今更だが」

いつもより沢山ボスと話した。

今まで避けてきた能力や技術以外の前世の世界の話をした。

そうすることで向き合って、そうすることで乗り越える。

私はまだこれからだから。

これから始めて進んでゆこう。

第28話

「試してみたが使い所が限られるな」

「威力は中々ですね」

雄英高校体育館γ、通称トレーニングの台所ランド。頭文字で略すと問題が発生しそうなその場所で今日も私とボスは訓練に励んでいた。

今回試したものは協力技。武装色の覇気を扱えるようになったボスだがまだ覇気の持続時間は短い。だからその短い時間で戦局を覆せるような技を生み出そうとしているのだ。

前世の記憶から参考になりそうな技を選んで試してみたのですが、いざやってみると問題がありますね。

「一発で小手がオシヤカだな」

「やはり拳ではなく武器でやるべきですね」

元の技も武器を用いた技。

拳では威力の差と肉体の負担が大きいです。

「ヒーローってのは武装がタブーみたいな風潮あるのがな。武器はあくまで肉体と個性ってな」

「確かに徒手空拳ばかりですね、ヴィランが武装するのだから警棒ぐらいは持つべきだと思いますが」

コスチュームの防刃性は高いのだが、刃物類は使い手しだいで山を斬り海を割り嵐を断ちますからね。

武器として使わなくても、斬撃を受け止める防具として携帯すべきだろうに。

「折りたたみ式警棒くらいなら認可も下りるだろ、普段は使わないで非常時と協力技の時だけ使うようにしてな」

「それが妥当ですね、あとはボスの個性に合わせたギミックがあればなお良いです」

コスチュームのように爆破剤を貯める機構のついた警棒、要望を出したら作ってくれますかね？

「フッフ、お困りのようですねお二人さん」

「この声はっ!!」

「サポート科の発目だろ」

聞こえてきた声にわざとらしくノツたのにボスは面倒くさそうな反応です。

「そう、その要望っ！そのサポートアイテムっ！この発目明が請け負いましょうっ！」

「プロに頼むからいいわ」

「なぜですかっ!!」

「この流れで断るのは凄いですよボス」

あっさり断るボスに驚く発目さん。

体育祭で能力あるのは分かりましたが、まだ学生ですからね。

「休校日なのに熱心だね君達」

安全のため様子を見に来たセメントス先生の言葉を聞きながら、ボスにまとわりつく発目さんの姿を私は眺めていた。

雄英体育祭の翌日、新たな発見もありながら時間は過ぎていきました。

「私もジロジロ見られて何か恥ずかしかった！」

「俺も！」

「俺なんか小学生にいきなりドンマイコールされたぜ」

「ドンマイ」

本日雨天にして登校日。

体育祭にて全国に認知された雄英生達は、ヒーローに常に付き纏う周囲の反応を体験していた。

かくいう私とボスもだ。

雄英体育祭での活躍と激戦に1位と2位という結果。下手をしたらあの一日だけで同世代でもっとも有名になってしまったのかもしれない。

登校中の通学路で声をかけられたりサインや握手を強請られたり

もしてかなり戸惑いました。

そんな話でクラス内が大盛り上がりしていたのですが、チャイムの音でピタリと切り替わります。

相澤先生に挨拶をし本日の授業開始です。

科目はヒーロー情報学、特別という言葉を相澤先生が言うよりも重みが増すのは、彼の日頃の行いのせいですね。

『コードネーム』ヒーロー名の考案だ」

「胸ふくらむヤツきたああ!!」

両腕を上げて、芦戸さんなんか飛び跳ねながらのクラスメート達はその叫びに、すいません正直引いてます。こういった所で乗れないのは前世の価値観のせいなんですかね。

「というのも先日話した「プロからのドラフト指名」に関係してくる。指名が本格化するのには経験を積み即戦力として判断される2、3年かから、つまり今回来た指名は将来性に関する興味に近い」

そして興味ゆえに削がれたらキャンセルもされる、というわけですね。事務所として利益を考えたら当然ですね。

「頂いた指名がそのまま自身のハードルになるんですね!」

「そ、でその指名の集計結果がこうだ。

例年はずっとバラけるんだが、この三人に注目が偏った」

爆豪、4582。

緑谷二号、4367。

轟、4016。

ですか、次の常闇君が360だから確かにかたよってますね。というか薄々気がついてましたけど一号二号呼びは相澤先生発ですね。

しかし、最終種目に残った芦戸さんや青山君に指名が無いとは意外ですね。兄さんは怪我のせいだと思いますが（なお尾白君は72）

「これを踏まえ指名有無関係なくいわゆる職場体験つてのに行ってもらう」

割と有名な話ですよ。

初職場体験の雄英高校生を取り上げるサイトとかもネットにあります。

そして社会にでるがゆえにコードネームが必要なわけですか。
「付いたら地獄を見ちゃうよ！」

仮でも適当な、と相澤先生が言いかけた所で現れるミッドナイト先生。

ただでさえ体育祭で注目されているのだから、当然ヒーローネームも世間に気にされますよね。

相澤先生は自身にセンスないからと（自分のヒーローネームも友人であるプレゼントマイクが付けたらしい）ミッドナイト先生に査定をお願いするようです。

「将来自分がどうなるのか、名を付けることでイメージが固まりそこに近付いてく、それが「名は体を表す」ってことだ。オールマイトとかな」

むう、深い。

前世だと名前なんて記号でしたから、そこまで考えたことありませんでした。

思えば前世での海軍と海賊の二つ名も本人をよく表してましたね。さてヒーローネーム、どうしますか。

今まで考えたことないのに十五分で決めるとか難易度高いですよ。そして出来た人から発表。

トップバッターの青山君と芦戸さんのやらかしにより大喜利っぽい空気になったり、梅雨ちゃんのおかげでなんとかなったり、切島君が憧れを背負おうとしたりと、皆のそれぞれの思いに場が盛り上がっていきます。

そして私の番になり、自然と湧き上がった思いを形にします。

「超人ヒーロー イージスゼロ」

かつてサイファーポールの一員だった私。

思い出したくもない記憶を敢えて背負う。

そうでなければ踏み出せないと体育祭で思い知りましたから。

「ところでなんでゼロなの？」

「前世での呼び名が零番だったからですな」

（（だからクソ重たいんだってコイツの前世ネタは））

ミッドナイト先生の疑問に答えたらまた空気が重くなりました。正確には『はー681期零番』でしたけど、私以外残らなかつたから零番とだけ呼ばれることになったんです。

そしていよいよボスの番、その実力と在り方からクラス内で信頼されているので、皆安心した様子で見守っていますね。

「大爆殺神ダイナマイト」

そのヒーローネームが公開されるまでは。

轟君の個性が使用されていないのに凍り付いたように固まる教室の空気。

自信満々でドヤ顔なボス。

引き攣った表情のミッドナイト先生に、寝袋に潜り込み就寝中な相澤先生。

（おいどうすんだよコレ）

（冗談だよな、本気じゃないよな）

（クソダセえ、マジダセえ）

（普段が見た目に反して真面目なヤツだからツッコめねえんだけど）

（世話になってるからセンスを指摘できねえよ）

（爆豪傷ついたら嫌だし）

（誰かなんとか言ってくれ）

ぎざめきが皆の気持ちを表していますね。

「ず、随分自信満々ね爆豪君」

（（ミッドナイトオオオ））

「小二の時から決めてましたから」

（（だからかつ!!））

フンと胸を張るボスにツッコミたそうなクラスメート達ですね。

ですがこのままだと皆が可哀想ですね。

「とりあえず大爆殺神は消しましょう」

斜線ひいて訂正です。

「何してんだお前」

「ダイナマイトだとありきたりだよ。調べたら結構な数のヒーローが

登録してるよ。あ、ヴィラン名でも多い」

「爆破的な個性ならイメージしやすいからですかね」

「多分それが理由だね」

(（幼馴染双子、もつとやって）)

「なら漢字に変換しますか、切島君みたいに」

「そつちだと人物名でいるね、大奈舞斗さん。さらに切島君のパクリならダメだよ」

「むう、なら爆殺ナイトではどうですか？オールナイトみたいでしょう」

「爆殺がダメだって」

「おい勝手に決めるなお前ら」

呆気にとられてたボスがいますが、すいませんがこればかりは。

「かつちゃんごめん。でもさ親戚の集まりの時に双子の弟が大爆殺神ダイナマイトのサイドキックなんです、とは言いたくないんだ」

それは私も嫌ですね。

「よし、ならばダイナマイトと大爆殺神からそれぞれとってダイナゴッドはどうかかな？」

「ロボみたいですがありますね。ボスは神みたいなものですし」

「それは君しか思っていないけど、一応仮決めだし」

「ええ!!それでいきましようっ!!」

「もうそれで良いよ」

ふう、なんとか決まりました。

ミッドナイト先生も領いてくれましたし、ボスも不承不承ながらオーケーしてくれました。

まさかこんな地雷があるとは驚きですね。

最後に兄さんがあだ名だったデクをヒーロー名に決めて授業が終了しました。

「ケロ、爆豪ちゃん気にしなくても大丈夫よ。全て完璧な人より欠点あるほうがよっぽど魅力的なんだから」

「慰めはありがたいが、俺のネーミングセンスは欠点レベルなのか」

梅雨ちゃんの慰めの言葉がトドメですねえ。

第29話

「オイラはマウントレディ!!」

個性的にも噛み合わないから微妙では？

峰田君の下心オンリーな職場体験先希望に呆れながら私はどうしようかと悩む。

何しろ4000超え、ヒーローに詳しくない私は名簿確認だけでも大変だ。

兄さんが学校から紹介されるヒーロー事務所名簿を見ながら持ち芸である思考のたれ流しをしています。指名の無い人は希望先がかぶっても良いのでしょうか。

「とりあえず自宅から通えるトコですかね」

遠出とか泊まり込みは面倒です。

「適当な学校の決め方かつ!!」

「もつと真剣に選べよっ!!」

いやそうなんです、多過ぎて時間が。

期限があと二日ですし。

「ボスはどうします?」

同じトコは無理でも参考くらいには。

「ケツ、ネーミングセンスクソ雑魚ナメクジの俺に何を言えと?」

「二拗ねてるーっ!!」

「ケロ、こんな爆豪ちゃんもアリね」

「確かにアリですね」

やさぐれ感が新鮮で良いです。

「いや君等おかしからね」

拗ねてるボスに癒やされながら、即決した人達から話を聞いたたりし候補を絞ります。

ヒーロー達が体育祭で私を見て判断できることは体術に秀でて対人戦に長けていること。

ヒーロー事務所としては扱いやすいでしょうね。

やはりランキング上位から選ぶのが妥当かと思っていたら、独特の姿勢でオールマイトが現れて兄さんを連れて行きました。タイミング的に職場体験の件でしょうけど、なんであんなに焦っているのでしょうか？

放課後いつものメンバー＋新規加入者達を体育館でボコリ倒し、合間に職場体験の話をしします。

「あー、最終種目まで残っても指名されないヤツもいんのな」

鉄哲君が意外そうに話してくれます。

実際彼は任侠ヒーロー フォースカインドの指名があつたみたいで、他にも茨さんがシンリンカムイ、拳藤さんがウワバミからあつたようです。ちなみに物間君はリカバリーガールに連れられてあちこち医療機関へ出向くらしいです。リカバリーガール程でなくとも治療や手術など医療に応用できる個性持ちは多数存在し活躍しています、そんな彼らの個性をコピーして学ぶそうです。

「聞けば普通科の心操君も指名あつたらしいよ、彼は来期とかにガチで編入しそうだね」

個性は強いけど問題は体力なんですよね、まあそこは本人次第ですか。

「それで爆豪君が拗ねているのは置いとくとして、来久君はどこにするんだい？」

何気に兄さんレベルでヒーローと個性に詳しい物間君なら相談相手には打ってつけですね。

「正直現場を知れたらどこでも良いかなと。私はボスのサイドキック志望ですから過剰に付き合うつもりがないので」

「そして爆豪君はなんでもできるから補佐のために伸ばす能力も見当がつかない、か。これは難問だね」

なんですすよねえ。

書類やら経理も多分ボスの方ができますし、戦闘に関しても実力は充分です。

補う要素がないとか仕えるコチラも大変です。

「君自身の戦闘スタイルも完成されてるから、学ぶことも少ないみたいだしね」

前世でも暗殺以外にも生け捕り任務とかの経験もわずかにありましたし。

「ならホークスにしたらどうだい？速すぎる男の異名があるし、18歳で事務所を立ち上げた実績もある。卒業したら即事務所を立ち上げる予定の君達には学ぶことがあるんじゃないかな？」

あーこのヒーローですか。学校から特に勧められたヒーローで向こうも熱心らしいですね。常闇君と被りますが、現トップ3と私が指名された中だとランキングが一番上なんですよね。

「来久君なら空中移動も出来るから相性も良いだろうしね」

そうなんです、どうにもものりきれないというか。

なんかこの話、キナ臭い気がするんですよ。

ホークス自身にも何故か謎な親近感ありますし。

「ボスはどうします？ホークスからも指名ありましたよね？」

「俺はエンデヴァー事務所にする。ナンバー2ヒーローで事務所も国内最大規模だしな。」

事務所運営を学びてえし、エンデヴァーも俺の鼻っ柱をへし折りたいらしいからな」

獣みたいな獰猛な笑みですね、梅雨ちゃんに取陰さんが見惚れてますよ。

その情報は轟君からですかね。

まあ個性婚やらかしたくらい向上心ある人なら、学生なのに生意気な体言吐いたボスにヤキを入れたくもなりますよね。

それで折れるボスではないでしょうが。

「ならホークスにしますか」

狙いが何か不明ですが、虎穴に入らば虎子を得ずってヤツです。

一旦ここで話を切り上げ再び組手へ。

ボスの覇気習得もあつて私自身も鍛えないと。

どっかに狩ってよい猛獣溢れる島とか修行に向きな場所ないもん

ですかね。

「こっちは便利な世界ですが、どうにも未知が少なく世界が狭く感じます。」

さて、訓練も終わり後は帰るだけですが、もう一つボスと物間君に相談したいことがあったんです。

「飯田君のこと?」

「はい、兄さんが気にしてまして」

「兄であるインゲニウムがヒーロー殺しに襲撃されたんだっただか」「ええ」

慕う存在が襲撃されたにも関わらずいつもどおりな態度の飯田君。そこに違和感と危機感を感じて兄さんと麗日さんと共に気にしていたのですが、はぐらかされてばかりです。

飯田君とは仲は良い方ですが、兄さん同様貼り付けた表情で何も言ってくれませんでした。

「指名先は多いのに大手ではないマニュアルを即決、個性的にも関連は無いか」

「事務所が兄が襲撃された保須市。確かヒーロー殺しは同じ地域で複数のヒーローを襲ってから場所を変えている」

「兄が居た場所を守りたいからならまだ良いけど」

「そうじゃねえなら捕まえてやろうとでも考えているのか?」

兄の無念を晴らすことが目的ならありえますが。

「復讐とか?らしからぬ行動だと思っけど」

「完全上位互換な兄が負けた相手にか?正気じゃねえ判断だろ」

「でもありえない話ではないかと」

貼り付けた表情に隠した激情。あの眼には前世にて覚えがあるのだ。

多くの、それこそ数え切れない人々が天竜人に向けていた眼差し。

「いや轟君の件以上にどうにもできないよ」

僕はリカバリーガールと北海道に行く予定だし、と申し訳なさそうに物間君は告げる。

「その場にいたらフォローもできるが、体育祭と違って全員バラバラだからな。マニュアルからは誰も指名ねえしよ」

仮にあっても飯田君が拒みそうですね。

「いっそ先生方に頼みますか?」

今回の職場体験を見送ってもらえばなんとか。

「あくまで予想だから無理でしょ」

「まだ何もしてねえしな」

「なんですよね」

先生方や指名先のヒーローであるマニュアルさんも気付いて気にしそうですね。

「それに君は飯田君の何を止めたいのさ」

「やるかわからねえ復讐そのものか? 復讐しようとして返り討ちにされる可能性か? 復讐成功しちまった後のことか?」

復讐を無理に止めたら彼の心は澱み。

彼が復讐しようとしたら返り討ちで命を落とす可能性が高い。

とはいえ私自身がステイン自体を知らないから被害からしか実力を測りようがない、雄英高校一年の中でも実力者である飯田君ならなんとかできるかもしれない。だがなんとかしても復讐で命を奪えば彼の人生はお終いになる。

「難しいですね。復讐しようとした人々を返り討ちにした記憶ばかりでどうしたら良いかまるでわからない」

「「そーいやあソツチ側だったよコイツ」」

「あえて望みを言うなら、職場体験後も飯田君と同じクラスで学びたいですかね」

そうするためには、飯田君が復讐心に区切りをつけてヒーロー殺しが逮捕される必要がある。

うん、無理ですね。

飯田君がヒーロー殺しと遭遇したらあらゆる意味で終わってしまい、ヒーロー殺しが飯田君の居ない場所で捕まれば区切りをつけられる。

都合よく駆けつけるヒーローがいないとそんなこと無理です、期待

するにはあまりにもありえない可能性だ。

その場に私は居れませんし。

「まあ気にかけておくさ」

「リカバリーガールにも保須市に行けるようお願いしとけば命さえあればなんとか」

それぐらいしかできませんよね。

全てが予想でしかありませんが、ヴィラン襲撃事件もあって不安です
すね。

話も終わり私達は帰路につきました。

ただ私はこの後思い出すことになります。

かつてどこかで聞いた、

『ありえないことはありえない』

という言葉。

第30話

ホークス事務所は九州、移動だけでもかなり時間がかかりますね。とはいえ一日もかからないで新幹線で行けるのだからこつちの世界は便利です。大半が海で気象も摩訶不思議な前世ではありえなかつた快適さです。

同じ職場体験先を選んだ常闇君と一緒に新幹線に乗り込み、飯田君のことが気にかかりながらも座席につきました。

「しかし意外だな」

新幹線が動きだしてからしばらくして、常闇君が口を開きました。

「緑谷は爆豪と同じ所に行くと思つたが」

学校では常に一緒だからそう思われて当然ですね。

「別行動自体はしますよ私達も。お互いに見聞を広めたかつたですし」

二人いるのだからそれぞれ別の所を見るべきでしょうしね。

「そうか」

そう言つて黙りこくる常闇君ですが、何か聞きたいことがある様子です。言うべきか葛藤しているみたいですね。

「どうしました?」

なので私から話をふれば常闇君は意を決したように言います。

「怖くなかつたのか? ヴィラン襲撃事件の時。」

お前はあんな大勢に躊躇わず突撃して戦つた。

確かに俺も夜ならば確実に勝てたし、大半のヴィランには遅れを取らないだろう。だがあんな悍ましい悪意をぶつけられて、お前はなんで平然と戦えたんだ」

なるほど、それが彼の悩みですが。

これは他の皆も思つていることかもですね。

ヒーローを志す立場でありながら足が竦んでしまつた事実が彼の口を重くしてしまつたのでしょう。

まあ仮にですがクラス内でも気にせず戦えたのは少数でしょうね、

勝ち気なボスや漢気優先な切島君、あとはヴィランより恐ろしい存在（父親）を知っている轟君なんかは。

しかしコレなんと答えたものか。私が悪意を気にならないのは前世の記憶によるものですが、その中でも最たる理由が。

「悪意なんかよりもさらに恐ろしい感情を知っているからですかね」
「悪意よりもか？」

自然と頭に思い浮かんだのは例の如くあの存在と一部の者達。

「権力者の無邪気な欲望と、悪党達による子供のような夢と野望」
そう、いつだってそれが一番恐ろしかった。

正式な法の元に振るわれる自由、無法の元に振るわれる自由。
そんなものが数え切れない悲劇を生み出してきたのだから。

まあ前世の私が言っていたよいことではありませんけどね、何も考えず命令のまま動いていた私も大差ないですから。

「悪いもののようにには聞こえないがな」

「お金が欲しい、個性が使いたい、暴れたい、不満がある、程度の悪意なんかは満たしてやれば解決しますけどそれらはそうそう満たされはしませんからね」

だからこそ天竜人に泣く人は尽きないし、ロックスは世界を震撼させた。

きっとあの世界はいまでも欲望と夢と野望で荒れていることだろう。

そしてこの世界でも最悪のヴィラン達はそんな衝動で世界を乱しているのではないかと思う。

「そうか」

完全に納得はしてないようですが、常闇君も見れば分かると思いますよ。兄さんなんかもヒーローになりたいという夢であそこまでできていくわけですから。

移動時間をこんな会話で潰しながら九州のホークス事務所へと向かいました。

「やあよく来てくれたね」

爽やかに言う速すぎる男こと、ナンバー3ヒーローホークス。

「今回俺が体育祭指名したの初なんだけど緊張したわ、なにせ雄英高校出身じゃないしね」

現トップヒーローの中じゃ珍しいですね、なにせオールマイトにエンデヴァーにベストジャーニストにエッジシヨットは雄英高校出身ですから。

「それでなんで俺達を」

「雄英高校からの勧めもあったし、鳥仲間だから」

私は違いますけど。

「お巫山戯で？」

「いや2割本音、半分は1年A組の人から話を聞きたくて君らを襲った敵連合とかいうチンピラのね」

「ならば単独で殲滅した緑谷を呼ぶのは納得ですね」

私の行動は物間君の想定にボスの命令があったからですけどね。

「そ、んでどうせなら俺について来れそうな優秀な人ってことで上位から良さ気な鳥人を。ついでに緑谷君は飛べれるしね」

理屈は通りますね。

それだけではないようですが。

まあ私として経験したいのはヒーローとしての実務の方です。ついて来れそうだから呼んだのならついていって上げましょう。

サイドキックの方を含め自己紹介を済ませ、泊まる部屋と仕事の説明を受ける。

とりあえず事件起きたら飛ぶからついてきてとホークスから告げられたのでその通りにしましょう。

なるほど流石はナンバー3ヒーロー。

速すぎる男の異名は伊達ではなく事務所を構えている都市であれば瞬時に到達し捕縛する。個性である剛翼も練度が高く自由自在だ。振動を羽でとらえる感知力も高く、近場であれば連絡より先に駆けつけていた。

弱点は近接戦闘ですかね？急所を正確に狙い撃っているので苦戦はないですが、硬い装甲持ち相手では厳しいかもしれません。

いや捕縛ならそれも問題ないですね。

「いや確かについて来てと言ったけど」

「？」

「常に真後ろにピッタリついて来られるとは思わなかったよ。というか怖い」

六式が一つ刺が応用、女李参。

私メリーさん今貴方の後ろに居るの、という怪談で思いついた技で、剃で常に相手の背後を取り続け視界に入らないようにします。気配と声はするけど姿をとらえることができない、そんな状態にする技です。

一度ボスにもやって怒られましたね。

「うん、舐めてたよ。俺も公安も」

ホークスの実力は高く、そのスタイルに方式は参考になる。なるので職場体験はこの調子でピッタリと背後に付こうと決めました。

そんな職場体験を続けてはや二日。

時折常闇君を抱えながら女李参をしてホークスのヒーロー活動を学び続けました。

ホークスが何故かゲツソリとしてきましたが、仕事が終わったら夕飯に九州名物鳥の水炊きをご馳走してくれて今日の活動は終了です。

同室で寝泊まりする常闇君の黒影という個性ならではの睡眠時の苦勞を聞いたりして過ごし、常闇君が就寝したところで唐突に一枚の羽がフワリと私の前に現れました。その羽は私の目の前に有り進路を指すように傾きました、なんとなく要件が分かった私はその羽の指示に従い屋上まで行きます。

「ゴメンねこんな遅くに」

そしてやはりそこにいたのは職場体験先のウイングヒーローホークス。

屋上の端に立ち翼を広げながら私を迎えます。

「何か御用ですか？」

ホークスのヒーロー活動時とは違う気配。

それはひどく覚えのあるものです。

「危険なんだよ君は」

告げられた言葉と共に放たれる剛翼。

幾百の軌道を描きながら襲いかかる羽の乱舞はそれでも一枚も当たることなく私が居た場所にぶち当たる。そうその場所に私はいない。

「それで何の御用ですか」

私はホークスの後ろに居て、人差し指を後頭部に突きつけているから。

「降参」

ヤレヤレと両手を上げながら職場体験時の気の抜けた顔に戻るホークス。

「やっぱり貴方がヒーロー業界の裏方ですか」

多分いるだろうなと思った存在。

ヒーローというブランドとこの国の治安を守る、ヒーローにしてヒーローではない存在。

かつての私のような権力者の駒。

「ま、君の前世なら推察できるよね。」

うん予想通りの存在だよ。主な仕事は後ろ黒い、表沙汰にできないことだよ」

「罪を犯したヒーローの処分などですか？」

「ま、そんなトコ。ヒーローという存在は治安の要、国民からの信頼が揺らいじゃいけないからね」

でしょうね。

政治家や警察官の不祥事が取り沙汰にされる中、ヒーローがそんなことはあまりない。

それはそういった件を相手ごと物理的にもみ消しているからか。

「君への要件は、実力の調査に勧誘ともう一つなんだけど。うん俺じゃ勝てないや」

パワー押しには割と無力。

職場体験時に自分で言っていた言葉通り、ホークスは私には勝てな

い。

まあ年齢的にまだまだ伸び代はありそうですね、この人も。

「実力は分かった、じゃあ緑谷来久君。」

俺と一緒にヒーロー公安委員会でこの国を守らないかい？」

「裏方で手を汚すなんて一度やればたくさんです」

うんざりした気分です。返します。

何よりボスとトップヒーローになるのにそんなことやってられませんか。

「だよ、上司もそう言うだろって予想してた」

予想してたにも関わらず勧誘したのはそれだけ人材が欲しいからですかね。

「それでもう一つは？」

随分あっさり引きましたが、取引や脅迫で食い下がらないのは意外ですね。そうされたらこちらも手段は選ばないつもりですが。

「こっちは取引なんだけど、六式と覇気を広めないんで欲しいんだ」

「六式と覇気をですか？」

「うん、特に外国に」

「それは別にかまいませんが、雄英高校には留学生もいましたよね？」
麟君とか角取さんとか。

「ソレくらいなら平気。まあ要するに個性を跳ね上げるその技術を日本で独占したいのさ」

所属ヒーローの強さが軍事力なこの世界、他国に優位に立つための方針ですか。

「ですが覇気は教えて必ずできるモノではないですし、六式自体はある程度の実力あるヒーローなら多分再現できますよ」

特に六式はこの世界の科学技術ならサポートアイテムでも再現できそうなんですよね。

「それでも体得した利点は計り知れないだろ？」

まあそうですね。

悪魔の実と六式の組み合わせのように、個性と六式の組み合わせも強力でしようし。

「ま、こっちは取引だから報酬もだすよ。」

場合によつては別口で学びたいしね」

公安に所属しなくてもヒーローとしてこの国に所属していれば利益になる。

その判断からの対応ですね。

「承知しました。今後は覇気と六式を教える場合はきちんとそちらに伝えて許可をとります」

「取引成立♪」

報酬は後日に改めて決めますか。

ホークスのその言葉でこの場の張り詰めた空気は四散しました。降参と言つても警戒してましたしねこの人。

この国の暗部なんてものに触れはしましたが、利益ある取引ですんだから良しとしましょう。

「ところでコレは個人的な興味なんだけどさ」

「興味ですか？」

「マジモンの秘密工作員だった君からしてヒーロー公安委員会がやってるこんな事をどう思った？ キャリアなら俺の先輩でしょ君」

前世の世界政府とこの国はそもそも規模に差があり過ぎなんです
が。

けど思ったことと言えば。

「力が弱すぎて、やることが半端。つて思います」

「俺が居るのに足りないかな？」

「貴方が裏切れば終わる程度の戦力でしょう？ぶっちゃけ雄英高校に襲撃してきた脳無を本部にブチ込んだら貴方が居ても壊滅しますよ」

ホークスは強い。

けどそれはどこまでいっても、人を救うヒーローとしての強さだ。

人の救い手になれる人材をなんで暴力の担い手にしようとするのかな？

「それは、」

「はつきり言つて脳無の製作者にしてヴィラン達の黒幕がヒーロー公安委員会を放置しているのは、敵にもならなくて眼中に無いからで

しよう。連中の脅威はオールマイトだけですよ」

「だから半端なんだね」

「戦力求めるなら最低でもエンデヴァーは囲うべきですね。ヒーローを裁くにしてもヒーローの監査組織に執行部隊を作るべきだ」

ヒーローのブランドを守るなら影でコソコソやらないで堂々とやれば良い。

実際に外国ではそこら辺シビアなのに。

「このやり方で上手くいったんだけどね」

「オールマイトがいてヴィランに放置されてるからでしょう」

マスコミに情報流されるだけで終わる現状を積み重ねてるだけじゃないですか。

「島一つを不都合だからと消せる組織であつても揺らぐことがあつた。そうじゃない貴方達はもつと真剣に考えて徹底すべきです」

「徹底か」

「世界を動かす黒幕気取るには脆弱過ぎなんですよ、ヒーロー公安委員会」

正直脳無なんてシロモノは国益のために国家主導で作るような存在なんですよ。個性研究に人体実験するのは当然でしょうに、個性婚なんて遺伝に喧嘩売ってるような無茶苦茶な理屈もあるし。

なんとというか個性差別やらは多い癖に、変なトコでモラルが高いですよねこの世界。

オールマイトというヒーローという存在と、一度個性で社会が崩壊したからですかね？

「上司に伝えてもいいかな？正直思うトコある意見だったよ」

考えながらそう言うホークスに私は構わないと伝えます。雄英高校のヴィラン襲撃がオールマイトの宿敵によるものならヒーロー公安委員会も今のままでは危ういですからね。

「フー」

ホークスが去った後にため息をつく。

やはり頭を使うのは苦手だ。

今後こんな話をする時は物間君にも同席してもらいましょう。

そうして職場体験の日々は過ぎました。

なおホークスと対話した次の日に兄さん達がヒーロー殺しと相対し騒動があったと知るのはこの少し後のことになります。

爆豪勝己視点

「うらあっ!!」

武装色の覇気の右手に纏いながら振りかぶる。

襲いかかる現最強の攻撃力を誇る個性ヘルフレイムの業火を散らし、ナンバー2ヒーローエンデヴァーに突っ込む。

「生意気な小僧だっ!!」

鼻っ柱をへし折るために呼ばれた職場体験。

実力を測るためという名目の元、国内トップの規模と設備のエンデヴァー事務所のその地下にある耐炎設備の整った訓練場にてエンデヴァーとぶつかり合っていた。俺の個性は炎相手ではそれほど意味はない。ゆえに先日の雄英体育祭にて感覚を掴んだ武装色の覇気を主軸に最強のヒーローが一角に挑む。

強者との戦闘は自ら望む所だ、自分がどこまでできるか知れるし、何より覇気を高めるために必要なことらしいからだ（来久は戦闘より暗殺ばかりでイマイチ実感できなかったそうだが）。

「こんなもんかよナンバー2っ!!銀メダリストの実力を見せてみろっ!!」

「貴様ア!! 出る杭は打たれるという現実をその身に叩き込んでやるっ!!」

「打たれて負けてんのは杭じゃなく地面だろうがっ!!」

出る杭は打たれるという言葉がある。だが杭自体が折れず曲がらず己を貫き通しているのならばそれは敗北ではない。

「それは現実を知らぬ戯言だっ!! ヒーローになれば嫌でも思い知らされるっ!!どれだけ実力があろうとも功績を上げようと、平和の象徴という大槌に打たれ、その他大勢のヒーローに落とし込まれるとなあっ!!」

ランキング上位ヒーローとて平和の象徴オールマイトの前には霞む、それが今のこの国の現状だ。

だが、

「俺が折れる理由にはならねえんだよっ!!」

ぶつかり合う拳、武装色の覇気を纏う拳に劣らないとは流石はエンデヴァー。凡百の増強系個性を上回る鍛え抜かれた肉体（武装色の覇気が視認できる程発現しなくともある程度影響してらしいが）、だからこそナンバー2なのだと言ったからこそ実感できる。

職場体験初日は簡単な業務説明後こぶつ倒れるまで鍛錬して終了した。

二日目、今日も鍛錬かと思ったら轟が俺は経営や運営の仕方を知りたがっているとエンデヴァーに言ってくれたため事務作業を学ぶことができた。見たところ学べばできなくはないようだがやはり手間がかかるな、ヒーローとして表に立つ以上は事務員を雇うべきか。今のうちに経営科と繋ぎを作る手もあるが、それは自分でできるようになってからだな。事務資格など雄英高校在学中に取得する資格を見直す必要がありそうだ。

エンデヴァーの話によると明日は遠出するようなので鍛錬は軽くボコられる程度ですんだ。

三日目、本日の目的地は保須市。

目的はヒーロー殺しの捕縛だ。

思想犯とされるヒーロー殺しはその行動に一定のルールがある。多くのヒーローがその分析に基づいて保須市に集結しているらしく、そのヒーロー達の行動も治安向上に繋がっているらしい。

丁度よいな、と思う。

来久の感覚によると飯田が返り討ちに合う復讐者みたいな気配だったとのことだから同じ市内に居るのは好都合だ。

一応その予測をエンデヴァーに告げれば、轟は無表情ながらも心配そうな反応をし、エンデヴァーはそんな奴を職場体験さすなよと露骨に顔に出ていたが。

「用意しておいて正解だったな」

そして駅に着いた時点でエンデヴァーから免許証のような物を渡される。

「一時的な個性戦闘許可証だ。貴様らはそこらのヒーローより戦える

からな」

基本はエンデヴァアの後ろにつくだけの予定だが、ヒーロー殺しが手段を選ばない手合だった場合は戦えた方が良く、そのために用意したとのことだ。すぐに国から許可が出るのは俺がエンデヴァアであるからだと、息子に見せつけるように胸を張ったが息子は当たり前のように無反応。

「そしてダイナゴッド、現場は組手とは違うことを教えてやろう」
「そいつはどうも」

こちらには威圧してくるが現場での立ち回りは見てみたいとこだ。準備も整い、いざパトロールを開始しようとした所で遠くから爆音が響いた。

事件発生、ならば駆けつけるべきだと走り出そうとした所で携帯からメールの着信。こんなときに来久の食レポだったら後でしばらく思い開けば、デクから位置情報のみの一括送信。

「エンデヴァアーツ!!」

「どうしたダイナゴッドツ!!」

「ヒーロー殺しの可能性ありの位置情報っ!場所は路地裏、恐らくヒーローと学生二人が交戦中っ!!」

「ならば貴様らが行けっ!!基本は保護後退避っ!!俺は先ずあちらを優先するっ!!」

「交戦はっ?!」

「俺とあれだけやれて、ヒーロー殺しなんぞに遅れをとるなよ。刃物使用の可能性が高いため特殊警棒の使用も許可するっ!!」

「了解っ!!」

エンデヴァアの許可を得て既に走り出していた轟に並ぶ。

「凄えな爆豪」

「何がだ?」

「あれだけの情報でこんなに動けて」

「お前もできたら、俺が先にやっただけだ。状況はヤバいぞ、ヒーローは動けねえか死体、飯田と何故かデクまでいやがる」

「一号ならなんとか出来るか?」

「来久がどこまで仕込んだかにもよるが、発動型個性の身体能力に劣るヤツよりはマシだ」

ちよくちよく来久による無理難題をこなしているようだが、六式などは一度挫折したから敬遠してた筈だ。あの発現した制御不安な謎個性でどこまでやれるか。

「急ぐぞ」

「ああ」

不慣れな見聞色の覇気を発動させつつ轟と共に現場へと走り出した。

最悪だ。

いやまだマシではあるな。

ヒーローも飯田も倒れ伏しはしていても意識はあり、デクも四つん這いな態勢で動けない。負傷しているが生きているなら最悪じゃない。

「次から次へと、今日はよく邪魔が入る」

「テメエの存在そのものが日常生活の最大の邪魔だろうが」

轟の炎に反応し、動けない飯田から飛び退く男。マフラーが特徴的な怪しい風体の刃物使い、コイツがヒーロー殺しか。

「轟は動けない連中を逃がせ、足止めは俺がやる」

柄頭に手榴弾を取り付けた特殊警棒を構える。

結局発目に任せる破目になったコレの性能はサポート科担当であるパワーローダーのお墨付き。

「轟君、かつちゃん、そいつに血イ見せちゃ駄目だ！多分経口摂取で相手の自由を奪う！」

「それで刃物か、俺なら距離保ったまま」

「ボケ」

迂闊な発言をする轟の言葉を、投げナイフを特殊警棒で弾きながら遮る。

「そんなことが有利に働く相手がここまで被害をだせるかよ」

投げナイフと同時に接近、振られる刃こぼれのひどい刀を鍔迫りで

防ぐ。

「貴様はこの中で一番やるな」

「個性頼りじゃないヴィランは少数って話だったんだかな」

身のこなしが尋常じゃないな。

刀の腕から轟の氷じゃ壁にならんし、投げナイフを防げる装備の奴もいない。

俺以外頭を狙われたら終わりなら、刀の間合いでの近接戦闘が最善だ。

「何故だ、三人ともやめてくれよ。兄さんの名を継いだんだ、僕がやらなきゃ、そいつはボクが」

「だったら迷子の手を引けよ」

やっぱり復讐目的か。

身内やられたら仕方ないが、それでもよ。

「お前が尊敬するインゲニウムはそんなヒーローなんだろう？」

自慢げに誇らしげに語った自慢の兄。

それをお前自身が歪めちゃ駄目なんだよ。

「お前も良いな」

「テメエが駄目だろ」

元凶が戯言ほごくな。

「貴様は雄英体育祭で魅せた学生だったな。ならば問おう、何を持ってヒーローとなりナンバー1になろうとする」

刀と警棒を打ち合いながらの会話、援護として放たれる轟の氷は捕らえることが出来ずヒーロー殺しと俺の足場となる。

「そうじゃないと救えない奴がいるからだ。俺が前にいないと途方にくれるポンコツがな」

だから俺は走り続ける。

あの日手を伸ばしたその時から。

「お前は良い、その二人も合格だ。」

だがそのヒーローとインゲニウムは私欲を優先させる贗物でしかない、英雄を歪ませる社会のガンだ。誰かが正さねばならないんだ」

「時代錯誤の原理主義だ、人殺しの理屈に耳貸すな」

「端から聞く気なんざねえよ。コイツは好みでヒーローを選別する人殺しに過ぎねえ」

ヒーロー殺しについては流れてる限りの情報は調べた。確かに犯罪率の低下という結果、殺害されたヒーローの中には問題行動をとっていた奴もいた。

けどな、

「まだ道半ばだったんだ」

そんなヒーロー達だってまだこれからだったんだ。これからどんな風になるかなんて誰にもわかりはしないのだから。

「その場の印象で、未来を奪うなクソ野郎」

「社会は今正さねばならない」

通じねえよなコイツにはよ。

人は変われると知る俺に、ヒーロー殺しは許容できない存在だった。

後ろで動けそうなデクを確認しながら、俺は再度警棒を構えた。

爆豪勝己視点

「ふー、なんかあったな」

エンデヴァー事務所で職場体験中に緑谷出久ことデクにメールを送られ、向かった先にてヒーロー殺しの個性により動けないヒーローと飯田とデクを庇いながら戦うことしばらく、なんとか全員怪我はしても無事生きて切り抜けることができた。

戦いの最中にヒーロー殺しの個性の効果が切れて動けるようになったデクが雄英体育祭よりもキレがよくなった動きでヒーロー殺しに攻撃し、俺がソレをサポートする形で立ち回った。厄介な個性はデクが得意の分析で発動条件を見極め、俺が斬撃を防ぐように動いた。

とはいえ流石はヒーロー殺しというべきか、狂気に塗れた信念により鍛え抜かれ、実戦にて研ぎ澄まされた体捌きは尋常ではなく危うく斬られそうになってしまった。だが再起した飯田と轟のサポートによるレシプロバーストが大太刀を蹴り折り助けられることになった。主武器を失ったヒーロー殺しをデクと飯田が全力で打ち倒し決着したのだ。

「さすがゴミ置き場、縛れるもんあってよかったな」

「携帯できる捕縛具もコスチュームに用意しとくべきかもな」

個性での捕縛も限界あるしな。

「悪かったプロの俺が完全に足手まといだった」

「いえ一対一でヒーロー殺しの個性だともう仕方ないと思います、強過ぎる」

有名なヴィランに有りがちな個性バレも無かったから余計にな。襲われたヒーローはヒーロー殺しに予め調べられて対策されていただろうし。

「爆豪がいたから圧倒できたただけだな。そのおかげで個性の復活時間を稼げて、コイツを焦らすことができたんだろう」

「極まった刃物使いはヤバいと、来久に念入りに言われてたからな」

前世だと建物や船どころか、海や空を断ち切る連中が何人もいたかららしいが。

路地裏からであればデクが職場体験先らしいヒーローに顔を蹴られ説教され、エンゲヴァーから応援要請を受けたヒーロー達がこっちの対処をしてくれた。

(贖物ね)

ヒーロー殺しの言葉が頭をよぎる。

それは聞けば一理ある考えかも知れない。

だが飯田の兄であるインゲニウム、自分が殺される寸前なのにひたすら逃げろと叫ぶヒーロー、そして心配そうに駆け寄るこのヒーロー達のこの姿の何が贖物なのだろうか。

「出久君、僕のせいで傷を負わせた本当にすまなかった。爆豪君に轟君にしても命懸けで助けてくれた。」

僕は、何も、見えなく、なってしまうていた」

涙をこぼしながらの飯田の言葉。それは後悔にあふれた申し訳無さの詰まったものだった。デクも友だちなのに止めきれなかったことを謝り、轟がしっかりと告げる。

「ヴィラン被害者の身内がヒーローにヴィランの殺害を求めるのはよくあることだ。身内が被害を受けるってのはそれだけのことなんだろう」

そう飯田に限らない。恐らくヒーロー殺し被害者の遺族は全員復讐を望んでいる。

「恥じんな、人として当たり前前の感情だ。」

けれど吞まれんな、ヒーローってのはそんな思いも抱えて理不尽に立ち向かわないといけねえんだ」

そうヴィランは討伐できるモンスターなどではないのだ。生かして捕縛する、その行為を葛藤しながらやるようにいずれなるのだろう。

時間にすればほんの5分そこらだったのに、ずいぶん長く戦ったように感じたな。

「伏せろー！」

アレは雄英高校襲撃事件で見た。

「敵！エンデヴァーさんは何をっ」

肉体が一部損傷している、翼あるからと逃しやがったなああの燃え親父。

っ！か手足をヒーロー殺しに斬られたデクが反応できてねえ。

マズイ!!

爆破と月歩を併用し飛ばうとしたところで、背後から狂気を感じ振り向く。そこには拘束から抜け出しヒーローの頬を舐めるヒーロー殺しがいた。

「偽物が蔓延るこの社会も、徒に力を振りまく犯罪者も肅清対象だ。全ては正しき社会のために」

個性を発動し動きを止めた翼脳みそに飛びかかりナイフを振り下ろし仕留める。そして傍らにはデクを抱えることすらしている。なんだだよ、アンタは人助けだってできるのに。

ヒーロー殺しの姿に呆気にとられたが、すぐさま拘束し直そうと身構える。

「何故一カタマリでつつ立っている！そっちに一人逃げたハズだが！」

「エンデヴァーさん!!」

向こうのケリはついて、逃げたコイツが最後か。

「してあの男はまさか、ヒーロー殺し！」

気づいて炎を構えるエンデヴァー。

たく、デクが巻き込まれんだろうがよ。

纏めて焼かれる前に助けねえと。

「エンデヴァー、贗物」

だがエンデヴァーの姿を確認したヒーロー殺しが、息も絶え絶えの中吠える。

「正さねば、誰かが血に染まらねば、英雄を取り戻さねば!!」

その言葉と気迫にその場の全員が吞まれ、圧倒されて動けなくなる。

だが、

「来い、来てみる贗物ども。」

俺を殺していいのはオールマイトだけだ!!」

その言葉に俺はキレた。

「っけんな。」

ざっけんなよっ!クソ殺人鬼!

オールマイトなら殺していい?

ヒーローは誰一人、テメエを殺そうなんてしてねえだろうが!」

ヒーロー殺しの言葉には理念がある、一理感じてしまうような熱さがある。

けれど認められない。

別の理不尽な暴力に満ちた世界を知る俺は、コイツの理念を認められない。

「今の社会は、暴力を持って生まれても誰かを助けようとする社会だ!ヒーローになることを肯定してくれる社会だ!誰もが誰かを助けることが当たり前な社会だ!」

来久の前世ではこうはならない。暴力があれば大概自らのためだけに振るうだろう。

「どんな理由であろうとも、どんな理由でなろうとも頑張っつてヒーローになって人助けしてる連中を否定すんじゃねえ!!」

差別や迫害など尽きぬ問題も抱えてはいる。

でも、この今の世界は優しいのだ。

オールマイトのように誰かを助けたいと当たり前に思えるこの社会は。

ヒーロー殺しだつて、その根底は誰かのためだというのに。

「気を失っている?」

俺の叫びが聞こえたかは知らない。

だが振り上げた拳をヒーロー殺しの顔面に当たる寸前で止める。

「なんでここまでできるのに、こんなやり方をしたんだよアンタは」
許せない存在。

認めてはならない存在。

それでもその信念を別の形で使っつて欲しかったと、思わずにはいら

れなかった。

保須市ヒーロー殺及びヴィラン集団による破壊活動事件。これは世界を揺るがすきつかけとなる。

そしてダイナゴッドこと爆豪勝己の知名度が世界レベルになるということを、この時の俺は知る由もなかったのであった。

緑谷出久視点

事件から一夜明け、保須総合病院。

職場体験移動中から脳みそヴィランによる電車の襲撃からヒーロー殺しとの戦い。

ヒーロー殺しの凶刃で負傷した僕と飯田君は数日間入院することとなっていた。

短期間の職場体験がさらに短くなることを残念に思うけど、飯田君を助けられたこととヒーロー殺しとの戦いの経験は良かったことなのだろうと思う。

ちなみに僕の連絡で駆けつけてくれた轟君とかっちゃんはこの場には居ない。二人ともあんな戦いをしたにも関わらず無傷だったためだ。

(差を感じるな)

あの戦いを思い出すとそう感じてしまう。

かっちゃんは僕にとってもヒーローだった。

誰よりも近くにいた、誰よりも凄い存在。

オールマイトからワンフォーオールを受け継ぐまではそこまで気にならなかった。

無個性であったことが、勝てなくて当たり前だと思えたからだ。

けど受け継いでしまった今ではそう割り切れない。

同じ土俵に上がったからこそ、積み重ねた差を理解できてしまうのだ。

来久はいい。

来久は根本的に違うステージに立っている、違うステージにいる場違いな存在が理由があってこちらにいるような感じだから気にならない。

本質的にヒーローではないのだから。

けどかっちゃんは違う。

あの時同じ存在に憧れて、同じ夢を見た、そんな存在だったのだ。

今では遙か先にいるけれど。

(しかし鍛えようにも六式に覇気はね)

来久の話によると今は無理だそうだ。

悪魔の実という存在と六式に覇気は上手く噛み合うから個性も同じだろうけど、肝心のワンフォーオールが来久の見立てでなんかガチャガチャしてるらしい。ガチャガチャって何さと聞いたけど、ワンフォーオールの中で会議したり言い争いしてるっぽい気配がするとか。いや怖いんだけどどうなってんだ。

ワンフォーオールがこんな調子なら自分を信じる覇気は難しいし、六式はどうやら身体能力強化個性とは相性が悪いみたいなんだ。

六式は技そのものよりも、六式を出来る身体能力を身につけることに意味があるそうだ。

技も有用だけど、そもそも身体能力が高ければ六式みたいなことはできるからだ。

だから個性で身体能力を上げてしまえば、コツを掴めば六式はできる筈だそうだ。

いや鉄塊は流石に無理だよと思ったんだけど、なんかオールマイトやってみたら出来てたんだよね(その後血を吐いたけど)。

どうすれば強くなれるかな。

既にかつちゃんとか来久は卒業後のヒーロー活動を見据えて準備に入っている。

雄英高校で強くなろうとすること自体が周回遅れってくらい差がついているのだけど、それでも一番足りなくて成長の余地が一番あるのは強さだ。

ヒーロー殺しに手も足も出なく言葉に吞まれた僕と、ヒーロー殺しに立ち向かえて臆さず反論できた彼。先ずはその差を認識して、自分のいる位置を見定めることから始めようと思う。

同じように感じた飯田君と雑談していると。

「おおオ、起きとるな怪我人共ー!」

「グラントリノ!」

グラントリノが飯田君の職場体験先であるマニュアルさんと見知

らぬ誰かを連れてきた。

「お前にはすごいグチグチ言いたいが、その前に来客だぜ。保須警察署署長の面構犬嗣さんだ」

「掛けたままで結構だワン。」

君達が爆豪勝己君と轟焦凍君と共にヒーロー殺しを仕留めた雄英生徒だワンね」

ワン、て語尾はキャラ作りかな？

やや気になることがあるけど、わざわざ警察署署長が病室まで足を運んだのは僕達がそれだけのことをしたからだ。あえて個性を武に用いないことにした警察、それでは防げない被害を止めるために台頭したヒーロー。そしてそれが認められているのは先人たちがモラルやルールを遵守してきたからだ。個性が使いたいからヒーローを目指す者も少なくない数がいるが、それがどれだけのことか理解すべきなのだ。

そう、ヒーロー殺し相手とはいえ個性で相手を傷つけてしまったことを。

規則違反、ゆえにマニュアルとグラントリノと僕達二人は罰を受けなければならぬ。

保須に来てエンデヴァーから戦闘許可をされたかつちゃんと言君とは違って。

項垂れる僕達を見て、それでもと署長さんは話を続ける。

「警察としての意見は以上だが、処罰云々はあくまで公表すればの話だワン」

そうこの状況で僕達二人の目撃者は限られている。だからこの違反は握り潰せるそうなのだ。

そう飯田君がヒーロー殺しからネイティブを庇って、僕がかつちゃん達が駆けつけるまで時間を稼いだ事実も無かったことにすれば。

世間に知られればこんな僕だって多くの人に称賛されるかも知れない。けどそもそもそんなことのために戦ったわけじゃない。飯田君が助かった、それで良い。

称賛だって充分だ、だってわざわざ会いに来てくれて英断と功績だ

と伝えてくれる人もいるのだから。

飯田君もその言葉を受け入れてマニュアルに頭を下げる、それを彼は注意して許してくれる。

「共に平和を守る人間としてありがとう」

きっとその本心からの言葉こそが何よりも大きな報酬なんだろう、僕はそう思えたんだ。

「そういえばかつちゃ、爆豪勝己君はどうなりましたか？」

僕達は公表されない、ではかつちゃん達はどうなるのだろう。エンデヴァーを功労者にして擁立するなら彼らもいかに戦闘許可はされても表沙汰にはされない筈だけど。

「まあすぐ知るようになるだろうがワン。」

彼、爆豪勝己君は現在とても大変なことになっているのだワン」

そう、世間は今大変な騒ぎとなっていた。

ただでさえ有名なヒーロー殺し。その逮捕だけでも大変な騒ぎなのに調査から明らかになる彼の素性に思想に余罪。

そしてその逮捕を成し遂げた若きヒーロー。

その場の誰も彼も、あのナンバー2ヒーローエンデヴァーすら呑まれた気迫に唯一人立ち向かい叫びを上げた少年。

ダイナゴッド 爆豪勝己。

雄英高校一年主席にして雄英体育祭一位の実績を持つ彼は、超新星として世間にその名を知らしめたのであった。

なんでもあの時の場面が一般の人に録画されていて動画として投稿されてしまったらしい。

中にはヒーロー殺しの言葉だけピックアップされたりもしてるけど、かつちゃんの言葉に救われている人も多いそうだ（特にヒーロー殺し被害者ヒーローの遺族の方とか）

ヒーロー殺しの生き様は感染、影響する危険性があるようだけど、今のヒーロー達を肯定するかつちゃんの言葉もまた広まっているらしい。

エンデヴァーが自分の手柄にすることを断固拒否したため、ヒーロー殺し捕縛の名声に榮譽そして莫大な報奨金がかつちゃんに渡さ

れることになる（ちなみに轟君も拒否、僕達同様何もしてない扱いになつた）

偉大なヒーローは学生時代から伝説を作るといふ。

雄英高校在籍一年目の職場体験中に、オールマイト以降単独犯罪者では最多の殺人数を持つヴィランを捕縛する。そんなとんでもない伝説を彼は創り出したのであつた。

「ふっ」

幼馴染のそんな姿を想像し僕は現実逃避気味に思うのであつた。

あの時授業で『大爆殺神ダイナマイト』を強引に改名して本つつつつ当に良かったと。

第34話

職場体験に行ったらボスが世界レベルの超新星になった件について。

公安からの情報だよとホークスから伝えられたが、とりあえず全員無事であることにホツとした。

ヒーロー殺し ステイン。

公安も行方を追っていた危険人物なのだが、手練であるがゆえに公安の存在が露見する恐れがあり大々的には動けなかったそうさ。さらにその存在も公安には都合が良かったからでもあるらしい。人命より国益、国家機関としては正しいが自分は関わりたくはないなど改めて思った。

またステインを捕縛した者がボス、爆豪勝己であることからヒーロー公安委員会は完全に私の勧誘を諦めるらしい。公安委員長からヒーローとしての活躍を期待するとのことだ。

未成年で無資格なボスではあるが、エンデヴァーから戦闘許可はおりにいたため法的な問題はない。報奨金にメディア対策については雄英高校との話し合いをしてから決めるそうさ。

そうして職場体験の日々は過ぎていった。

ホークスに対して自分達が伝書鳩扱いに感じた常闇君は最初は不満を持っていたようにだけど、空の飛び方を習ってからは視野が広がったのか彼を師として尊敬するようになっていた。

最後に大量のお土産を渡されて職場体験は終了となった。かつての自分と同じ境遇の彼に思うところはある、けれどかつての自分とは違い彼は救いとなる存在がいて、務めも自ら意思で行い、夢まである。なら彼は大丈夫だ、そう思うことができた。

彼は駒ではなくヒーローなのだから。

そして雄英高校。

昨晚のうちにボスに辛子明太子と辛子蓮根セットを渡し、兄さんに

は九州限定オールマイイトストラップセット（狂喜乱舞して怖かった）を渡した翌日。

クラスメート達にも常闇君と九州土産を配りながらそれぞれの体験を聞いてみる。

訓練にパトロールだけの子もいるが、敵退治を経験した子達もチラホラいた。八百万さんなんかコマージュシャルデビューしているし。あと峰田君は何見たの？

けれど一番の話題はやはりヒーロー殺しの一件だ、幸いリカバリーガール（ついでに物間君）により兄さんと飯田君は無事治り包帯すら巻いていない。

所用ありボスはまだいないが、皆兄さん達を心配してくれてたみたいだ。

ヒーロー殺しか、私には正直どうでもよい存在だ。王政かつ貴族蔓延り、天竜人まで存在した前世にて思想一つで皆殺しにされるなど日常茶飯事。故に執念あろうと一本気あろうと単なる人殺しの犯罪者だ。ましてや前世の海軍大将である紅竜なんて海賊に背を向けた部下を皆殺しにする過激派でしたし。

そんな話をしているところでボスが教室に入ってきました。

職場体験にて世界レベルになったヒーローの登場にクラス内はわっと盛り上がりますが、昨晚もそうでしたがボスの表情はよくありません。

「どうかしたの爆豪ちゃん？」

皆を代表して梅雨ちゃんが尋ねます。

「ああ、クラスの空気を悪くしてすまねえな。チト思うトコあってな」
再会を喜ぶ皆を心配させたことを詫びてからボスは答えます。

なんでも雄英高校を通して（被害者には雄英高校卒業生もいたため）ヒーロー殺し被害者遺族の方と校長先生立ち会いの元で面会したそうです。

当然感謝されたそうです、礼を言われたそうです。

ただその時に遺族の方達が辛かったことも伝えられたんだそうです。

世間の風潮にヒーロー殺し称賛と肯定の声が生まれていました。それにより粛清されたヒーロー達は殺されて当然なヒーローだったと少なからず言われだしていたそうです。それがひたすらに辛かった、家族は努力してヒーローになったのにそれはあんまりじゃないかと思っただけです。実際に違法行為に手を染めていたヒーローもいて、それにより被害者遺族の方達は被害者なのに責められるようにならなかったそうです。

ボスがヒーロー殺しを捕らえて、さらに反論してくれたことが遺族の方達は嬉しかったと告げてくれたそうです。

「あのクソ野郎に一理あると思っっちゃまった自分が腹立たしいわ」

ボスの不快そうな言葉がクラス内に響きます。

カッコいいと言ってしまった上鳴君は飯田君に謝った時より気不味そうです。

「仕方ないですよ」

ですが私は思います。

「ああいった理想の中で生きる輩の中に他者の存在はありませんから」

犯罪者と一線を画す本物のヴィラン^{人でなし}。

「誰よりも理解を求めていたくせに、誰よりも他者の感情に同調できないのは皮肉過ぎですがね」

こちらの世界では異端で特別で目立つ存在ではありませんが、前世には割と居たんですよねそんな存在。

だからヒーロー殺しの存在が私には響かないのでしょうか。

ボスと私の言葉に皆がそれぞれ思い悩みます。

正答がある問題ではありません、悩み続け思考することが大切なのでしょうか。

ちなみにボスが報奨金を遺族の方達に寄付しようとしたら断られたそうです。なんでもそれはボスがヒーロー事務所を開く資金にして欲しいそうです。

雄英高校卒業後の事務所開業資金稼ぎの期間が大幅に短縮されてしまいましたね。

もとより父を通じた私のデザイン料を当てる予定でしたが、これは予定していた卒業後の渡米して稼ぐ必要がなくなりそうです。

その後の授業にてオールマイトによる救助訓練を行ったり（兄さんが大分動けるようになってました）。

峰田君が更衣室にて覗きをしようとして肅清されたり（そもそもなんで隣室なんですかね？女子生徒増えたから分けたのでしょうか？）。

兄さん共々オールマイトからワンフォーオール秘密について説明されて倒すべき巨悪の存在が明らかになったり（まだ何か隠してそうですね）。

相澤先生から、夏休みに林間合宿の説明を受けたりしました（峰田君はそろそろ矯正すべきかと、というかマウントレディの一件からの立ち直りが早いです）。

期末テストですか、頑張らないいけませんね。

ちなみに物間君にヒーロー公安委員会の裏事情を相談したら何故か白目をむいて泡吹いて気絶しました。彼も職場体験でリカバリーガールと共に日本中を回ったから疲れていたのでしょうか。

第35話

時は流れ六月最終週。

期末テストまで残すところ一週間を切っていた。

「全く勉強してねー!」

体育祭やら職場体験やらで全く勉強してねー!」

「確かに」

いや両方とももう大分前ですよね?

相澤先生が珍しく事前に注意してくれてたじゃないですか。というかクラス順位が表示されてるように見えるのは幻覚ですかね?」

「演習試験があるのが辛えとこだよな」

峰田君がクラスで上位の成績なのは意外ですね。底辺二人の同族認識を軽やかに裏切ってます。

「お前みたいな奴はバカではじめて愛嬌がでるんだろが、どこに需要あんだよ!」

「世界かな」

いわゆるバカわいいですね。

しかし、

「峰田君は世界から需要あっても、女性からの需要はないんですね」

これは正に衝撃の事実。

「なんで真理に気づいたって顔でエグいこと言つとるんやろ」

「弟が言葉で峰田君を殺しにきてるよ」

つい本音が。

私の言葉に崩れ落ちる峰田君とそれを見て私に親指たてるドベ二人。

さらに成績トップ勢が悪意なき追い打ちをかけて上鳴君のマインドをゴリゴリ削ります。

「お二人とも座学なら私お力添え出来るかもしれませんが、演習のほうはからつきしでしょうけど」

なんとというか八百万さんは実技での自信を喪失気味ですね。個性

だけで充分強いのですが、A組はフィジカルモンスターばかりで何気に土壇場には強い面子ばかりですから比較してしまうのでしょうか。「まあ爆豪みたく日頃から勉強してれば焦ることもないんだろうけどな」

「ん？」

「いつものように本を開いているボスを見たら、その手にあったものは、」

「辛子明太子お取り寄せカタログ？」

「って勉強じゃないんかいっ！」

「珍しいなオイっ！」

「来久達の土産が旨くてな、流石本場。」

近所の店のやつじや満足できねえから取り寄せようと思ってな」

「ホークスのおすすめの逸品でしたよ」

「喜んでもらえて嬉しい限りだ」

あれからたびたび連絡をとってるホークスに頼みますかね？私を先輩と呼ぶのは止めてほしいですけど。 工員歴は長いけど（20年程度） 公安とは無関係でしょうに。

「お二人じゃないけど、ウチもいいかな？」

「わりイ俺も！古文わかる？」

「おれも」

瀬呂君はやばめですけど耳郎さんと尾白君は峰田君より上じゃないですか？

「良いデストモ!!（わーい）」

まあ落ち込み気味な八百万さんが嬉しそうなら良いですよな。

「なあ爆豪俺に勉強教えてくんね？」

「悪い時間がねえ、今週もヒーロー殺しの件での取材やら面談で忙しくてな」

ヒーロー殺しの件はまだ冷めてませんからね。ボスもこれも経験だどできる限り応じてますし。通っていた小中学校での演説は流石に断ってましたが。

「ところで緑谷二号は？」

「おいおい芦戸聞いてやるなよ、コイツは強いだけのポンコツだぜ？」
勝ち誇った顔のドベデュオですが私成績は。

「クラス同着一位ですけど」

ボスと八百万さんと私の三人ですね。

「なんでだよっ!!」

「自分に当てはめて応用するのがダメなだけなんですって。記憶術は
作業員には必須だったんですよ（出来なきゃ処分）」

昼、食堂での食事も大所帯になってきましたね。体育祭から轟君も
一緒です。

「普通科目は授業範囲内からでまだなんとかなるけど、演習試験が内
容不透明で怖いね」

「突飛なことはしないとと思うがなあ」

「普通科目はなんとかなるんやな」

兄さん学力方面では普通にとんでもないですよね、というかまた力
ツ井。

「一学期でやったことの総合的内容」

「とだけしか教えてくれないんだもの相澤先生」

「戦闘訓練と救助訓練、あとはほぼ基礎トレだよね」

相澤先生相手なら何故か教えてくれるだけマシに思えますけどね。

「A組も食堂？」

そこへ通りかかった物間君が声をかけてきます。

「B組の物間君！」

「B組の中心人物で苦労してる人」

「最近保健室で手伝いしてる」

「他の先生方のもだろ」

体育祭に参加せずとも知名度高いですね。

「というかお昼お粥？」

「それで足りるの？」

「胃が受け付けなくてね、どっかの誰かさんのせいで」

「なんと！物間君にそんな負担をかけるとは、この私が成敗してくれ

る！」

「君（お前）だよ」

実は薄々気づいてました。

近くの席で食事をはじめた物間君と近くにいた拳藤さんも混じえて会話を続けます。

ちなみに私の昼食の三段おひつには最早誰もツツコミません。

「さつき期末の演習試験が不透明とか言ってたね」

「粥ウマ」

なんか放心気味に白粥を啜る物間君がいますが、拳藤さんが先程の話題に触れます。

「入試ん時みたいなの対ロボットの实战演習らしいよ」

「え、本当!?!何で知っているの!!?」

「私先輩に知り合いいるからさ聞いた。ちよつとズルだけど」

この多忙な短期間で他学年と知り合い作るのも、中学時代の知り合いと連絡とるのもズルではないと思いますが。

そこで兄さんがいつものブツブツやってドン引かれていますけど、兄さんのコミュニケーション力では難しいかと。

「それはどうだろうね?」

ロボなら問題無いなど皆の気が緩んだと所で物間君が注意します。

「僕とかの特別扱いから分かるように雄英高校はかなり生徒を見る。生徒達が勝ち確定なロボットなんて今更試験にだすかな?」

ロボット相手なら個性的に難しそうな葉隠さんですら多分なんとかなりますからね。

「ま、例年の実力基準の判断ならロボットもあり得るけどね」

一学期でロボット相手に完勝できるようになったら一人前、とかなら確かにあり得ますね。

「流石物間君、来久が頼りにするだけあるね!」

本当に頼りになるんですよ彼。

知識と発想と分析力がかなりのものです。

「ゴフツ、アレおかしいな何故か白粥が血の味になってるよ」

「トドメさすなよデク」

そして放課後、演習試験内容予測をクラスで共有したんですが。

「んだよロボならラクチンだぜー！（やったあ）」

一部には教えたら不味かったような。

ロボとか傷つけて問題ない相手には無双できますからね。

障子君も言いますが、この二人は特に強個性だけど調整苦手だから、轟君を見習うべきなのに。

「これで林間合宿はバッチリだ!!」

フラグかなあ？

放課後の私達との自主練にも参加してないから身体能力や経験も心配だし。

「あのな、お前らは特に知識量が出ることに直結してんだから少しは学んどけよ」

ボスから直々の忠告。

前々から勿体ないと評価してる二人ですからね。

芦戸さんなんかは八百万さんが個性を再現できるからより学んだ方が良いでしょうね（いや電気も創造できるかも？）

「大丈夫だって!!」

貴様らボスの忠告を無碍にするとは万死に値する。

「ケロ、しないわ来久ちゃん。でもこの油断が二人に返ってはきそうで心配だわ」

「でも学力テストでも心配な二人なんよね」

こうして試験までの日々は過ぎていきました。

色々不安な点がありますがこればかりは本人次第ですからね。

ですが、

相澤先生に呼び出されて告げられた事に、物間が言っていた雄英高校は生徒をよく見ているという言葉を実感することにあるのです。

第36話

八百万さん家（豪邸）での勉強会もあって大慌てしていた二人も無事学力試験を突破できました。赤点ではないぜ！という叫びに目標低いなど厳しめに思ってしまうのは私個人の理由も大きく影響していますね。

学力試験、とある理由もあつたとはいえ本当に大変でした。

そして演習試験。

既に試験内容を知っている私は、余裕しゃくしゃくな二人を正直哀れに思ってしまう。

そして始まる相澤先生の言葉に続いての根津校長による死刑宣告。というかそんなトコに入っていて7月なのに暑くないんでしょうか。

校長先生から告げられた内容は、

雄英高校襲撃、ヒーロー殺しの影響による敵活性のおそのれの可能性。

現状以上の対敵戦闘激化。

ロボとの戦闘訓練は実戦的ではない問題。

ゆえに対人戦闘、活動を見据えたより実戦に近い教えを重視。すなわち、

演習試験は、ロボ戦闘ではなく二人一組での教師との戦闘というわけです。私以外は。

組み合わせは、組む相手も対戦相手もいつかの授業のようにくじ引きではなく、動きの傾向や成績親密度等の諸々を踏まえた上で決めたもの。

即ち今回の試験は明確な課題があり、合格基準があるということ。試験を突破以上にソレを出来るかどうかか合否を決めますね。そのことに気づけたら良いのですが。

「二ていうか緑谷二号は演習試験ないのかよっつ!!」「二」
なんですよねえ。

試験一週間前に相澤先生から告げられたこと、それが私の演習試験

免除でした。

「必要ない実力があるからな。二号の戦闘能力ならこの試験どんな相手どんな組み合わせでも圧勝になって不合理だ」

いやミッドナイト先生ならなんとか、普通に嵐脚で勝てますね。

「それに意外だろうがコイツは優先すべき判断は完璧だ。自分の身を軽んじる欠点はあるが、それはどこぞのナンバー1も一緒だからな」
ギロリと相澤先生はどこぞのナンバー1ヒーローを睨みながら言います。

「外部ヒーローに依頼もしたが当てにしていたホークスが無理な以上やりようがない。ゆえに免除だ」

えー、でもー、と不公平だと不満気にクラスメート達がありますが。
「そのかわり筆記試験はお前らの5倍だ。公平に一週間前に範囲も告げた」

ピタリと止まります。

そう私は演習試験がない代わりに試験量と試験内容が皆の5倍でした。

「だから珍しく必死に勉強してたんだ」

「抱えてた問題集の山はそれか」

試験一週間前に範囲と量を5倍にされましたからね、必死にやらないと林間合宿不参加確定でした。

あんまりな内容に演習試験免除の不平感も無事に消し飛びいよいよ試験開始です。

イレイザーヘッド VS 轟・八百万

校長 VS 芦戸・上鳴

13号 VS 青山・麗日

プレゼント・マイク VS 口田・耳郎

エクトプラズム VS 蛙吹・常闇

ミッドナイト VS 瀬呂・峰田

スナイプ VS 葉隠・障子

セメントス VS 砂藤・切島

パワーローダー VS 飯田・尾白

そして、
オールマイト VS 爆豪・緑谷

「えっぐいですねコレ」

いやまじか、これまじか。

この組み合わせには正直ドン引きです。
強個性を打ち消せるイレイザーヘッド。
知力で絡め取る校長。

捕物に長けレーザーの効かない13号。

個性が上位互換なプレゼント・マイク。

対応力を数で潰せるエクトプラズム。

遠距離攻撃手段の無い二人にスナイプ。

個性が桁違いなセメントス。

二人の機動力を活かせないパワーローダー。

ミッドナイト相手には不利というわけではありませんが女性ながらに体術に秀でた彼女は普通に強いんですね。

兄さんとボスは重りつけたオールマイトになら勝ち目は充分ですが、オールマイトに対する意識の差が二人一組の戦闘において影響がでそうですね。

となるとこの試験は試合会場をよく見渡し上手く活用できるかどうか結果を決めそうです。

さてリカバリーガールとモニター室で観戦しながら見守るとしましようか。

見ることしばし、

『蛙吹・常闇チーム条件達成!』

『飯田・尾白チーム条件達成!』

『障子・葉隠チーム条件達成!』

この三チームは心配なかったですね。個性に相性に状況、それらを問題にしない精神力が備わった人格者ばかりですから。

その点が問題なのが口田君に八百万さん。

気弱な口田君はメンタルに問題ありますし(身体能力がクラスでも

上位だから突撃したらプレゼント・マイクならボコリ倒せるのに)、八百万さんは体育祭以降から自身喪失気味ですからね(職場体験でも敵捕縛などの実戦がなかったから余計に)。

パートナーである耳郎さんと轟君がどれだけ彼らを奮起させるかが肝ですね。

さて、結果はどうなるでしょうか。

第37話

爆豪・緑谷チーム。

「戦闘は避けるべきだと?」

「そうだよ、いくらハンデがあってもかっちゃんがオールマイトに勝つなんて」

「そうかよ、ならお前はそうしろ」

冷静に状況を判断しての意見。

だがそれを爆豪勝己は苛立たしげに振り払う。

今は多少ましになった間柄。

だが昔からの両者の関係はこんなものだった。

追い続ける緑谷と振り払う爆豪。

まるでお前には期待してないと示す、そんな関係。

「試験に合格する為に、僕は言っているんだよ。」

聞いてって、かっちゃん」

「だからそうしろと言っている」

「そうやって突き放すから、いつも会話にならないんじゃないか!」

「さて脅威が行くぞ!」

マトモに会話すら成り立たね両者に最強が迫る。

平和の象徴へと至った暴力の頂点が。

「試験だなんだと考えていると痛い目みるぞ。」

私は敵だヒーローよ。真心込めてかかってこい」

威圧感。

奇跡的な巡り合わせで親しくなった緑谷出久が知らないオールマイトがそこにいた。

「正面戦闘はマズイ逃げよう」

「ボケ、実力が上の相手から逃げる方が難易度高いわ。特にオールマイトは逃げる敵を捕らえる専門家だぞ」

気押された緑谷の提案を一蹴する爆豪。

自身のサイドキックとの関わりが彼に逃亡の困難さを刻みこんで

いた。

サイドキック曰く、同じ島にいる自分より弱い相手を逃がすことはありえない。

ましてや相手は平和の象徴。

彼から逃げおおせた敵はただその事実だけで社会の脅威と認定される。

ゆえに爆豪勝己は下がらない。

逃亡の行為が無駄であると理解しているから。

そしてそれ以外にも彼には下がらない理由がある。

突っ込むオールマイトに出鼻をくじくための閃光弾をうつ。相手の勢いを殺してからの迎撃。だが百戦錬磨のオールマイトには視覚のごときでは影響はない。瞬時に立ち直り殴りかかる。

「やるね爆豪少年」

武装色の覇気を纏いながら拳を振るう爆豪を見ながらさらにオールマイトは声をかける。

「君はどうするんだ緑谷少年？」

「チームを置いて逃げるのかい？」

咄嗟のフルカウルの発動。

だが足は前をむいていない。

ヒーロー殺しを威圧感から連想してしまった緑谷出久は前に踏み出すことができない。

そのせいで逃げる動きが進む爆豪の邪魔をする。

「チッ」

鬱陶しいと言わんばかり舌打ちは緑谷にも届く。悪態以上に向けられた邪魔なものを見る目。

それが何よりも緑谷出久を打ちのめしていた。

「だから正面からぶつかって勝てるはずないだろ！」

「なら逃げるよ。逃げて試験とやらに合格しとけ」

意識をこちらに向けようとする緑谷にそれでも爆豪は取り合わない。

彼は悟っていた。

コレを試験突破だけを目標にしているヤツと組んでも無意味だと。「オールマイトレベルの敵がいんだぞ。」

俺が逃げたら、誰が立ち向かうんだ」

コレを試験だと割り切るのは容易い。

それを勝利の為に活かすのは賢い。

だが現実ならばどうだ。

眼前のオールマイト級の脅威を放置することがどれだけの悲劇に繋がるかなど今更語るまでもない。

「世界の敵全てが、今のオールマイト以下な訳ねえだろが」

本来ならば、平和の象徴が当たり前の彼ら世代なら想像もしない強者の存在。

それを誰よりも知る爆豪勝己はその可能性を否定できない。

ゆえに、

「今のオールマイトをぶっ倒せねえヤツはナンバー1ヒーローになんかなれねえんだよっ!!」

爆豪勝己は下がらない。

渾身の覇気と爆破を込めてオールマイトを遠方へと殴り飛ばす。

そしてその言葉に緑谷出久はようやく理解できた。

自身の絶対、オールマイトが倒れる可能性を。

そして思い出すヒーロー殺しとの後にオールマイトから知らされた宿敵たる巨悪の存在。オールマイトが半死半生になりながらも倒しきれなかった存在。それが今尚闇に潜み牙を研いでいる事実を。

オールマイトに個性を託されることは、オールマイトの後継になることは、オールマイトの続きであればよいのではない。

オールマイトの出来なかったことを成し遂げられる存在にならないといけないのだと。

その重みをようやく緑谷出久は理解した。

ワンフォーオールを託されずに頂きに至ろうとする幼馴染の姿を見て。

「行くこうかつちゃん、いやダイナゴッド。」

オールマイトを倒しに」

少年は今憧れに成るのではなく、憧れを超える覚悟を決めた。

「はっ、ようやくかよ。いくぞデク」

それは呼びやすい渾名としてのデクではない、ヒーローとしてのデクだった。

「でもさ聞いてもいい？なんでそこまで下がることを嫌がったのさ」

ヒーローとしてだけの理由ではないように思えたデクはそう尋ねた。戦略として有利な状況に持ち込むことはヒーローとしても間違いないからだ。

「俺はヒーロー殺しを否定した、あの野郎の理想を否定した」

既に世界的に有名なヒーロー殺しステインとダイナゴツドの対話。

「だから俺はあの野郎の理想、オールマイイトだけには退けねえんだよ」

否定したなら証明しなければならぬ。

オールマイイトに打ち勝つことで。

だがタイムリミットは近い、それができない可能性はどうしてもある。

だからこそ今は、それができる機会は逃せない。

絶対に認められないヒーロー殺しの正しさを受け入れないためにも。

「差を感じるよ本当にね」

その言葉にデクは感嘆したかのようにため息をついた。

「お前はヘドロヴィランに突っ込んだ時からぶれんな、アレがヒーローなんだよ」

目的は定まった。

意思は重なった。

ならば後は倒すのみと、砂埃を上げて飛びかかってくる最強を二人は見据えた。

その後の試験結果は語るまでもない。

第38話

「お疲れ様です」

立てないくらい疲弊した兄さんとボロボロな姿のボスがモニター室に入ってきたので声をかけます。

オールマイトとの戦いは兄さん達の勝利、けど打倒したのではなく激闘の末にオールマイトの装着したハンデ用の重しが壊れたための勝利です。

そのため二人ともどこかスッキリしない表情ですが、学校としても本気オールマイトとの戦闘は許せませんから仕方ないですね。

兄さんはリカバリーガールにチューしてもらい私達とそのまま観戦します、さて他はどうなってますかね。

轟君と八百万さんの方は決着がつかしました。

自身喪失した八百万さんを轟君が頼ることで前を向くことができたからです。

彼女はなんでもできる、なんでもできるから躊躇いがダイレクトに影響してしまうのです。

体育祭を経て変わったサポートを意識する轟君、彼のおかげでヒーローの卵が息を吹き返しましたね。

それを想定してくませたイレイザーヘッドも凄い教育者ですが。

続いて芦戸さん上鳴君チームですが。

「上鳴く、放電で何とかできないー!」

「どこにいるかわかんねーのに無駄撃ち出来ねーよ、足手まといが欲しいか!」

「どわあ!」

「どこへ行けばいいのか、どこを探せばいいのかもわかんないよー」

「爆豪が勉強しとけつてのはこういうことかよ」

「酸で道作るにしてもどこを溶かせば崩れないかも分からないよ」

「こんな時にどこに電気使えば良いかも分からねえ」

「勉強しとけば良かったー!!」

彼らは重機にて崩される施設に逃げ惑い脱出するか、捕まえるかの判断すらできてませんね。

正面からではなく策を弄する存在が厄介なのは当然です。そんな時に何をすべきかの判断をするにはあまりにも二人は積み重ねが足りていない。

突破できる自力を活かしきれない知識と経験の無さ、それが二人の課題ですね。反省はしているようですが。

続いて口田君と耳郎さんチームですが、決着ついてますね。虫に泣き叫ぶ口田君を耳郎さんが励まして、心根優しい口田君が耳郎さんの負傷に気づいて奮起して勝ちました。

でも虫が怖いとか口田君といいプレゼント・マイクといいヒーローとしてどうなんですかね？これがシティ派なのでしょうか。

「緊急時の食料とかどうする気なんですかねあの二人？」

「緊急時だからといって虫は食べないよ」

「現代社会舐めんな前世持ち」

虫に纏わりつかれて気絶って、虫っぽい外見の方もいるでしょうに。

『やってられっかこんなクソ試験〜!』

不安要素はまだまだあるみたいですね。

まあ峰田君が厳しいのは分かりますが相手がヤバ過ぎです。それでも個人的に放課後訓練を共にした砂藤君が気になりますね。

切島・砂藤チーム。

「キリねーよオイオイ！ぶっ壊してもぶっ壊しても、壁生えてきやがる!!」

切島鋭児郎の硬化した拳がコンクリートを砕く、だが生える速度は砕く速度を上回り意味を為さない。

「来久のヤツがセメントスはヤバいって言ったのも納得だよ、反則過ぎる」

ロギア系能力者に匹敵する個性ですよねと意味の分からないコメントを彼はしていたが、その恐ろしさは今身を持って理解する破目になっていた。

「けどどうすんだよコレ!!」

「君達は消耗戦に極端に弱い。いいかい戦闘つてのはいかに自分の得意を押し付けるかだよ」

冷静なセメントスの一言は中の二人には届かない。コンクリートを砕ける自力もただ振るうだけでは意味を為さないのだ。

「冷静になれ切島、確か来久がこんな時どうするか教えてくれた」

「どんな内容だ!!」

「力押しが通じない相手には、力で押し通せつてな」

「それができねえんだよ!!」

「一番の得手がダメなら次善策は無意味だから、得意を押し通せつてことだな」

「だからどうやんだよ!!」

「決まってるんだろ、出すんだよ全力を」

放課後の自主練で学んだ全力の出し方、そして切島鋭児郎と言う存在の活かし方を砂藤力道はニヤリと笑いながら告げた。

「諦めたかな?」

静かになった試験場にガツカリだと言わんばかりにセメントスが呟けば返事のように轟音と衝撃が響き渡る。

「何?」

囲うように覆ったコンクリートは全て吹き飛び、その中央には筋肉を限界まで隆起させた砂藤力道がいた。だがそんな彼より目を引くモノがあった。

そう彼が両腕で持つモノ。

それは武器と呼ぶにはあまりに大きすぎた。

大きく、分厚く、重く、ゴツゴツして。

そして大雑把すぎた。

それはまさに烈怒頼雄斗な切島鋭児郎だった。

「なるほど」

モニター室にて砂藤君の考えに感心します。

「いやどういふこと？」

兄さんは友人が友人を武器にする衝撃映像に戸惑って思考できないみたいですね、普段ならブツブツが始まったもおかしくないのですが。

「殴るといふ行為は攻撃の代表みたいなものですが、その負担は馬鹿にできません。そもそも指という繊細な作業ができる部位は存外脆いものです」

故に殴るといふ攻撃は諸刃の剣、というか普通に避けるべき行為なのだ。

「砂藤君は鍛えた肉体にてコンクリートを殴り砕けますが、それはあくまで自分が怪我をしない程度の威力。つまり全力ではないのです」そして切島鋭児郎もまた同様だ。

「その点切島君は個性によって肉体の損傷は気にせずにすみませす。ですが硬化の個性は肉体を固めるため、殴ることに全力になれない」つまりコンクリートを砕ける実力があっても、二人共それは全力ではないのだ。

そんな中途半端ではセメントスによる消耗戦狙いは破れない、だからこそ。

「硬化のみに集中する切島君と振り回すことのみ集中する砂藤君。

全力の硬化と全力のパワーこそが現状を打倒できるのです」

重なりし二人の全力、まさに百パーセント中の百パーセント。

恐らく教師側の狙いは力押しではないやり方を学ぶことだろう。例えば目視でしか操作できないセメントスをどちらかが囿になって誘導し、もう一人がゴールを目指すような。

切島君と砂藤君の性格では難しいその選択を取れるかどうかが合否基準なのだろうが、あろうことか力技で突破しようとしていた。

「くっ」

セメントスが再度コンクリートを展開しようとするが覆う前に烈

怒頼雄斗を振るわれ砕かれる。

「もう、いいだろ」

シユガードープの副作用による限界。

それが間近に迫っていると自覚した砂藤は切島のベルトを掴み右手一本で持ち上げる。

投球の仕草に見えるそれ、だが振りかぶるのは最大硬化の切島鋭児郎。

残った砂糖を全て口に放り込み摂取し、爆発的に筋力を増大させる。

「これが最後の手段。烈怒頼雄斗ストライク!!」

投げられた切島はまさに砲弾の如き速度でセメントスに一本の槍となつて突き進む。

この瞬間、セメントスこと石山 堅の脳裏に自身の丸みに溢れた二十八年の人生が思い出されていた。

(強、速、避、無理!!受け止める無事で!?)

出来る!?! 否 死)

「セメントオ!!」

走馬灯後に巡った思考により自らに迫る死を個性をもって回避。

避けられた切島はそのままゲートを超えどこかへと飛んでいった。

「切島・砂藤チーム条件達成!!」

「やられたね、これが狙いかい?」

「本命は全力に秘す。これも来久の教えですから」

全力の切島投擲にてセメントス打倒はブラフ、本命は切島をゲートの先に運ぶこと。

だがその気迫と威力にセメントスとて吞まれてしまったのだ。

「とりあえず合格だな」

個性の副作用で砂藤は眠りに落ち、この期末試験は終了した。

「つて、砂藤と切島君の方がかりに集中してしまいましたね」

「同時に開始だから仕方ないよ」

「録画してるから後で見れるぞ」

とはいえ反則レベルなセメントスの真正面からの打倒は大きな成果でしょう。

あの二人の戦法、武装色の覇気を組み合わせたらより強力になるでしょうし。

「麗日さんと青山君はクリアしたけど微妙かな？」

「ありや13号のミスだからな」

「峰田君と瀬呂君は、峰田君の頑張りでなんとかなったよ。かつちやんのヒーロー殺しとの対話で奮起してみたよ」

「モテたくても、誰か救えりやいいんだよ。」

瀬呂は最初の峰田を庇ったのが評価されたら良いんだけどな」

「結果として、演習試験で条件達成ならずは芦戸さんと上鳴君チームですか」

それだって反省してたから無益ではないだろう。

何はともあれ、期末テストこれにて終了です。

第39話

演習試験が終わって翌日。

朝の教室で絶望に顔を染めた芦戸さんと上鳴君の姿がありました。底抜けに明るくお調子者で、女子と男子のムードメーカー代表とも言えるこの二人。

そんな彼らに雄英高校一年の夏のメインイベントに参加できないことは正に死刑に等しいのです。

日頃から勉強してないせいだ、ときちんと反省していますが、それでもあの校長に勝てるかは微妙でしょう。はつきり言って視認できない場所に校長がいる時点でその戦場は詰みなのですから。

周りの慰めの言葉も耳に入らず、時折逆ギレしながらも彼らは落ち込むのです。

まあ間違いないく一番評価低い瀬呂君ですが、防毒マスクなどの装備で対処できるのに怠ったわけですから。あと青山君もギリですね、麗日さんは捕縛したからなんとか。

とりあえず色々くれと叫ぶのでオールマイトチョコ（兄さんがオマケ目的で買ったヤツ）を渡してあげました。

そして現れる相澤先生。
いつものように重苦しい雰囲気を出しながらまず期末テストの結果から。

「林間合宿は全員行きます」

いつものように合理的虚偽ですねハイ、そろそろ合理的配慮も見せてよいのではないかと。

追い込むために不参加チラつかせましたが、事前情報のせいで緩んでましたからね。

しかし勝ち筋ですか、校長にありましたかね？落ち着いたら正解のルートでもあったのでしょうか？

まあ喜ぶ三人ですが、学校に残ったの補習よりキツイ勉強を合宿中にするそうなので再び絶望してましたね。反省から異論はないよう

ですが。

配られたしおりに記入された予定、一週間の強化合宿ですか、必要なモノが多いですね。

準備に盛り上がる中で葉隠さんがA組みんなでの買い物提案しました。テストでの疲れをパーツと晴らしたいのでしょうか。

「ボスも行きますか？」

「必要なものなんかねえから行かねえ」

「登山が趣味だからか道具類揃ってますしね」

私も買い物に行く気はないです。

轟君も見舞いで不参加のようですね。

「ノリが悪いよ、空気読めやKY男子共!!」

峰田君の声を聞き流して参加を断ります。人混みは苦手なんです。

ましてやボスなんかヒーロー殺しの件で知れ渡っているから行つたとしても買い物どころではないでしょう。

クラスの和を乱すようで心苦しくは思いますけどね。

この時の判断が誤りだとは思いません。

けどもし参加して死柄木弔を打倒していたのならば、未来はもつと良くなっていたのではないか。

私はそんな後悔をすることになるのです。

木榔区ショッピングモール。

多くの人々で賑わうその場所に、雄英高校一年A組の姿があった。放送により顔の知られた彼らは時折人々から声をかけられながら各々の買い物を楽しんでいた。

そんな中、一人の少年が窮地に陥っていた。

ファンを装い接触してきた男。

ヴィランを率いて雄英高校を襲撃し、一人の生徒 緑谷来久に返り討ちにあった男。運命、因縁めいた出会いと嘯く彼は死柄木弔と言う。

先日の事件、ヒーロー殺しの一件から揺らぐ社会。かの大事件の一

人の首謀者であるにも関わらず、なぜか置いてきぼりのような気分
に晒され彼は、自らの嫌う大衆の中を埋没するかのように彷徨つて
いた。

彼は嫌う、この社会を。

ヘラヘラ笑う人々を、危機感に染まらぬ日常を。

その中で生きれぬ疎外感は嫌悪となつて彼に不快さを与える。

あるいは緑谷来久なれば理解を示すその感情を彼は完全に持て余
していた。

ゆえにその感情の捌け口として自身の目論見を台無しにした二人
の関係者、緑谷出久を選んだ。

「だいたいなんでも気に入らない」

その一言こそが彼の本音なのだろう。

一人の命を握りながら言葉を紡ぐ。

緑谷出久との問答、そこに答えを探る。

緑谷出久はヒーロー殺しに理解を示してしまう、弟である来久はた
だの殺人犯と一蹴し、幼馴染である爆豪勝己はその被害から嫌悪する
存在を。

始まりがオールマイト、それだけの理由で。

そして、だから自分はヒーロー殺しが気に入らないのだと、死柄木
弔は理解した。

「お前の弟と幼馴染なら、んな事言わねえんだろうな。アイツらの始
まりはオールマイトじゃないから」

だから気に入らない。

厄介だと思っても嫌悪しない。

「オールマイトのいない世界を創ろう。それでこのニヤけた世界がど
うなるか見てやろう」

死柄木弔の再始動。

爆豪勝己と緑谷来久の不在という幸運に感謝しながら彼は一步踏
み出した。

形容できない自ら内から溢れて止まらない悪意の向ける先を見つ
けて。